年報

平成 26 年度

OitaUniversity of Nursing and Health Sciences

公立大学法人大分県立看護科学大学

平成26年度の年報発行にあたって

大分県立看護科学大学は、平成 10 年に開学後、平成 26 年度末で丸 17 年になります。開学以来、毎年、年報をまとめ、足跡を残してきました。

平成 26 年度は、特筆すべき年でした。6 月に、「地域における医療及び介護の総合的な確保を推進するための関係法律の整備等に関する法律」が成立し、保健師助産師看護師法が改正され、「特定行為に係る看護師の研修制度」が創設される運びとなりました。この制度創設には、本学が、全国に先駆けて平成 20 年度に開始した大学院修士課程における NP 教育の実績が大きく貢献しています。この制度創設を受けて、本学では、従来大事にしてきた臨床推論能力の教育を堅持にしながら、特定行為を大学院修士課程の NP コースで教育できるようにカリキュラムを見直し、平成 27 年 10 月の制度創設に備えています。

平成26年度は、また、平成23年度から開始した学部の新カリキュラムの完成年度に当たります。この新カリキュラムでは、現代の保健医療福祉の多様なニーズに応え得る看護師を育成するために、学士課程の 4 年間をかけて看護師教育を行うようにし、同時に、大学院修士課程で保健師教育を行うようにしました。両方とも、全国初の試みです。また、平成25年度に文部科学省の「地(知)の拠点事業」として採択された「看護学生による予防的家庭訪問実習」に関して、平成26年度は協力者8名を得て、1年から4年まで計33名の学生が家庭訪問を行いました。予防的家庭訪問実習は、平成27年度から本格実施に入る予定です。

この年報は、上記のような大きな流れの中で、教員と職員が取り組んできた実績をまとめたものです。教育活動と研究活動（学内プロジェクト、先端・奨励研究、研究助成金獲得状況）、その成果としての業績、更に、地域貢献の状況が示されています。特に、地域貢献では、教員が専門性を生かして大分県内や全国で活動し、かつ、大分県内の病院で研究指導を行い、その病院同士の交流会が行われていることが記されています。また、業績の項からは、上述したNP教育やその成果が国際誌にも掲載されていることが分かります。

このような実績は、本学を大事に思い、支えてくださった方々のお蔭です。心からお礼申し上げます。本学は、これからも、大分県の看護学の拠点として、教育・研究・社会貢献を通して看護の水準の向上に努め、着実に歩みを重ねていきたいと思います。

年報をお読みになって、忌憚のないご意見、また、ご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

大分県立看護科学大学
学長・理事長　村嶋幸代

年報

もくじ

1.	委員会／ワーキンググループの活動	1
2.	学内行事の概要	24
3.	教育活動	28
4.	学内セミナー	108
5.	学内プロジェクト研究	109
6.	先端研究	111
7.	奨励研究	112
8.	インターネットジャーナル「看護科学研究」	114
9.	業績	115
10.	地域貢献	128
11.	助成研究	138
12.	各種研究・研修派遣	141
13.	学会研究者の受入	142
14.	役員及び審議会委員名簿	143
15.	教職員名簿	144

１　委員会／ワーキンググループの活動

１－１　理事会

委員　　理事長：村嶋 幸代
　　理事：市瀬 孝道、甲斐 倫明、堤　健一（以上、学内理事）
　　野口 隆之、小寺 隆、高橋 靖周（以上、学外理事）
　　監事：神品 寛子、岩尾 隆志

理事会の役割は、法人の運営に関する重要事項を審議することである。

本年度は５回の理事会を開催し、教育研究審議会報告の後、年度計画に関する事項、地方独立行政法人法により知事の認可又は承認を受けなければならない事項、重要な規程の制定又は改正、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価などについて審議した。

なお、理事会構成員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も密接に関係することから、経営審議会と同時に開催した。

１－２　経営審議会

委員　　理事長：村嶋 幸代
　　理事：市瀬 孝道、甲斐 倫明、堤　健一（以上、学内理事）
　　野口 隆之、小寺 隆、高橋 靖周（以上、学外理事）
　　千野 博之、上子 秋生、松尾 和行、松原 啓子（以上、経営審議会委員）

経営審議会の役割は、法人の経営に関する重要事項を審議することである。

本年度は５回の経営審議会を開催し、年度計画に関する事項のうち法人の経営に関するもの、地方独立行政法人法により知事の認可又は承認を受けなければならない事項のうち法人の経営に関するもの、重要な規程の制定又は改正に関する事項のうち法人の経営に関するもの、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価に関する事項のうち法人の経営に関するもの、組織及び運営の状況について自ら行う点検及び評価などについて審議した。

なお、理事会構成員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も密接に関係することから、理事会と同時に開催した。

１－３　教育研究審議会

委員　　村嶋 幸代（学長）、市瀬 孝道（学部長）、甲斐 倫明（研究科長）、
　　葉玉 哲生（学外委員）、各研究室代表者、各委員長、堤 健一（事務局長）、総務グループリーダー

教育研究審議会の役割は、大学の教育研究に関する重要事項の審議を行なうことである。本年度は13回の教育研究審議会を開催し、各種委員会報告を行うと共に中期目標・中期計画に関する事項、学則の改正、学長選考、学生の就業、進級判定、休学、復学、退学、学位の授与に関する事項、教員の人事及び評価に関する事項、教員の自己点検・自己評価に関する事項、各種諸規程等について審議・承認した。各回の教育研究審議会の議事内容は理事会にて報告された。

１－４　教授会

構成員　村嶋 幸代（学長）、市瀬 孝道（学部長）、各教授、各准教授、各講師、
堤 健一（事務局長）

教授会の役割は、大学の教育課程の編成に関する事項、学生の入学、卒業、その他在籍に関する事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項の審議を行なうことである。本年度は４回の教授会を開催し、学部入試の合否判定、卒業判定および学生の表彰（学長賞、卒業研究の優秀賞、学生賞）に関する事項について審議・承認した。教育研究審議会で審議・承認された休学、復学、退学、進級判定についての事項は教授会で報告された。

１－５　研究科委員会

構成員　村嶋 幸代（学長）、甲斐 倫明（研究科長）、各教授、各准教授、各講師

研究科委員会では、大学院の教育課程における学生の入学、修了、その他在籍に関する事項及び学位の授与に関する事項の審議を行った。

１－６　自己評価委員会

構成員　吉村 匠平、平野 亙、猪俣 理恵、小嶋 光明、河野　梢子、朝倉 泰三

１．FD活動

（１）４月１～２日、教職員14名を対象に、新入職員研修を開催した。年度末に、参加者対象に調査を行い、次年度のプログラムを修正した。

（２）海外短期研修派遣者２名、国内短期研修派遣者２名だった。
ただし、海外短期研修派遣に関しては研究旅費を使用することとなった。

（３）４月７日、倫理審査申請に関する学内研修会を開催した。参加者50名。

（４）看護学実習を担当する教員が交流し、学生・指導法に関する意見交換を行う場として「助助会」を開催。今年度より年3回の開催とした。４月23日（15名）、７月28日（14名）、12月25日（14名）参加。

（５）７月25日に全教職員を対象とした科研費申請講習会を開催した。平成26年度科学研究費補助金申請状況は、新規申請37件、新規採択８件、継続は11件だった。

（６）７月25日、東京有明医療大学前田教授を招聘し、「ITと教育・研究活動」をテーマにFD研修を開催した。参加者40名。

（７）３月６日にアニュアルミーティングを開催した。本年度より全てポスター発表（18件）とした。

（８）大分県内で行われるFD関連の研修会に関する情報をメールで教職員に通知した。

（９）教員１名が、佐賀大学が主催するティーチングポートフォリオ作成ワークショップに参加し、ポートフォリオを作成した。

２．授業評価、カリキュラム・卒業アンケート

（１）授業及び実習指導の改善に必要な資料を得るため、学生による授業評価を継続して行った。重複による学生の負担を考慮し、原則として希望者による年１回までの利用とした。３年間継続してアンケートを実施していない場合に、対象者にその旨連絡をした。授業評価実施者３名、実習評価実施者５名。

（２）本学の教育活動全般について資料を収集するため、２年次修了時（進級試験後）および卒業時点（卒業研究発表会後）にアンケート調査を行った。結果を学内webに公開した。

３．議事録整備
　委員会議事録の学内ウェブへの円滑なアップロードを促すため、７月、12月、３月の３回アップロード状況を確認し、委員会に対応を依頼した。
４．人権啓発・ハラスメント防止
（１）12月19日に、公益財団法人ハイパーネットワーク社会研究所　副所長　渡辺律子氏を招聘し、「SNSについて大学教員が理解すべきこと」をテーマに研修を行った。34名参加。
（２）昨年度に続きNPO法人えばの会に学外相談機関を委嘱した。
（３）学外調査委員に関する規定に基づき、二宮孝富大分大学名誉教授に委員を委嘱した。
（４）ハラスメント相談員への相談は１件。
（５）ハラスメント相談員の転出に伴い新委員を２名委嘱した。

１．外部評価に向けた環境整備を行う。
２．学内の各種研修支援事業を整備する。

１－７　教育研究委員会

構成員　市瀬 孝道、中林 博道、佐伯 圭一郎、梅野 貴恵、藤内 美保、小野 美喜
（事務局）染矢 哲朗、堤 建一
（オブザーバー）甲斐 倫明、村嶋 幸代

教育研究委員会は学生の教育と教員の研究を効果的かつ円滑に行うために教育・研究関連の活動と教育・研究予算の策定を行っている。本年度も例年どおり11回の教育研究委員会を開催した。

1) 国家試験対策に関しては、解剖、生理、病理、薬理等の基礎試験を９月に実施し、国家試験の補講も９月より実施した。模試に関しては例年どおり国試直前まで実施した。平成26年度の国家試験受験生は看護師のみの教育となった平成23年度カリキュラムの初めての卒業生であったが、看護師の国家試験は１名が不合格となり100%達成することができなかった。平成23年度カリキュラム前に入学した受験生の助産師と保健師の国家試験合格率は100％であった。
2) 看護学実習（第１段階～第５段階）関連では、実習代表者会議のもとで全体の実習日程調整や教員・学生配置等を検討し、本委員会で最終決定した。実習関連WGに関する活動内容は下記に記述した内容によって看護実習の充実を図った。
3) 卒業研究に関しては、３月末に各研究室の卒論研究テーマを収集し、テーマや指導内容について調整を行なった。また県立病院、大分日赤病院、アルメイダ病院における卒論研究が研究内容や調査フィールドが重複しないように調整した。
4) 卒業研究関連では卒業発表会のサポートグループ（SG）を設置し、卒業研究発表会要旨集と卒業研究論文集の作成、卒業研究発表会のセッティング・進行を行った。平成26年度の各研究室学生配置決定に関しては教育研究委員会で行った。卒業研究の優秀賞は教育研究審議会にて基礎・看護系教員から７名の査読委員を選出して実験研究と調査研究の２件を選別し卒業式に授与した。
5) カリキュラム関連では、養護教諭１種科目とCOC事業予防的家庭訪問実習を加えて、カリキュラム全体を見直した平成27年度カリキュラムを10月末に文科省に変更承認申請して、11月26日付けで承認通知を受けた。また、昨年から導入を検討していた養護教諭１種養成課程についても５月に文部科学省に申請し、平成27年２月４日付けで認可通知を受けた。
6) COC事業の予防的家庭訪問実習の試行実習を８グループが実施し、そのうちの１グループが4回、５グループが３回の家庭訪問を実施し、事業報告会を野津原地区と富士見ヶ丘地区で平成27年１月21日と28日に本年度の事業報告会を実施した。

7) ４年次生を対象とした総合人間学の開講にあたっては例年より１ヶ月早めて９月18日よりスタートとし、講師の選定を行って、SGの協力により、全８回（県外講師３名）の講義を実施し、外部からの参加者も多く見られた。
8) 進級試験は、進級試験WGによって試験問題を選別し、２月26日に本試験を行い、再試験は、３月５日に実施し、２年次生全員が合格した。
9) 競争的研究費に関しては研究期間を１年と２年で終了するプロジェクト研究、先端研究、奨励研究を設けて、ヒアリングを行い、プロジェクト研究１件、奨励研究４件、先端研究４件採択した。
10) 研究支援旅費に関しては、集会用と研究活動用の旅費申請10件を承認した。
11) 平成26年度前期・後期の科目等履修生の募集を行ったが、本応募者はなかった。
12) 教育研究委員会が担当する平成26年度の年度計画に関しては、全て遂行し、100％達成することができた。来年度計画としては、COC事業の予防的家庭訪問実習や養護教諭１種を含めた平成27年度新カリキュラムの１年目の検証を行う。

１） 国家試験対策ＷＧ

構成員　梅野 貴恵、小嶋 光明、石岡 洋子、岡元 愛、河野 梢子、後藤 成人、中釜 英里佳、水野 優子、染矢 哲朗、神崎 正太

平成26年度の国家試験受験対象者は看護師82名、保健師８名、助産師３名（大学院生）であった。保健師・助産師・看護師国家試験合格率100％をめざし国家試験対策WG会議を８回行った。教員は、学生の対策委員と連携し役割分担を決め計画を立案、実施した。具体的活動は、国家試験ガイダンスを４月に実施、基礎学力試験（解剖・生理を中心とした問題）を９月に実施し、学生の学習への自覚を促した。また模試は、業者模試（看護師８回、保健師２回、助産師２回）、学内模試（看護師３回、保健師５回、助産師３回）を実施した。特に看護師模試結果を分析し、成績不振の学生に対して、7月に集団面接、12月に個別面接を実施し学習・生活状況を確認し国家試験へのモチベーションを喚起した。12月の卒論発表後から、成績不振学生数名に対してWGの教員が小グループでの学習支援や学習進捗状況の確認を行った。また、卒論配置研究室の教室主任に現状を報告し、学生の状況を把握していただき指導強化を求めた。３月25日に発表された合格率は、看護師98.8％（１名不合格）、保健師・助産師は100％であった。

２）　実習代表者会議

構成員　藤内 美保、梅野 貴恵、小野 美喜、影山 隆之、桜井 礼子、佐藤玉枝、高野 政子、林 猪都子、伊東 朋子

本会議は実習運営を行う研究室の責任者で構成している。今年度、実習に関する新たな取り組みとして以下のことを行った。

1) 最終の総まとめとしての看護スキルアップ演習で卒業生をアドバイザーとして招き、看護スキルアップ演習を４年次後期に行った。担当教員は（藤内、石田、赤星、秦、佐藤弥生）急性期、慢性期、回復期、ターミナル期の事例を担当し、事例ごとに学内教員と実習施設の卒業生にアドバイザーとして依頼した。卒業生のコメントで4年生は、現場の具体的な説明と卒業生の姿に刺激を受けて、良い効果が現れた。
2) 平成27年度改正カリキュラムに向けて、全実習施設を対象に実習指導者説明会を12月24日に開催した。聖隷浜松病院の副看護部長（教育担当）の田島美穂子氏の講演も行った。ほぼ全施設からの参加があり、大学の方針が理解できた、実習指導の心構えを改めて認識できたなど、来年度も説明会の開催を希望する指導者が多かった。また病院、老人保健施設や訪問看護ステーションなどの施設毎に情報共有できる場が欲しかったといった意見もあり、来年度の課題としたい。
3) 初期体験実習を基礎看護学研究室が担当し、目的や方法を変更し、実習要項の共有を図った。学生全員が病院における看護師との同行実習と、今後将来ビジョンが描けるように様々な活動を生き生きとしている看護職による講話を設定する。また病院実習での実習方法は、１年次の最初の実習から、学生がしっかりと実習要項を読み、自分の行動に責任がもてるような意識づけをするために、具体的な内容を記載することとした。
4) 実習施設との出欠席における連絡体制の整備を行った。基幹実習施設との学生の出欠席に対する連絡体制について、実習施設と共通文書で確認するものがなかったので、連絡体制、連絡順序などをフローシートを作成し、施設と共有した。また、欠席者の連絡は専任教員が迅速に連絡することを再確認した。
5) その他、毎年の実習に関する継続検討として、学生の感染症対策として、特に風疹抗体検査で母性看護学や小児看護学実習では、抗体価の低い学生に対する対応や実習配置を検討した。

３）　実習関連ＷＧ

構成員　小野 美喜、赤星 琴美、石岡 洋子、石田 佳代子、植田 みゆき、草野 淳子、桑野 紀子、後藤 成人、佐藤 弥生、秦 さと子、中釜 英里佳

実習関連WGは、教育研究委員会のもと、看護系研究室からそれぞれ１名を選出し、月１回の定例会議を開催し主に実習に関連し以下の活動を行った。

１．実習センター及び各領域の実習施設の実習環境の整備等

２．実習に関連する文書等の見直し

・実習ガイドブック/個人情報の取り扱いに関するガイドライン/事故対応マニュアル等実習ガイドブックには、実習時に問題となったSNSの使用に対する留意事項および記録紛失のための対応について記載を充実させた。

３．看護技術修得プログラムの企画・運営・評価

・新新カリ（第１～４段階）の企画・運営・評価

４年次の新たに実施する第3段階看護技術演習は、Eラーニングおよび在宅・総合看護学実習をイメージした自主的な演習としてプログラムを展開し評価を行った。履修生全員がEラーニングとグループ学習を展開できた。

４．新新カリキュラム総合看護学実習の展開

４年生の最後の実習としての目標を新たに設定し、看護マネジメント、夜間実習、多重課題等を経験する実習、および成果発表会を導入した。発表会での学生からの発言が少なく、発表会運営は来年度の課題である。

５．実習関連予算の管理

６．Webページの活用（看護学実習に関する資料）

７．看護技術修得確認シートの活用の促進

・新新カリキュラムにおける看護技術習得状況を調査し評価を行った。

４）　進級試験ＷＧ

構成員　中林 博道(12月まで)、佐伯 圭一郎、石田 佳代子、松本 初美、定金 香里、田中 佳子

今年度試験作成のための出題基準・出題範囲を確認し、各教員に問題作成依頼を行い、学生へは７月７日に進級試験ガイダンスを行った。平成27年２月26日に２年次生79名に対し進級試験を実施した結果、23名合格、56名が不合格となった。

不合格者に対し３月５日に再試験を実施した結果、56名が受験し、その全員が合格した。

１－８　学生生活支援委員会

構成員　桜井 礼子、宮内 信治、関根 剛、石岡 洋子、岩崎 香子、江月 優子、巻野 雄介、工藤 哲生、工藤 優

学生生活支援委員会の主な活動として、学生生活が快適かつ充実したものとなるように、昨年度と同様、４月の全学オリエンテーションをスタートに、コンタクトグループ、新入生宿泊研修、スポーツ交流会などの行事の企画・運営を行った。特にコンタクトグループ活動では、４月のオリエンテーションでの顔合わせ、スポーツ交流会に加えて、12月にもコンタクトグループで集まる日を設定、学生同士の交流および情報交換の場となっていた。また、年間を通して、休学中の学生の支援や、交通安全、健康管理に関すること、奨学金等に関することなどについての相談と支援を行った。さらに、学生生活実態調査を実施するとともに、今年度から１年次～３年次までの担任を複数とし、学年担任を中心に学生への個別面談などを実施し、事前の問題把握と解決に努めた。１年次～３年次までの担任を複数としたことや、保健室の担当者からの要望により、メンタルに関するコンサルテーションができる医師が確保できたことで、担任と保健室の担当者とで連携をしながら学生をサポートする体制の充実が図られたと考える。

今年度は、複数の担任制の導入や保健室でのメンタルヘルスの問題に関するコンサルテーション先の確保により、学生へのサポート体制の充実を図ることができたと考える。しかし、学生生活の支援だけでなく、学習支援を含めて、学生の留年、休学、退学をいかに減らすかは継続して取り組んでいく必要がある。次年度からは１年次～４年次生が１グループとなって予防的家庭訪問が開始となり、このグループでコンタクトグループが構成されることから、学年間の交流が活発になることが期待される。一方、学生相談に関わる教員や保健室の担当者のカウンセリング能力や問題解決能力の向上のための研修参加について、次年度の計画に組み込む予定である。

１－９　就職支援委員会

構成員　林 猪都子、品川 佳満、杉本 圭以子、田中 佳子、河野 優子、小川 三代子、堤 健一、工藤 哲生

学生の就職の円滑化と県内就職率50％を目指して、就職活動を支援し年間計画に沿って活動を行った。

１．求人数、求人件数、求人訪問対応：求人数（件数）は、全国 19631人（413件）、大分県 156人(30件)であった。全国からの求人訪問対応は52件であった。
２．学生の就職・進路状況：卒業生82名であり、就職決定者75名（保健師２名、看護師73名）、未定者１名、進学者６名であった。学生に対しては各委員が分担して、学生への個別支援を行った。必要な学生には個々にメールで情報を提供した。
３．就職相談室：就職相談員１名を配置し、第２、４水曜日の午後に学生の就職相談を実施した。就職相談員は３、４年次生全員に就職面接を実施し、学生の就職希望に関する実態を把握し相談にのった。
４．県内施設就職説明会：３年次生対象に県内施設就職説明会を開催した。（３/２；25施設参加）説明会の方法は午前と午後の２部に分けて学生全体へ施設概要を説明し、その後個別相談を行った。個別相談は学生が座ってじっくり話が聞けて好評であった。
５．県内施設実習基幹病院と卒業生との交流会：看護研究交流センター継続部門と連携し、卒業生との交流会を６施設（大分県立病院、大分大学医学部付属病院、大分赤十字病院、湯布院病院、アルメイダ病院、国立病院機構別府医療センター）で開催した。参加者は実習施設44名、卒業生67名、教員61名（延べ人数）であった。卒業生の病院での活動状況、学部生の様子、学部生へのメッセージ、大学への要望など有意義な意見を得ることができた。
６．就職ガイダンス：３年次生対象に就職ガイダンスを７/２（水）、2015年2/26（水）の２回開催した。
７．身だしなみ講座：４/16（水）４年次生、2015年２/26（木）３年次生対象に、株式会社フタタに講師を依頼し、身だしなみ講座を開催した。スーツの基本的な着こなしについて学び、学生から多くの質問があり就職面接に役立てることができた。
８．面接講座：個人面接講座はマイナビに講師を依頼し、７/15（火）４年次生を対象に開催した。
９．模擬面接：模擬面接を８回開催し61名の学生に実施した。
10．県内施設インターンシップ：７月と２月に県内のインターンシップの開催状況を伝えて、学生に参加を促し、学生に就職選択に関する支援を行った。
11．施設奨学金の一覧表作成：本年度施設奨学金を実施している10か所の施設の詳細を、一覧表に作成して学生に提示した。
12．就職推薦施設の一覧表作成：本年度就職推薦を実施している5か所の施設の詳細を、一覧表に作成して学生に提示した。
13．就職対応卒業生名簿の作成：本年度就職対応を実施した中で、10施設に就職している卒業生を確認し、就職対応卒業生名簿を作成した。

本年度は県内出身者が56.1％で県内就職率は40.0％であった。県外に集団で就職する学生が多かったことと保健師、助産師の就職が軽減したことによるものと思われる。今後県内就職率を50％確保するための方策として、第２回就職説明会に卒業生の参加を予定している。また、実習基幹施設の本学卒業生との交流会の開催は、年間４施設として、来年度は新規に国立病院機構大分医療センターと厚生連鶴見病院を予定している。

１－10　広報・公開講座委員会

構成員　高野 政子、関根 剛、安部 眞佐子、松本 初美、後藤 成人、岡元 愛、安森 竜次

1)若葉祭

５月17日、18日の若葉祭において教員イベントの企画募集と当日運営を実施した。教員企画は健康教育等の大学学部教育の一部内容や設備の紹介など12企画を開催し、参加者は２日間で709名であった。教員イベントは、一部学生に協力者として数名ずつ配置してもらい実施することで、学生と地域の人々とのふれあいの場ともなっている。研究紹介では、全研究室の卒論をポスター掲示し、学部で行う研究を掲げることで興味をもってもらう事を狙いと今年初めて取り組んだ、その他、広報活動として、７月開催予定のオープンキャンパスの案内チラシ、大学案内パンフレットを研究棟入口に配置し、一般の方々や進学予定者にも大学の内容が伝わるように配慮した。

2)オープンキャンパス

平成26年度の開催は、夏休み中の７月20日（日）に実施し、参加者は314名(昨年比プラス14名)で、保護者91名と参加が多く本学について大いにアピールできた。講堂での説明会・体験イベントなど教職員全員と学生の協力者とで取り組んだ。食堂も営業してもらい、保護者等来学者に利用してもらった。教育・研究の展示はパネル展示物を一部新規作成した。学生自治会によるTAKIOソーランや学生の話が聴ける合格体験発表や在学生からのメッセージ、教員による模擬授業などを企画した。在学生が相談コーナーや実習室への誘導を行うことで、高校生や保護者には在学生との交流の機会ともなり、入学後のイメージを深めることができたと思われる。

3)地域ふれあい祭り

平成26年度の地域ふれあい祭りは、11/２（日）に開催された「ななせの里まつり」参加者5000人（主催者発表）に参加した。大学に隣接するみどりマザーランドで開催された。大学紹介はテント内でのパネル掲示と、大学案内パンフレット配布やCOC地の拠点事業の紹介を行った。ブースの来場者は地元住民で、約50名であった。その他、イベントの駕籠かきレースには学生や学長はじめ教職員等5組が参加し活躍した。また、健康増進プロジェクトと協働し、血圧測定、体成分分析、栄養評価などの健康指導・健康チェックを実施した。

4)出前講義

看護系進学を希望する高校生を対象とした高校の出前講義に講師を派遣した。高校からの依頼で、助教以上の教員を派遣した。県立杵築高校(６/19)、中津南高校(７/9台風の為中止)、中津北高校(７/25)、安心院高校（９/25）、佐伯鶴城高校(10/10)、大分鶴崎高校(10/20)、三重総合高校(12/22)、私立大分高校(11/21)、および宮崎県立宮崎北高校(11/29)等に、大学案内パンフを持参し広報した。

5)大学見学

オープンキャンパスに参加できなかった高校生や保護者の大学見学等の希望者、申し込みに随時対応した。高校からの大学訪問は、由布高校（７/14）　1年生40名（教員２名込)、大分西高校（11/13）PTA24名が来学した。学長はじめ教職員で大学概要、入試や卒業後の進路についての説明、最後に施設見学等を実施した。

6)大学オリジナルグッズの作成

大学名の入った大学オリジナルグッズを作成し、大学広報の１つとして活用できるようにした。クリアファイル（2000枚）には大分県のメジロンが温泉に入るおんせん県おおいたキャンペーン入りとした。また、おんせん県おおいたのロゴ入りUSBメモリースチィックを200個新規に作成した。

7)大学ＨＰおよびマスメディアによる広報

大分県広報広聴課の広報番組であるTOSテレビの「ほっとハート大分」では「－夢をかなえるために　看護科学大学に行こう－」６月28日（土）15分番組が放送された。準備は４月より打ち合わせ会議を持ち、津久見市などで活躍する卒業生や学部生の実習を取材してもらい、オープンキャンパス（７/20）の広報に活用した。その他、新聞、テレビ、ラジオ等に情報提供や取材依頼を行い、記者及び取材班の対応を担当した。大学ＨＰでは、大学アルバムで学生消防隊の発足や大学イベント、学生のボランティア活動などの社会貢献活動についても随時に公開した。また、教員の研究紹介を毎月更新し11件を掲載した。定期的に年３回、大学HPに掲載している大学Q&Aを更新し、入試情報等を新たな記事にして公開した。

大学イベントの開催については、定期的に県政記者クラブに情報提供を行い、情報発信を行った。

大分合同新聞での学長の連載記事や、教員の紹介など21件が掲載された。

8)大学案内パンフレット

５名の教員と委員会委員とでWGを運営した。2016年度版として次年度４月に納品予定とし、４月から開始する入試委員会の活動にて活用した。

9)公開講座

平成26年度は第１回「災害に備える看護職の役割」と題した有料公開講座を９月６日に、大分駅前のホルトホール大分で開催した。参加者は97名であった。第２回「看護職のための放射線の基礎知識」とし、小嶋 光明講師が講師として、臼杵市で開催した。参加者は20名であったので、合計で117名が公開講座を受講した。パンフレットを作成し県下の病院や施設、保健所への配布、市報など地域広報に加え、マスコミ（大分合同新聞・月間ぷらざ・シティ情報おおいた）や行政機関等、講座内容に関連のある看護協会、病院等に参加を呼びかけた。

広報活動に用いる教育活動や地域貢献の情報収集をどうするかか課題である。次年度は大学をアピールするための題材を委員会で集約するシステムを検討する。

１）　大学案内パンフレットＷＧ

構成員　秦 さと子、定金 香里、石川 純也、河野 優子、森田 慶子、安森 竜次

2016度版大学案内は、「未来創造」をコンセプトとして作成した。社会に生きる一人ひとりを活き活きと輝かせることができ、自分の未来も創造していけるような人材の育成を目指していることを意味している。

作成にあたり特に工夫した点は次の通りである。①年次を重ねるごとに学生が成長していく教育体制を年次ごとに写真でイメージしやすいように示した。②看護学だけでなく人間科学系の教育の充実がわかるように工夫した。③段階的な実習と実習段階に合わせて構成された看護技術演習の構造をわかりやすく表現した。④本学の充実した施設の紹介方法の見直し：実際にどのように使用するのかがわかるように写真で表現した。⑤多くの教員の写真を載せることで親しみやすさや身近な存在であることを表現した。⑥キャリアパス図：本学から様々な未来へ後押しできることを示した。⑦大学院では各コースの特長がわかりやすいように提示項目を統一した。

４月中旬に完成し、若葉祭を始め、広く本学の広報活動に活用される予定である。

２）　英文大学案内パンフレットＷＧ

構成員　Gerald T. Shirley、猪俣 理恵、岩崎 香子、桑野 紀子、馬場 奈穂、定金 香里、キット 彩乃、安森 竜次、中野 麻梨子

本学の特徴と教育内容・活動を英文でまとめ、対象が主として海外の教育・研究関係者であることを考慮した“University Bulletin”を３年に１回の計画で改訂する。

３）　大学広報紙ＷＧ

構成員　堤 健一、巻野 雄介、朝倉 泰三、安森 竜次、池邉 尚美、佐藤 めぐみ

平成24年度に後援会との協働で創刊した大学広報紙「風のひろば」の第４号及び第５号をそれぞれ７月、３月に発行した。本学の現在の取組や地域との協働事業、トピックス、研究紹介などを掲載し、在学生の保護者や卒業生を始め、関係機関に配付、広く情報発信を行った。

４）　学外WebＷＧ

構成員　品川 佳満、岩崎 香子、河野 優子

学外Webサイトの情報の更新・掲載（大学案内、入試・入学案内、イベント案内・報告など）および管理・運営を行った。

５）　英文WebＷＧ

構成員　Gerald T. Shirley、猪俣 理恵、定金 香里、馬場 奈穂、キット 彩乃、馬場 奈穂

海外の利用者を重視した内容とし、学内行事等の報告掲載を随時行うことで、常に最新の情報を分かりやすく閲覧できるようにした。

１－11　国際交流委員会

構成員　Gerald T. Shirley、猪俣 理恵、崔 明愛、松本 初美、桑野 紀子、キット 彩乃、
石川 純也、石川 華子

国際交流委員会が平成26年度に行った活動は以下のとおりである。

1）ソウル国立大学校派遣学生受け入れと交流

ソウル国立大学校看護大学から大学院生２名、学部生５名および同行教員１名の計８名（７月20日～７月27日までの８日間）を本学に受け入れ、日本の医療・保健・福祉について理解を深めた。本学では、学生および教員がサポートグループとして交流を支援した。

2）本学の学部生および大学院生の派遣

大学院生１名、学部生６名および同行教員１名の計８名を（８月17日～24日までの８日間）ソウル国立大学校看護大学に派遣した。韓国の医療・保健・福祉制度、看護について視察等を行い、理解を深めた。報告はWebに掲載した。

3）第16回看護国際フォーラムの開催

大分県看護協会と共催である看護国際フォーラムを平成26年10月25日（土）に別府ビーコンプラザ国際会議場にて開催した。「よりよい看護実践をめざしたNP教育と研究」をテーマとし、アメリカから１名、韓国から１名の講師を招聘し、本学から学長を含む３名の教員が講演し、総合討論を行った。参加者は254名と盛況であった。

4）NP国際会議の開催

平成26年10月24日（金）に、本学にて、看護国際フォーラムのアメリカ人講師を招き、NP国際会議をNPプロジェクトと共催し、討論や質疑応答を行った。

平成26年度の計画を踏襲した活動を行う予定である。基本的には、学生の国際的視野の育成と教員の研究質向上のため、国際交流の機会と内容を検討する。また、看護国際フォーラム後に参加者アンケートを実施し、看護職のニーズに沿ったテーマを選定し、地域貢献にもつなげる。

１－12　図書委員会

構成員　小野 美喜、Gerald T. Shirley、福田 広美、足立　綾、朝倉 泰三、白川 裕子、
姫野 由美、狭間 由布子

毎月１回の委員会を開催し、図書選定を行うとともに以下の活動を行った。

１）教員、大学院生に対し、電子ジャーナル（CINAHL with Full Text）の利用講習会を実施（４／３実施)し、53名が参加した。
２）学部生に対する著作権処理済視聴覚資料の貸出を開始した。
３）PubMedの専用URLを取得し、電子ジャーナルへのアクセスと検索を容易にした。
４）新入生オリエンテーションにおける図書館利用案内をより充実させるため、司書によるガイダンスを実施した。
５）図書館の利便性向上と業務の効率化ため、新たな「図書館システム」の導入について検討を開始した。
６）「図書館だより」を創刊。大学ホームページに掲出を開始し、新着図書紹介や図書館の利用方法などを紹介した。発行回数２回（６月、10月）。
７）利用促進を図るため、テーマ設定した図書の企画展示を開始した。
８）図書の返却位置が分からない利用者のため、また、既定開架位置以外への返却を防止するため返本台を設置した。

今後の課題としては、電子ジャーナル等の利用促進は引き続き課題とし、学生の図書館離れへの対応を検討し、図書利用を促進する。

１－13　入試委員会

構成員　構成員は非公開としている。

入試委員会は、平成26年度に実施した学部及び大学院博士課程入学試験について審議し、入学試験全般を統括した。

大学入試センター主催の入試担当者連絡協議会（２回、８/22、12/10）および試験場設定大学連絡協議会（10/24）の他、全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（５/29-30）、大学入学者選抜・教務関係事項連絡協議会（６/９）、公大協入学者選抜実務担当者協議会（８/29）に入試委員が参加した。

広報委員会と協力して、入学試験に関する広報活動を行った。業者・県看護協会等主催の進学説明会の参加は17箇所、高校教諭に対する進学説明会（６/６）の来場者は31名（前年度より４名減、約11.4%減）であった。この他、若葉祭及びオープンキャンパス会場に、進学相談コーナーを開設した（５/17-18）。これらの合計として、312名の高校生や保護者ほかの相談を受けた。

大学院入学試験は例年通り8月に実施した（８/30）。大学院博士課程（前期）入試は、筆記試験と面接試験を行った。受験者数は博士課程（前期）31名、博士課程（後期）０名であった。

学部の特別入試（11/22）の志願者数は県内94名（前年度比19%増）、県外25名（前年度比67%増）、社会人２名（前年度比50%減）で、合計では前年度より増加した。学部の一般入試（前期２/25、後期３/12）の志願者数は前期145名（前年度比35%減）、後期154名（前年度比41%減）であった。

大学入試センター試験では、監督者説明会の開催回数を増やし、また、実施上の変更点の解説を充分にする等して、実施要領等の周知徹底を図った。

今年度は後期試験の問題に誤字があったため、入試委員が実際に問題を解き出題ミス等がないかを確認する時に、誤字脱字だけをチェックする担当者をおくこととした。引き続き再発防止方法について検討する必要がある。入試の広報と運営方法の両面について、引き続き改善のための検討を重ねながら、年度計画に沿って活動を行っていく予定である。

１－14　研究倫理・安全委員会

構成員　影山 隆之、平野 亙、伊東 朋子、吉田 成一、小嶋 光明、樋口 幸、渋谷 真由美

1) 承認申請があった研究計画125件を審査した。
2) 研究倫理・安全についての研修として、新任教職員に対しては新任教職員研修会（４/２）、４年次生に対しては看護研究の基礎１（12/８）、大学院生に対しては看護研究特論／研究のすすめ方（４/７）で、配慮すべき事項と学内での手続きについて教育を行った。
3) 保健所等の学外者が研究責任者となって承認申請をできる規程を制定し、４月１日から施行した。
4) 国が新たに「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」を公布し、また、「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」、「研究機関等における動物実験等の実施に関する基本指針」、「研究費の不正使用防止に関するガイドライン」に基づく指導を強化してきていることから、これに合わせ学内規程の「研究の倫理・安全に関する指針」、「実験動物施設 利用の手引」、「研究計画の申請に関する手引き」の改定及び動物実験小委員会の設置と関連規程の制定について検討を行った。以上の検討事項は次年度より施行される予定である。
5) 動物実験施設の全般的な管理運営は実験動物管理者が「実験動物施設 利用マニュアル」に基づいて実施している。使用動物数（屠殺数）はマウス1,446匹およびラット144匹であった。

学内規程の一部についてはさらに見直しが必要であり、また研究情報の保管に関する手順書も学内規程としてまとめる必要がある。動物実験に関しては、実験動物に関する「緊急時対応の計画」を作成する必要がある。審査の申請に係るウェブシステムの更新も必要である。

１－15　情報ネットワーク委員会

構成員　佐伯 圭一郎、品川 佳満、野津 昭文、足立 綾、水野 優子、岩崎 瑞穂

本学の情報ネットワークの管理運用を継続的に実施した。また、情報セキュリティ対策の推進や教職員のICTスキル向上のための活動を継続した。特に今年度は、本学情報システム環境の中長期的な改善に向けて下記の点に関する情報収集と検討を集中的に実施した。

1) 教務システムに関して、教員及び教務学生グループからの意見収集と最新の大学向け教務システムパッケージに関する情報収集を行い、検討を行った。
2) 学生の持ち込むパソコンの利用環境改善として、電源ケーブル等の整備から着手し、無線LAN環境の大幅な機能強化を目指した改修計画について検討を開始した。

今後も情報ネットワークの運用管理の実務を安全で効率的に推敲すること、および情報セキュリティ対策の推進を行う。
また、特に平成27年度においては、平成26年度の検討を踏まえ
・教務システム改善に関する計画の確定
・学生向け無線LAN改修等の持込PC利用環境改善の推進
を進める予定である。

１）　ネットワークシステムＷＧ

構成員　品川 佳満、小嶋 光明、甲斐 倫明、佐伯 圭一郎

サーバ群（WWW、メール、グループウエア、ファイル、計算機など）およびネットワーク全般（インターネット・イントラネット・無線LAN）の管理・運営を行った。また、ADサーバの更新作業、今後リプレイス対象となるサーバの更新に関する検討を行った。

２）　WindowsユーザーサポートＷＧ

構成員　野津 昭文、佐伯 圭一郎、足立 綾、西部 由里奈、岩崎 瑞穂

学内（教職員、情報処理教室、メディアセンター・教材作成室、看護研究交流センター、CALL用ノートPC)の管理およびユーザーサポートを行った。

３）　MacユーザーサポートＷＧ

構成員　小嶋 光明、石川 純也

教職員用および学内に設置しているMac PCの管理（トラブル対応、システムやソフトウェアの更新）を行った。

１－16　研究科教育研究委員会

構成員　甲斐 倫明、藤内 美保、梅野 貴恵、吉村 匠平、赤星 琴美、江田 真砂実（９月まで）、神崎 正太（10月から）、村嶋 幸代（オブザーバー）

大学院研究科の運営および計画に関する次の事項について審議・実施した。

1) 定例学事（研究計画報告会、研究中間報告会、研究成果報告会、論文審査、奨学金、シラバスなど）について審議し実施した。
2) 入学試験体制の見直しについて審議し一定の案をまとめた。
3) 定員拡大について審議し、地域枠、教員体制および広報戦略について検討した。
4) 大学院の広報の強化策として大学院説明会を本学で開催した。
5) 博士論文のオープンアクセス化を含め、博士論文審査要領について見直しを実施した。
6) 博士課程（後期）進学要領の改訂を実施した。
7) 大学院生室の拡充計画に伴い、オープンアクセス方式を取り入れ、院生室を整備した。
8) 退学を承認する場合の手続きを修正した。
9) 大学院教育のあり方を検討するタスクフォースの設置の必要性をまとめた。

１－17　看護研究交流センター

構成員　甲斐 倫明、Gerald T. Shirley、桜井 礼子、桑野 紀子、石川 華子、佐藤 玉枝、赤星 琴美、佐藤 弥生、福田 広美、草野 淳子、伊東 朋子、安部 真紀、後藤 成人、村嶋 幸代（オブザーバー）

１．国際交流部門
１）インターネットジャーナル英文ガイドラインの作成
２）英語パンフレットの作成
３）Kathy Magilvy博士の招聘
４）武漢研修員の研修
　武漢市第一病院皮膚科看護師長の王婷氏、武漢市中心病院看護部副主任の黄艶氏
５）韓国より研修者の受け入れ
　ソウル市アサン医療センター副院長 Yeon Hee KIM氏
　蔚山大学医学部看護学科長 Jae Sim JEONG氏
　アサン医療センター Eun Jeong PARK氏

２．地域交流部門
１）ＣＯＣ関係事業
（１）聖路加国際大学看護学部　亀井智子先生講演
　世代間交流を取り入れた看護支援の開発とミックスドメソッドを用いた成果の評価
（２）事業推進会議の開催
（３）自由科目予防的家庭訪問実習による試行訪問の実施
２）在宅医療推進「地域診断ツール」の開発事業と事例検討会
３）健康づくり出前講座の依頼に対する調整
４）医療・介護サービスの提供体制改革のための新たな財政支援制度事業の検討
５）大分市「在宅医療介護連携に関する市民アンケート調査」の対応
６）統計・情報処理相談の実施
７）大分県食品安全衛生課による食育の講義
８）大分県国民保護協働実働訓練
９）大分県看護協会平成27年度研修計画への講師派遣調整
10）平成26年度看護研究交流会

３．継続教育部門
１）ホームカミングデイの開催
２）卒業生修了生の名簿作成
３）卒業生修了生との交流会の開催
大分県立病院、大分赤十字病院、大分大学医学部附属病院、アルメイダ病院、 湯布院病院、別府医療センター

４．NP推進部門
１）日本ＮＰ協議会解散総会、日本NP教育大学院協議会理事会
日本NP教育大学院協議会社員総会
２）フォローアップ会議の開催
３）NPコース修了生・プロジェクトによる法案改正祝賀会　草間会長講演
特定行為に係わる看護師の研修制度養成教育から制度化までの道のり今後の課題
４）日本NP教育大学院協議会、日本看護協会、看護系大学協議会会議
５）コクラン系統的レビュー講演　国立成育医療研究センター疫学研究室長大田えりか先生
６）日本NP教育大学院協議会平成26年度NP資格認定試験評価会議
７）看護実践者講演会
東京大学真田弘美先生、がん研有明病院榮木実枝看護部長
８）平成26年度日本NP教育大学院協議会研究会の開催
９）平成26年度日本NP教育大学院協議会NP資格認定試験の実施
10）平成26年度日本NP教育大学院協議会ハワイNP研修の実施

５．学術ジャーナル部門
１）12巻２号を発刊
２）13巻１号の発行
３）編集委員会の開催
編集委員の追加、査読委員の委嘱等が審議し決定した。

１）　インターネットジャーナルＷＧ

構成員　甲斐 倫明、平野 亙、Gerald T. Shirley、定金 香里、河野 梢子、森田 慶子、馬場 奈穂、白川 裕子（図書館）

看護国際フォーラムや学会等各種イベントでの広報、「看護科学研究」第12巻第２号および第13巻第１号の審査・編集・発刊に関する実務を行った。

２）　大学公式 facebook ＷＧ

構成員　後藤 成人、石川 純也、石川 華子

平成25年度11月より運用を開始し、大学行事の予告・開催報告や日々のキャンパスの様子、本学ホームページの紹介などを卒業生、在校生、一般に向け、計85件を発信した。

１－18　衛生委員会

構成員　堤　健一（１号委員）、角 匡幸（２号委員）、赤星 琴美（３号委員）、
影山 隆之、朝倉 泰三（以上、４号委員）、工藤 優（オブザーバー）

本年度、５回の衛生委員会を開催し、苦情相談および健康相談等について再確認するとともに、定期健康診断結果の概要報告や職場巡視を行った。

昨年度に引き続き、教職員の健康管理への意識向上を図るため『健康増進活動支援事業』を実施し、教職員53名が参加した。ウォーキングラリーでは昨年度作成した『大学周辺ウォーキングマップ』を利用するよう呼びかけ活用を図った。

また、各研究室や図書館等の巡視を行った結果、照度不足の箇所については電気スタンドを整備し、照度の確保に努めた。

そのほか、夜間の安全管理のため、各棟の廊下や車庫に人感センサーを設置した。

１－19　評価委員会

構成員　市瀬 孝道、甲斐 倫明、堤　健一、藤内 美保

４月９日に「教員評価の実施に関する基本的な方針」が改正され、この評価方法に従って評価を実施した。学長指名の教員評価委員に藤内教授が指名された。２月10日を評価書の提出期限として、教員評価結果を学長報告し、最終評価結果を３月19日に各教員に配付した。

１－20　ＮＰプロジェクト

構成員　村嶋 幸代、藤内 美保、堤 健一、石田 佳代子、江月優子、小野 美喜、甲斐 倫明、佐伯 圭一郎、草野 淳子、桜井 礼子、中林 博道、高野 政子、福田 広美、松本 初美、宮内 信治

NPプロジェクトは本年度の年度計画推進のため、１）カリキュラム部会、２）修了生フォローアップ部会、３）研究・広報部会の３部会を設定した。

また、これまでの本学の取組が評価されたこと等により、平成26年６月18日に「地域における医療及び介護の総合的な確保を推進するための関係法律の整備等に関する法律（医療介護総合確保推進法）」が成立し、保健師助産師看護師法（保助看法）が改正され「特定行為に係る看護師の研修制度」が創設された。昭和23年に保助看法が制定されて以来66年の時を経て初めての看護師業務の拡大がなされたことは大きな前進である。今後も、看護水準の向上のため、診療看護師（NP）の業務のさらなる拡大に向けて取り組む必要がある。

平成27年３月に省令で38特定行為（21特定行為区分）や教育内容や教育時間が示された。これを踏まえ、大学院のNP教育における、特定行為に係る研修をどのように進めるかを検討した。その結果、これまで行ってきたNPとしての、臨床推論能力、判断能力を強化する教育を堅持し、特定行為の技術的な到達にのみ偏重する教育とはしないことを確認した。また、制度化に伴い、大分県の医療に貢献することをねらいとして、地域枠を設定し、現在の老年、小児コース合わせて５名の定員を倍程度に増員する方針を決定した。さらに、特定行為研修機関として厚生労働省の指定を受けるための要件である特定行為研修管理委員会の組織体制についても検討し、外部委員として看護協会、薬剤師会、医師会に委員の派遣依頼を行うこととした。

１）カリキュラム部会：

（１）NP教育の方針に基づいて、従来のNP教育のレベルを維持し、38特定行為の全てを網羅した教育内容に落とし込む作業を進めた。一部の科目で、手順書の内容を盛り込むなどの対応し、平成27年度中に平成28年度のNPのカリキュラムを全体的に改正する必要性を判断し、必要に応じ改正することとした。

（２）実習関連：修士１年次生は４名、修士２年次生は７名で、そのうち１名は長期履修者である。２年次生１名が小児NPコースである。その他は老年NP学生である。修士１年次生は修了生が活動する施設でNP Early Exposure実習を１週間実施した。年度末に進級試験を実施した。２年次生は、実習前試験、14週間の実習、課題研究、修了試験とハードなスケジュールをこなした。全員が修了認定され、一般社団法人日本NP教育大学院協議会のNP資格認定試験を受験したが、１名が不合格となった。

（３）老年NPの実習施設の指導者との合同会議を実習前と実習終了後に２回実施した。

（４）就職支援は、学生が所属する施設で勤務しながらの修学であったため、教員が施設訪問をして理解を得るという支援は必要なく、全員が県内の施設でNPとして活動することが決まった。

２）修了生フォローアップ会議、NP推進部門

（１）修了生のフォローアップ会議を定期的に開催し、県外からの修了生の参加もあった。10月11日真田弘美教授（東京大学）、栄木実枝看護部長（がん有明病院）が講演した。

（２）日本NP学会を創設し、第１回日本NP学会は平成27年11月14日に本学で開催することとなり、準備に取りかかった。

（３）日本NP教育大学院協議会の企画研修として、ハワイで活動するNPを視察した。本学から３名の教員と１名の修了生が参加した。他大学の教員や修了生も参加し、NPの理解と交流が図られた。

（４）日本NP教育大学院協議会、日本看護協会、日本看護系大学協議会の理事レベルによる合同会議が行われた。

３）研究・広報部会
(1) INRに2つの論文が掲載された。その他、雑誌、学会発表、日本看護科学学会交流集会などで成果を公表した。
(2) 大分県立看護科学大学競争的研究費のプロジェクト研究費を獲得した。
(3) 看護国際フォーラム（10月25日）で、「よりよい看護実践をめざしたNP教育と研究」というテーマで、Dr. Jamesetta A. Newland（ニューヨーク大学）、Dr. Jae Sim Jeong（蔚山大学）、本学から村嶋学長、藤内教授、小野教授が日本におけるNPの教育や活動について報告した。

平成27年度は、５月末までに、厚生労働省に特定行為研修機関の指定申請を行い、８月の医道審議会での審査を経たのち、10月１日付けの指定を受ける予定である。
優秀な修了生を輩出し、特定行為研修制度、ひいては診療看護師（NP）の社会的認知度を上げる事が本学に課せられた当面の使命である。そのためには臨床推論能力や、医学的知識やエビデンスに基づく判断能力等の質を担保したNP教育と特定行為研修制度を活用した教育のバランスがとれるように進捗状況を把握し、教育評価をする必要がある。
また社会のニーズに応じ定員拡大にむけた教育が開始されるため、教育環境、実習施設との調整、教育内容を整備し、学生の支援を行うことが求められる。

１－21　健康増進プロジェクト

構成員　稲垣 敦、桜井 礼子、小山 珠美、赤星 琴美、佐藤 愛、河野 梢子、田中 佳子、秦 さと子、巻野 雄介、河野 優子、植田 みゆき、安部 真紀

【事業・研究協力】
・スポーツを通じた地域コミュニティ活性化事業（文部科学省）
・地域商店街活性化事業（経済産業省、大分市中央町商店街振興組合）
・Smart Life Project（厚生労働省）
・健康・体力・人づくり推進事業（大分県教育委員会）
・大分県介護予防二次予防事業（大分県福祉保健部、大分県運動機能向上専門部会ほか）
・消費カロリーがわかるまちづくり事業（大分市）
・大分空港の施設改善に関する研究（県産学官連携推進会議、県総合交通対策課、㈱大分空港ターミナル、日本文理大学、芸術文化短期大学、大分県産業科学技術センターほか）
・姫島村健康づくり事業（姫島村健康推進課、同診療所）
・スポーツ救護ナースおよびスポーツ救護士の育成事業（大分県スポーツ学会、大分県看護協会、大分県理学療法士会、大分県作業療法協会、大分県柔道整復師会、大分岡病院ほか）
・温泉と運動プログラム研究会（大分県、別府市、別府市医師会、別府大学、別府リハビリテーションセンター、畑病院、別府中央病院、黒木記念病院ほか）
・高齢者用の機能性食品の研究開発（ヤクルトヘルスフーズ）

【研究活動】
・脳卒中患者の機能回復のための二筋同時電気刺激装置が医療機器認証・販売開始、年間売り上げ見込み4億円（東九州メディカルバレー構想10/15）
・第６回大分県スポーツ学会学術大会シンポジウム「体力を考える：スポーツ、教育、健康の視点から」のコーディネーターおよびシンポジスト（ホルトホール大分12/23）
・測定評価研究50周年記念大会のシンポジウム「測定評価研究のあゆみと展望」シンポジスト（石川県政記念しいのき迎賓館２/28）。
・歩行時のエネルギー代謝測定（大分市街地９/８、９/17）
・地域在住高齢者の健康関連体力の経年変化と身体活動との関連
・地域在住高齢者の運動器障害と生活習慣・体力との関連
・通学手段が大学生の心身に及ぼす影響
・森林浴の視力回復効果：観葉植物を利用した視力回復法の提案

【地域貢献、人材育成、啓蒙・啓発】
・健康教室等：多世代交流プラザ（９/29）、原村公民館（９/30）、佐賀関市民センター（９/30）、田島公民館（10/８）、新町公民館（10/15）、竹ノ内公民館（10/30）
・人材育成：スポーツ救護講習会（県看護研修会館３/８、４/13、５/17：96名）、体力チェックサポーター養成研修会（別府大７/19：19名）、姫島村健康づくり事業研修会（姫島村離島センター７/22：19名、１/27：24名）、豊後大野市自治委員・市議会議員・市農業委員会委員・市教育委員合同研修会（豊後大野市総合文化センター　９/26：150名）
・健康・体力チェック：本学若葉祭（本学５/17-18：181名）、くじゅう山開き（牧ノ戸登山口６/９：84名）、敬老の日イベント（セントポルタ中央商店街９/15：254名）、トリニータホームゲーム（大銀ドーム９/20：658名）、大分空港（10/11：297名、11/15：337名）、富士見が丘体育祭（横瀬小学校10/26：300名）、大分市野津原地区ななせの里まつり（みどりの王国11/２：370名）、大分県スポーツ学会（ホルトホール大分12/23：219名）、森林セラピートレイルランニング大会（のつはる少年自然の家３/15：10名）、森林探検ウォーキング（富士見が丘中央公園３/28：100名）。
・その他：森林セラピートレイルランニング大会実行委員および救護班（のつはる少年自然の家３/15）

【広報、マスコミ】
・めじろん元気アップ体操のパンフレットを高齢者世帯および事業所に63,000部配付、普及用DVDを作成、YouTubeに掲載
・「めじろん元気アップ体操」指導（10月）（佐賀関CTV）
・「動脈硬化と運動」（８月）、「100歳で元気な人々のライフスタイル」（２月）（姫島CTV）
・若葉祭（５/17-18）、オープンキャンパス（７/20）でパネル展示
・本学のパンフレット、ホームページで活動を紹介
・医療機器研究開発補助事業（東九州メディカルバレー構想）による医療機器開発、医療機器認証および商品化を知事に報告（合同新聞10/16）
・クローズアップ現代（NHK ４/16、17、18、22）、医療ルネサンス（読売新聞５/28、29）の取材

１－22　看護系全体会議

構成員　村嶋 幸代（学長）、市瀬 孝道（学部長）、甲斐 倫明（研究科長）、看護系教員全員

看護系全体会議は例年３回開催した。

第１回看護系全体会議（４月）

学の知を結集して、地域課題解決するために、地域貢献、社会貢献は重要な大学のミッションである。実習施設と大学がよい連携を強化していくことが必要。１つの方法として臨床教授制の案が出され、教育研究委員会の下部組織として臨床教授制タスクグループを結成する。

実習関連WGは、実習中のメモの紛失やSNSの問題があり、対応策をガイドブックに示し、共有した。

５月～７月に予定されている学部と大学院の実習計画の報告があった。前年度の１月～２月に終了した実習の報告がされた。

第２回看護系全体会議（７月）

１）各実習の報告を行い、実習に関する情報を共有した。在宅看護論実習（訪問看護ステーションでの実習）が今年度より２週間となり、訪問も複数回可能となり実習しやすくなったとの意見があった。また総合看護学実習も今年度より３週間実習となった。今後、専任教員による評価会を行う予定にしている。成人老年看護学実習では、教員の実習体制を原則常駐型へと変更し３年目となり病棟でも浸透しているが、技術の実施が減少している。

２）平成２７年度カリキュラム改正に伴う実習の変更

初期体験実習の目的・目標・実習方法のアウトラインが決定し、報告された。学生全員が病院での実習をするとともに、様々な職種で活動している看護職の講話を学生全員が聴講することで、

自分の将来ビジョンを考えるきっかけをつくることとする。

３）実習関連ワーキンググループ

eラーニングを導入した看護技術習得プログラムや実習施設の看護師の支援を受けたプログラムを導入する計画をしている。

４）実習指導者・教員交流会を実施し、教員19名と大分赤十字、アルメイダ病院、県立病院の看護師、堀永産婦人科、別府発達医療センターからも参加があった。

５）看護スキルアップ演習では、今年度から卒業生がアドバイザーとして依頼し進めている。

６）実習基幹病院の卒業生との交流会を就職対策委員の運営で計画的に進めている。今年度は７ヶ所の実習施設で開催する。

７）COCについて、来年度の本格実施に向けて、今年度は試行をしている。

第３回看護系全体会議（12月）

１）第4段階の実習の報告があり、無事に終了した。大学院のNP、広域、助産の実習も予定通り終了、または進行中である。

２）１月から予定される実習計画の報告があった。看護アセスメント学実習では、インフルエンザの流行の最高潮の時期のため、平成28年度（平成27年度改正カリキュラムの２年次）に12月３週～４週に移行する。

３）実習関連WGは、看護技術習得プログラムも順調に進んでいる。
４）看護スキルアップ演習は、本年度より卒業生や修了生にロールプレイの発表会でアドバイザーになってもらい、４年次生の学びに繋がった。
５）臨床教授制TGは、実習基幹施設の指導者、スタッフからのヒヤリングで明らかになった課題を整理した。また臨床教授制を導入した聖隷浜松病院、聖隷三方原病院に見学した。臨床教授制はしばらく見送り、まず大学における教育改革を含めて検討することが優先すべき事項であることから、来年度は実習を改善・改革するための組織が必要である。
６）COC実習についての平成27年度から１年次生から４年次生までの本格実施となるため、看護系と基礎系の教員とのマッチング、配置、グループ編成などを検討していることが報告された。
７）教育研究委員会の企画により、全実習施設に集合してもらい、大学の方針をご説明し、大学との交流や意見交換を行うことを目的とし、平成27年度改正カリキュラム実習施設説明会を12月24日、本大学講堂で開催する。大学の方針および実習の説明を行うとともに、「学生の能力を引き出す実習指導のあり方と教員との連携」の講演を聖隷浜松病院田島 美穂子氏に依頼している報告があった。

今年度試行で行った実習指導体制の評価を生かし、さらなる改善を図る。

２　学内行事の概要
２－１　学年暦

前期

4 月

8	入学式
9	全学オリエンテーション
9,16	健康診断
10～12	新入生オリエンテーション
10	2～4年次生授業開始
11～18	前期履修登録
14	1年次生授業開始
23	交通安全講座（自動車：4年次生）
25	全学スポーツ交流会

5 月

12～6/20	地域看護学実習， 在宅看護学実習Ⅱ（4年次生）
10	交通安全実技講習会（自動二輪）
14	キャンパスクリーンデー
17,18	若葉祭・ホームカミングディ
26～6/6	老年看護学実習（3年次生）

6 月

11	前期後半授業開始
19	開学記念日（休講）
23～7/11	総合看護学実習（4年次生）
27	学生大会

7 月

15～23	初期体験実習（1年次生）
20	オープンキャンパス
20～27	学生交流プログラム（ソウル大学より）
22	夏期休業開始
22～8/6	小児看護（保育所）実習（3年次生）

8 月

30	大学院入学試験

9 月

5	夏期休業終了
5～	成人急性期，成人・老年慢性期，小児， 母性，精神看護学実習（3年次生）
30	前期授業終了

後期

10 月

1	後期授業開始
1～10	後期履修登録
25	看護国際フォーラム

11 月

22	特別選抜試験（推薦・社会人）
～ 28	成人急性期，成人・老年慢性期，小児， 母性，精神看護学実習（3年次生）

12 月

1	後期後半授業開始
4	卒業研究要旨提出締切（4年次生）
9 正午	卒業研究論文提出締切（4年次生）
11,12	卒業研究発表会
24	冬期休業開始

1 月

7	冬期休業終了
9～26	基礎看護学実習（1年次生）
16	大学入試センター試験準備 （2,3,4年次生休講）
17,18	大学入試センター試験
30～2/16	看護ｱｾｽﾒﾝﾄ学実習（2年次生）

2 月

19,20,22	看護師・保健師および助産師国家試験
25	一般選抜試験（前期）および特別選抜 試験(私費外国人留学生)（休講）
26	進級試験（2年次生）
27	後期授業終了

3 月

1	春期休業開始
12	一般選抜試験（後期）
18	卒業式

２－２　オープンキャンパス

平成26年度の開催は、夏休み中の７月20日（日）に実施し、参加者は314名(昨年比プラス14名)で、保護者91名と参加が多く本学について大いにアピールできた。講堂での説明会・体験イベントなど教職員全員と学生の協力者とで取り組んだ。食堂も営業してもらい、保護者等来学者に利用してもらった。教育・研究の展示はパネル展示物を一部新規作成した。学生自治会によるTAKIOソーランや学生の話が聴ける合格体験発表や在学生からのメッセージ、教員による模擬授業などを企画した。在学生が相談コーナーや実習室への誘導を行うことで、高校生や保護者には在学生との交流の機会ともなり、入学後のイメージを深めることができたと思われる。

２－３　公開講座

平成26年度は第１回「災害に備える看護職の役割」と題した有料公開講座を９月６日に、大分駅前のホルトホール大分で開催した。参加者は97名であった。第2回「看護職のための放射線の基礎知識」とし、小嶋光明講師が講師として、臼杵市で開催した。参加者は20名であったので、合計で117名が公開講座を受講した。パンフレットを作成し県下の病院や施設、保健所への配布、市報など地域広報に加え、マスコミ（大分合同新聞・月間ぷらざ・シティ情報おおいた）や行政機関等、講座内容に関連のある看護協会、病院等に参加を呼びかけた。

２－４　第16回看護国際フォーラム

第16回看護国際フォーラムを平成26年10月25日（土）に別府ビーコンプラザ国際会議場にて大分県看護協会と共催した。「よりよい看護実践をめざしたNP教育と研究」をテーマとし、アメリカから１名、韓国から１名の講師を招聘し、本学から学長を含む３名の教員が講演し、総合討論を行った。参加者は254名と盛況であった。

２－５　NP国際会議

平成26年10月24日（金）に、本学にて、看護国際フォーラムのアメリカ人講師を招き、NP国際会議をNPプロジェクトと国際交流委員会とが共催し、討論や質疑応答を行った。

２－６　姉妹校学生交流

ソウル国立大学校派遣学生受け入れと交流：
　ソウル国立大学校看護大学から大学院生２名、学部生５名および同行教員１名の計８名（７月20日～７月27日までの８日間）を本学に受け入れ、日本の医療・保健・福祉について理解を深めた。学生および教職員がサポートグループとして交流を支援した。

本学の学部生および大学院生の派遣：
　大学院生１名、学部生６名および同行教員１名の計８名を（８月17日～24日までの８日間）ソウル国立大学校看護大学に派遣した。韓国の医療・保健・福祉について視察等を行い、理解を深めた。報告はWebに掲載した。

２－７　若葉祭（大学祭）

　５月17日、18日の若葉祭において教員イベントの企画募集と当日運営を実施した。教員企画は健康教育等の大学学部教育の一部内容や設備の紹介など12企画を開催し、参加者は２日間で709名であった。教員イベントは、一部学生に協力者として数名ずつ配置してもらい実施することで、学生と地域の人々とのふれあいの場ともなっている。研究紹介では、全研究室の卒論をポスター掲示し、学部で行う研究を掲げることで興味をもってもらう事を狙いと今年初めて取り組んだ、その他、広報活動として、７月開催予定のオープンキャンパスの案内チラシ、大学案内パンフレットを研究棟入口に配置し、一般の方々や進学予定者にも大学の内容が伝わるように配慮した。

２－８　地域ふれあい祭

　平成26年度の地域ふれあい祭りは、11/２（日）に開催された「ななせの里まつり」参加者5000人（主催者発表）に参加した。大学に隣接するみどりマザーランドで開催された。大学紹介はテント内でのパネル掲示と、大学案内パンフレット配布やCOC地の拠点事業の紹介を行った。ブースの来場者は地元住民で、約50名であった。その他、イベントの駕籠かきレースには学生や学長はじめ教職員等5組が参加し活躍した。また、健康増進プロジェクトと協働し、血圧測定、体成分分析、栄養評価などの健康指導・健康チェックを実施した。

２－９　アニュアル・ミーティング

　本年度のアニュアルミーティングは３月６日に開催した。研究を通して教員間の交流を活性化する機会を提供する目的で、本年度より全てポスター発表とした。発表件数は18件だった。

２－10　実習施設説明会

病院、老人保健施設、訪問看護ステーションなどの全実習施設を対象に下記の内容で12月24日に行った。

講師：聖隷浜松病院　副看護部長（教育担当）田島 美穂子氏
内容：1）平成27年度改正カリキュラムの説明
　　2）６段階の看護学実習の概要
　　3）講演会を開催しました。
　講演会：テーマ学生の能力を引き出す実習指導のあり方と教員との連携
　－JCI(国際的医療機能評価機関)認証取得病院で行う実習指導の実際－

３　教育活動

３－１　平成 27 年度入学者選抜状況

１）概　要

選抜の区分及び募集人員、入学者選抜試験の概略は次表のとおりである。

選抜の区分及び募集人員

学　部	学　科	入学定員	募集人員					
			一般入試		特別入試			
			前期日程	後期日程	推薦		社会人	私費外国人留学生
					県内	県外		
看護学部	看護学科	80 人	35 人	10 人	35 人	注 1) 5 人以内	注 1) 若干名	注 2) 若干名

注 1）推薦県外の「５人以内」及び社会人の募集人員「５人以内」は推薦の（県内）35 人に含める。

注 2）私費外国人留学生の募集人員「若干名」は前期日程の 35 人に含める。

入学者選抜試験の概略　（単位：人、倍、%）

区分			志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
							計	県内（率）	男（率）
特別	推薦	県内	94	94	30	3.1	30	30(88.2)	5(14.7)
		県外	25	25	4	6.3	4	0(0.0)	0(0.0)
	社会人		2	2	1	2.0	0	0(0.0)	0(0.0)
	計		121	121	35	3.5	34	30(88.2)	5(14.7)
一般	前期		145	135	45	3.0	40	14(35.0)	3(7.5)
	後期		154	63	10	6.3	9	5(55.6)	1(11.1)
	計		299	198	55	3.6	49	19(38.8)	4(8.2)
合計			420	319	90	3.5	83	49(59.0)	9(10.8)

試験教科等

区分		教科	試験期日	出願期間
特別	推薦	総合問題、面接	平成 26 年 11 月 22 日（土）	平成 26 年 11 月 4 日（火）～11 月 10 日（月）
	社会人			
一般	前期	総合問題、面接	平成 27 年 2 月 25 日（水）	平成 27 年 1 月 26 日（月）～2 月 4 日（水）
	後期	総合問題、面接	平成 27 年 3 月 12 日（木）	

２）特別入学試験

① 推薦入試

大分県内外の高等学校卒業見込者の中から、各高等学校長が推薦した生徒を対象に、「総

合問題」と「面接」により実施した。

② 社会人入試

社会人としての実体験から看護学への強いモチベーションを持った学生を確保することにより、教育・研究への活性化を図るため、また、生涯学習の要請に対応するため、社会人入試を実施した。

年齢が満 24 歳以上で、社会人の経験を３年以上有し、大学入学資格を有する者を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。

３）一般入学試験

平成 27 年度大学入試センター試験で本学が指定する教科・科目（下表参照）を受験した者について、分離分割方式（前期日程、後期日程）により試験を実施した。

なお、本学で実施する試験は、前期日程、後期日程ともに「総合問題」と「面接」により実施した。

<table>
<tr><th>日　程</th><th>教科名</th><th colspan="2">科　　目　　名</th><th>教科・科目数</th></tr>
<tr><td rowspan="4">前期日程</td><td>国　語</td><td colspan="2">『国語』（近代以降の文章）</td><td rowspan="4">４教科６科目</td></tr>
<tr><td>数　学</td><td colspan="2">『数学Ⅰ・数学Ａ』と『数学Ⅱ・数学Ｂ』
または
『旧数学Ⅰ・旧数学Ａ』と『旧数学Ⅱ・旧数学Ｂ』</td></tr>
<tr><td>理　科</td><td colspan="2">「物理」、「化学」、「生物」、「地学」から２科目を選択
または
「物理Ⅰ」、「化学Ⅰ」、「生物Ⅰ」、「地学Ⅰ」から２科目を選択</td></tr>
<tr><td>外国語</td><td colspan="2">『英語』（リスニングを含む）</td></tr>
<tr><td rowspan="5">後期日程</td><td>国　語</td><td>『国語』（近代以降の文章）</td><td rowspan="4">３教科３科目
または
３教科４科目
を選択</td><td rowspan="5">４教科４科目</td></tr>
<tr><td>地理歴史
公　　民</td><td>「世界史Ａ」、「世界史Ｂ」、「日本史Ａ」、「日本史Ｂ」、「地理Ａ」、「地理Ｂ」、「現代社会」、「倫理」、「政治・経済」『倫理、政治・経済』から１科目を選択</td></tr>
<tr><td>数　学</td><td>『数学Ⅰ・数学Ａ』、「数学Ⅱ」、『数学Ⅱ・数学Ｂ』、『旧数学Ⅰ・旧数学Ａ』、『旧数学Ⅱ・旧数学Ｂ』から１科目を選択</td></tr>
<tr><td>理　科</td><td>「物理基礎」、「化学基礎」、「生物基礎」、「地学基礎」から２科目を選択
または
「物理」、「化学」、「生物」、「地学」、「物理Ⅰ」、「化学Ⅰ」、「生物Ⅰ」、「地学Ⅰ」から１科目を選択</td></tr>
<tr><td>外国語</td><td colspan="2">『英語』（リスニングを含む）</td></tr>
</table>

注１）「国語」については、「近代以降の文章」の得点のみを合否判定に用います。

注２）「地理歴史・公民」、「数学」及び「理科」において、複数科目を受験した場合は、高得点の科目をその教科の得点とし、合否判定に用います。なお、後期日程については、「国語」、「地理歴史・公民」、「数学」及び、「理科」の全ての教科を受験した場合には、高得点の上位３教科を合否判定に用います。

注３）前年度大学入試センター試験の結果は利用できません。

注４）上の指定科目をすべて受験していなければ、本学が実施する個別試験を受けられません。

注５）『旧数学Ⅰ・旧数学Ａ』、『旧数学Ⅱ・旧数学Ｂ』、「物理Ⅰ」、「化学Ⅰ」、「生物Ⅰ」及び「地学Ⅰ」は旧教育課程履修者のみ選択できます。

３－２　平成 27 年度大学院看護学研究科博士課程（前期）入学試験状況

１）看護学専攻

概　要

看護職の指導的役割を担う人材を育成し、地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、大学卒業者等を対象に、「総合問題」、「専門問題」（実践者養成のみ）及び「面接」により実施した。

募集人員

研究科名	課　程　名	専　攻　名	専攻領域		募集人員
看護学研究科	博士課程（前期）	看護学専攻	研究者養成		３名
			実践者養成	ＮＰコース	５名
				リカレントコース	２名
				広域看護学コース	５名
				助産学コース	10 名

試験の概略

（単位：人、倍、％）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率	入　　学　　者		
					計	県　内（率）	男（率）
修士課程	30	30	21	1.4	19	12(　63.2)	0(　0.0)

試験科目等

試 験 科 目	試　験　期　日	出　　願　　期　　間
総合問題 専門問題 面　　接	平成 26 年 ８月 30 日（土）	平成 26 年 ８月１日（金）～８月８日（金）

２）健康科学専攻

概　要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材（看護職及び非看護職）を育成すること、および医療・保健・福祉の領域で看護学を充分に理解し、チーム医療を支える非看護職の人材を育成することを目的として、大学卒業者等を対象に募集した。

募集人員

研究科名	課　程　名	専　攻　名	募 集 人 員
看護学研究科	博士課程（前期）	健康科学専攻	2 名

試験の概略

（単位：人、倍、%）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率	入　　学　　者		
					計	県　内（率）	男（率）
修士課程	1	1	1	1.0	1	1(100.0)	0(　0.0)

試験科目等

試 験 科 目	試　験　期　日	出　　願　　期　　間
総合問題 面　　接	平成 26 年 8 月 30 日（土）	平成 26 年 8 月 1 日（金）～8 月 8 日（金）

３－３　平成 27 年度大学院看護学研究科博士課程（後期）入学試験状況

１）看護学専攻

概　要

より高度な専門性を有し、看護職の指導的役割を担う人材を育成し、もって地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、修士の学位を有する者等を対象に、募集をしたが出願者がなく実施しなかった。

募集人員

研究科名	課　程　名	専　攻　名	募 集 人 員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	2 名

試験科目等

試 験 科 目	試　験　期　日	出　　願　　期　　間
総合問題 面　　接	平成 26 年 8 月 30 日（土）	平成 26 年 8 月 1 日（金）～8 月 8 日（金）

２）健康科学専攻

概　要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材（看護職及び非看護職）を育成する

こと、および医療・保健・福祉の領域で看護学を充分に理解し、チーム医療を支える非看護職の人材を育成することを目的として、修士の学位を有する者等を対象に、募集したが出願者がなく実施しなかった。

募集人員

研究科名	課　程　名	専攻名	募 集 人 員
看護学研究科	博士課程（後期）	健康科学専攻	2 名

試験科目等

試 験 科 目	試　験　期　日	出　　願　　期　　間
総合問題 口頭試問	平成 26 年 8 月 30 日（土）	平成 26 年 8 月 1 日（金）～8 月 8 日（金）

３－４　平成 27 年度大学院看護学研究科博士課程（後期）進学審査状況

１）看護学専攻

概　要

より高度な専門性を有し、看護職の指導的役割を担う人材を育成し、もって地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、本学大学院博士課程（前期）を平成 27 年３月修了見込みの者を対象に、特別研究に関する発表、面接及び出願書類を総合的に評価して選抜した。

募集人員

研究科名	課　程　名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	若干名

審査の概略

（単位：人、倍、%）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率	入　　学　　者		
					計	県　内（率）	男（率）
博士課程	2	2	2	1.0	2	2(　100.0)	1(100.0)

審査科目等

試 験 科 目	試　験　期　日	出　　願　　期　　間
特別研究 面　　接	平成 26 年 8 月 22 日（金） 8 月 25 日（月）	平成 26 年 7 月 17 日（木）～7 月 24 日（木）

２）健康科学専攻

概　要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材（看護職及び非看護職）を育成すること、および医療・保健・福祉の領域で看護学を充分に理解し、チーム医療を支える非看護職の人材を育成することを目的とする。対象者はいなかった。

３－５　進学相談

概　要

本学に進学を希望する高校生等に本学の入試情報や受験についてＰＲするため、看護協会や業者主催の進学相談会に参加し、県内 17 カ所に教員及び職員を派遣した。全体の来場者は、8,558 人であり、本学の説明を受けた学生及び保護者は、290 人であった。

また、高大連携の観点から、県内外の高校等の進路指導担当教員を招いて学内で進学説明会を開催した。来場者は 31 人であった。

この他、若葉祭、オープンキャンパス等の会場に進学相談コーナーを開設した。

３－６　在学生の状況（平成 26 年４月１日現在）

学生総数　397 名（学部生 334 名、院生 63 名）

（単位：人

学生数					
	計	県内	県外	男	女
１年次生	89	53	36	8	81
２年次生	83	52	31	9	74
３年次生	80	51	29	10	70
４年次生	82	47	35	8	74
計	334	203	131	35	299
割合（%）	100.0	60.8	39.2	10.5	89.5
大学院博士前期（１年次生）	23	12	11	5	18
大学院博士前期（２年次生）	19	14	5	3	16
大学院博士後期（１年次生）	5	3	2	3	2
大学院博士後期（２年次生）	4	2	2	1	3
大学院博士後期（３年次生）	12	10	2	2	10
計	63	41	22	14	49
合計	397	244	153	49	348

３－７　各研究室の教育活動

３－７－１　生体科学研究室

１　教育方針

優秀な看護職を育てるという本学の第一の使命に沿って、本研究室では生体（人体）の構造やしくみ、働きを十分に理解した看護職を育てるということを教育目標に掲げている。

２　教育活動の現状と課題

現状においては、学部１年次生ならびに大学院生に対しての生体科学（構造、生理、代謝）についての教育効果は十分であると考える。今後の課題としては、学部１年次生の学習習熟度をさらに向上させることである。

３　科目の教育活動

１）　生体構造論

１年次前期

中林 博道、岩崎 香子

学部１年次生に対して生体（人体）の構造（解剖学）についての講義を行った。

２）　生体機能論

１年次前期

中林 博道、岩崎 香子

学部１年次生に対して生体（人体）のはたらき（機能）についての講義を行った。

３）　生体代謝論

１年次後期

安部 眞佐子

生化学と栄養学の教科書を用いて講義した。生体分子の種類、性質、機能について講義した。生体での反応がイメージできるように、低分子から高分子へと話しを進め、酵素、ビタミン、ミネラル、生理活性物質について解説を加えた。クエン酸回路、電子伝達系、酸化的リン酸化によるエネルギー代謝を生化学と、マクロな視点から栄養学で講義した。栄養の中では、対象者に対して食事指導ができるように、食事バランスガイドや食品についての内容も加えており、食事摂取基準の設定根拠にふれるように努力している。

４）　応用生体機能反応論

４年次　前期後半・後期前半

中林 博通、市瀬 孝道、吉田 成一

１年次生体構造論、生体機能論で学習した内容を再度復習し、実際の医療現場で遭遇する疾患が生体構造・機能のどのような破たんから生じるかを理解させた。特に消化器系、呼吸器系、循環器系、神経系に焦点を当てて概要を述べた。

５）　健康科学実験　II　組織学実習

中林 博道

学部２年次生に対して人体の代表的な８つの組織（肺、胃、肝臓、膵臓、甲状腺、腎臓、精巣、卵巣）について概説した上で実際に顕微鏡下に組織を観察しスケッチし、人体の組織についての学生の理解を深めた。

６）　健康科学実験　X　心電図と心拍変動

松本 佳那子、岩崎 香子

心電図が意味する生体情報について解説を行い、正常波形の読み取りおよび異常波形との区別を講義した。また学生全員が個人の12誘導心電図を測定し、電気軸の測定を行った。

７）　健康科学実験　XI　食物栄養学実習

安部 眞佐子

健康を維持増進させるために有効な食事について実習した。特に、生活習慣病予防として減塩を考慮した食事の摂り方を、塩分計を用いた食品の分析と現在の自分の食事中の塩分量計算、並びに、尿中のナトリウム濃度の測定による一日の塩分摂取量の把握をとおして理解するように務めた。また、嚥下困難者のための嚥下補助食品をとりあげ、物性を観察し試食することによって理解できるようにした。

４　卒業研究

1. 皮膚細胞に対するＰＰＡＲagonistの作用について
2. 皮膚細胞の紫外線障害に対する抗酸化物質の作用について
3. 離乳食開始前の乳児の水分摂取の実態
4. 離乳食開始時期を決める要因について
5. 高濃度リン環境における骨細胞の副甲状腺ホルモン反応性
6. 骨細胞機能に対する高リン環境の影響

１　教育方針

生体反応学研究室では病理学、薬理学、免疫微生物学といった看護の専門基礎分野の科目を看護の視点から理解させることを目標として教育を行っている。外的・内的要因に対する生体反応、これによって発症する様々な疾病、その発生メカニズム、薬の作用、病原微生物による生体反応を科学的に理解することによって、体の変調や病気の成り立ち、回復過程を科学的に捉え、これらから得た知識が１年次～４年次に行われる看護実習や将来の看護実践に結びつけられるように看護の基盤教育行っている。

２　教育活動の現状と課題

昨年に引き続き26年度は23年度カリキュラム（生体反応学概論、生体反応学各論、微生物免疫論：１年次生、生体薬物反応論：２年次生、病態特論：４次生）の中で講義を進めた。看護学を学ぶ学生はこれらの専門基礎分野の科目の理解度が低く、２～４年次における看護実習に結びつけられていない場合が多い。また2年次で行なっている進級試験でもこれらの科目の正答率は低い。それ故に、看護実践を行ううえで、解剖や生理学と共に疾病・病態論や薬理作用を十分に理解しておくことの重要性を認識させ、より看護の視点からこれらの科目を理解できるように講義を進めることが重要である。講義の進め方の工夫として、生体薬物反応論では基礎的な薬物の作用から臨床に用いられている薬物についてまで幅広く講義を行なっている。しかしながら現状では高学年になっても生体薬物反応論の単位が取得できない学生がいる。試験では点数が基準に達する迄、できるだけ再試験を行ようにしている。生体反応学各論では、看護専門基礎の看護疾病病態論の講義に繋げるために、系統別疾患を病理学総論の病気の基本事項と結びつて理解させるように教育している。

３　科目の教育活動

１）　生体反応学概論

１年次後期

市瀬 孝道

本科目は病理学の教科書の病理学総論を講義している。病気の本体や成り立ち、修復過程が理解できるように、以下に示す病気の基本となる病変について具体的な疾患名や臨床症状等を挙げながら講義を進めた。学生が各種疾病の成り立ちや病態を理解し易い内容の易しい教科書を選択し、更に教科書を分かりやすく整理したプリントを配布してパワーポインも使って講義を進めた。講義内容は以下に示すとおりである。退行性病変、進行性病変、代謝障害、循環障害、炎症、免疫、感染症、腫瘍、先天異常、小児・老人性疾患。

２）　生体反応学各論

１年次後期

市瀬 孝道

本科目は病理学の教科書の病理学各論を講義している。生体反応学各論とし、系統別に発生する疾病（病理学各論）についての講義を行った。病理学総論から各論へと疾病の基本から系統別疾患の病態を十分に理解させるのに努めた。講義内容は以下に示すとおりである。消化器疾患、循環器疾患、呼吸器疾患、泌尿器疾患、生殖器疾患、内分泌疾患、血液疾患、脳・神経疾患、運動器、感覚器。

３）　微生物免疫論

１年次後期

吉田 成一、西園 晃、松本 昴

微生物と生体、環境との関わり、特に微生物感染症について、および病原微生物に対する生体の防御反応について、理解させることを主要な目標として、以下の項目について講義した。微生物の特徴、消毒・滅菌法、感染症、各種感染症とその原因、免疫学、アレルギー、自己免疫疾患、腫瘍と免疫。講義プリントを配布することで学生の学習がしやすくなるよう努めた。

学生の学習修得状況は例年と比べて高い学生から低い学生まで幅広く分布した。また、学習修得状況の低い学生の割合は例年より低かった。

４）　生体薬物反応論I

２年次前期

吉田 成一

生体薬物反応論Iは薬理学総論、末梢神経系に作用する医薬品に関する講義を行う科目である。学習範囲が絞られたことから、前年度同様、履修者の学習修得状況は比較的高いものであった。

５）　生体薬物反応論II

３年次前期

吉田 成一

本年度より、生体薬物反応論IIとして一昨年度まで開講していた生体薬物反応論のうち各種疾患に使用する医薬品の講義を行う科目として開講した。

学習範囲が絞られたことから、履修者の学習修得状況は比較的高いものであった。

６）　応用生体機能反応論

４年次前期後半

市瀬 孝道

本講義では、これまで教科書中心で病気や病態を講義してきたものを臓器の肉眼観察や、組織の顕微鏡観察をすることによって、より深く病気を理解させることを目的として行っている。今年度から、県立病院の臨床検査部における講義をとり止め、スライドによる炎症や代謝障害を起した臓器、種々の臓器に発生した良性腫瘍や悪性腫瘍の病理組織を紹介して、マイクロとミクロにおける病態を理解させた。

７）　健康科学実験　III 血液検査

定金 香里

貧血・感染症に関わるヘマトクリット値の測定、CRP検査、赤・白血球数測定、末梢血血球・組織球の形態観察を、ラット静脈血を用いて行った。検査方法はヒトの血液検査に準じて行い、それぞれミクロヘマトクリット法、CRP定性測定法、ミクロピペット法による視算法、ディフクイック染色法を実施した。標本の作製は学生が行い、貧血かどうかの診断も教員の指導の後、学生自身が判定した。形態観察では、各白血球を顕微鏡下で探し出し、スケッチを行った。また診断基準に関する考察や演習も行い、レポートとして提出させた。

８）　健康科学実験　Ⅳ　基礎微生物学実験

吉田 成一

環境中に細菌が存在することを確認させる目的でヒトの表皮、日用品に常在する細菌を培養し、観察した。さらに手洗いによる指先に付着している細菌数の変化を測定した。また、温度によって細菌の増殖に差があることを視覚的に認識した。細菌が抗生物質により発育が阻止されることを認識させる目的で薬剤感受性試験を行った。各種病原微生物の抗生物質に対する感受性を測定し、臨床使用時での使い分けについて考察した。

９）　健康科学実験　Ⅴ　ラットの解剖

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

ヒトの構造を知る一手段としてラットの解剖を行った。例年と同様にラットを開胸、開腹後、系統立てて臓器・器官を観察し、臓器の相対的位置や相互の関連性について理解させた。また、各臓器を摘出して、色、大きさ、重さ等を測定、スケッチすると共に生きた臓器を実際に触れてその形状や感触を理解させた。スムーズに解剖が進行する工夫として、先にデモンストレーションを行いながら十分に方法や内容を説明した。また、心脈管系の図を白板に詳しく描き、実物と比較しながら理解させた。

４　卒業研究

1. PM2.5と粗大粒子のアレルギー増悪作用とLPS阻害剤の抑制効果の検討
2. 菌体成分β-glucanと黄砂によるアレルギー性気管支喘息増悪作用について
3. 細菌由来成分ペプチドグリカンと黄砂によるアレルギー性気管支喘息増悪作用
4. 中国大都市のPM2.5と黄砂中のPM2.5の気管支喘息増悪作用に関する研究
5. 微小粒子PM2.5の胎仔期曝露が出生仔マウスの雄性生殖機能への影響
6. 粒子状物質による免疫修飾作用の簡易評価法の確立とPM2.5の適用

３－７－３　健康運動学研究室

１　教育方針

① 体を動かすことの楽しさを体感する
② 健康・体力を増進するための運動量、運動強度を確保する
③ 個人、社会、人類にとって運動が重要であることを理解する
④ 自分に合った運動を見つける
⑤ 運動習慣を身につける
⑥ 科学的なものの見方や考え方などを知る
⑦ ボランティアを通して様々なことに気づき、考え、今後の人生に活かす

２　教育活動の現状と課題

授業では、看護系の授業や実習を視野に入れ、学生のレディネスにも配慮しながら、授業を構成している。特に、自己から他者へ、過去から未来へ、体験から指導へ、経験から理論へ、個から集団へ、基礎から専門へという流れを考慮して、体験（帰納）と科学的知見（演繹）に基づいた教育を進めることを意識している。

大学に入学すると身体活動量は低下し、特に、一人暮らしになると、食事や休養等がおろそかになりがちである。これにより、体力の低下、体脂肪率の増加、ストレス、自律神経活動の低下やアンバランス等も懸念される。このような点を考慮して、授業にはできるだけ実習を入れて体を動かす機会を増やし、１年生の健康運動では運動強度と運動量の確保のために、行動変容理論等を活用している。

身体運動科学では、身体アライメントの測定評価に各学生所有のスマートフォンを使う等、ICTの活用を図った結果、たいへん好評であった。

特に、最近、保健室を訪れる学生が増えたそうで、来年度は保健室と連携して、学生のストレス測定、自律神経バランス測定、身体活動量測定等を行ない、学生指導に行動変容理論を活用していく予定である。このような取り組みが、科学的で大学らしいアプローチと言える。

３　科目の教育活動

１）　健康運動ボランティア演習

１年次前期・後期

稲垣 敦

教員から学生に相応しいボランティアイベントを募集した後、学生に16のイベント（うち２つは雨天中止）を提示して希望調査を行って調整し、各学生が２つのボランティアを体験し、ボランティア参加毎にレポートを作成した。

２）　健康運動

１年次後期

稲垣 敦、甲斐 倫明、大津留 麗理

運動の楽しさや健康の素晴らしさを体感するため、多くのレクリエーション、ニュースポーツ、バドミントン、テニス（甲斐）、学外講師によるヨーガ（大津留）を行なった。運動量や運動強度の確保にも配慮した。

３）　身体運動科学

２年次前期

稲垣 敦

はじめに科学についての授業を行い、人間固有ともいえる二足歩行や人間にはできなかった飛行について考えた。また、生物の進化に伴う形態や機能の変化、加齢や不活動による体力の低下などに関する科学的根拠に基づいて、体力や運動の重要性や健康との関連性を講義した。さらに、ボディメカニクスの講義を行い、重心、バランス、姿勢、重心動揺、骨密度、身体部位別の体脂肪率・筋量の測定実習も行った。

４）　健康運動学

２年次後期

稲垣 敦

生物の進化に伴う形態や機能の変化、加齢や不活動による体力の低下などに関する科学的根拠に基づいて、体力や運動の重要性や健康との関連性を講義し、トレーニング理論と具体的な運動の仕方についても解説した。これらに加え、運動療法について講義した。また、厚生労働省「健康づくりのための身体活動量基準2013」等に準拠したエネルギー消費量の計算や身体活動量の測定実習も行なった。

５）　健康科学実験　IX　呼吸循環器系持久力の測定

稲垣 敦

自転車エルゴメーターを用いた最大下運動負荷時に心拍数と運動負荷を測定して、心拍数と仕事率の関係、自転車の機械的効率、仕事量と酸素摂取量の関係から最大酸素摂取量を推定し、呼吸循環器系持久力を評価した。実習ではペアを組み、被検者と検者の両方を経験できるようにし、実験中は全ての学生に対し個別に指導した。また、テキストに加えて、測定および計算の仕方を説明したレポート用紙を準備した。説明では、患者や高齢者の運動指導を想定し、安全性や倫理に関して注意すべき点を含めた。実験にあたっては、性別、年齢、運動習慣、運動歴、現病歴や既往歴、当日の体調に配慮した。計算方法のわからない学生には、個別に指導した。

４　卒業研究

1. 通学手段が大学生の心身に及ぼす影響
2. 森林浴の視力回復効果：観葉植物を利用した視力回復法の提案

３－７－４　人間関係学研究室

１　教育方針

人と喜びや苦しみを分かち合い、自他の独自性を尊重することのできる豊かな人間性を養うため、人間関係に関わる基本的な知識やスキル、人間の行動や発達についての理解・洞察を深めるために必要な知識、精神看護学の基礎となる知識の習得を目的としたカリキュラムを編成している。各科目の具体的な教育目標は以下の通り。１）人間関係を形成し維持する方法についての体験的理解（「コミュニケーション論」）、２）カウンセリングの基礎理論の理解とコミュニケーションスキルの習得（「カウンセリング論」）、３）環境を認識し、環境に働きかける存在としての人の機能・発達についての基本的知識の理解（「人のこころの仕組み」）、４）人間を社会や集団内の人間関係を通して状況論的に理解する視点及び対人援助に関する基本的な知識の習得（「人間関係学」）、５）対人援助技術の習得（「行動療法と発達心理」「カウンセリング論」、６）発達心理学の知見をベースとした発達障害の理解（「行動療法と発達心理」）、７）看護と関わる心理学的知識についての理解（「人間関係学」「発達心理と行動療法」「カウンセリング論」）。

授業に際しては、個々の心理現象を看護実践や各自の日常生活での体験と関連づけ、援助スキルや心理検査などを体験に基づいて理解できるようにするため、授業時間内に演習を行ったり、学生同士が話し合い交流する時間を確保している。授業終了毎に学生に感想・コメントの記述を求め、学生の授業理解程度や授業評価の一助としている。併せて、長期休暇中や時間外課題を提出し、学生の学習環境を整備することを心掛けている。

２　教育活動の現状と課題

基本となる教育目標は、人間の行動の法則性に関する基本的な知識の習得、集団レベル・個人レベルでの人間関係の理解、対人援助技術の理解および体験である。学生の理解が表面的なものに留まることを防ぐために、時間外のレポート作成、食堂などのオープンスペースを活用したカウンセリングスキル実践、ペアワークやグループワークなど、アクティブラーニングの機会を積極的に取り入れた教育実践を展開している。授業評価アンケートやレポートに記載されたコメントから得られたデータに関しては、備品の整備・教室変更・演習時のボランティアの活用など、教育活動の改善に結びつけている。研究室での教育実践を、第21回大学教育研究フォーラムで発表した。

３　科目の教育活動

１）　人のこころの仕組み

１年次前期

吉村 匠平

前期前半は１クラス編成、前期後半は２クラス編成で進行した。外界の対象や自分自身を認識する存在としての人間の機能の特徴、２年次前期「行動療法と発達心理」の理解に必要な学習心理学の基本的な知識について、小実験＋ペア活動＋意見交流を行いながら授業を行った。毎時くじ引きによる座席指定を行い、講義時間中にペアで行うグループワークを積極的に取り入れ、教室全体での交流を求めた。学生が発言した場合、その場でクーポン（平常点１点）を付与し、発言を奨励した。さらに積極的な話し合い活動を行っているペアにもクーポンを付与した。時間外学習の機会としては、毎時講義終了後にショートレポートの作成を求めた。ショートレポートに記載された学生のコメントの中で講義内容の理解を促進するものを「講義通信」として集約し配布した。評価における期末テストの比重を軽くし、平常の学習の積み重ねで評価を行うようにした。また、ネコバス上に講義内容の理解を促進するための自己学習課題を提示し、提出者には平常点を付与した。

２）　コミュニケーション論

１年次前期

関根 剛

コミュニケーションは、情報の受信－理解－発信の繰り返しであることを軸にして、それぞれの領域についての知識とスキルを体験・習得するための講義を実施している。まず、体験的に理解させるためのグループエクササイズ、受信として行動観察、発信としてプレゼンテーション、全体を通じての理解としてプロセス・レコード等を行った。また、グループでの動きを理解するため、リーダーシップ・メンバーシップを、文化やインターネットにおけるコミュニケーション等についての講義を行った。全体として座学・教養に終わらせず、エクササイズ・演習を盛り込んだり、看護との関連性を示したりしながら、体験を通じての理解を進めさせることを重視した。

３）　人間関係学

１年次後期

吉村 匠平

自他の「人格、性格」をどのように理解するかについて、実体論的理解（類型論、特性論）と状況論的理解の双方の視点から考える機会を提供した。加えて、自他を状況論的に理解するための態度としてカウンセリングマインドについて取り上げた。授業は２クラス編成で進めた。教室の机をコの字型に配列し、学生相互がお互いの発言を対面状況で確認できる環境を構成した。前期の「こころの仕組み」同様、毎時くじ引きによる座席指定を行い、ペアワークを行った上で全体への発言を求めた。発言ペアだけではなく、授業中のペアワークの態度が優れているペアに対してもクーポンを付与した。その結果、授業時間内の活動が活発になっている。授業時間外の学習機会として、ショートレポートの作成に加え、ネコバス上に提示された自由課題への投稿を求めている。今期より、学生にペア活動の評価を求め、学習活動のアセスメントを行った。

４）　カウンセリング論

１年次後期

関根 剛

カウンセリングスキルの習得（基本的なマイクロカウンセリングの知識・ロールプレイ）、主なカウンセリング理論（精神分析、認知行動療法、クライエント中心療法）、看護で関わる対象別理解（不登校・非行、災害被害)などについての講義を実施した。ロールプレイにおいては、学生４人のグループで、相互に相談や悩みの事例を示して、互いに聞き役、話し役、観察者として、様々な視点からのロールプレイを実施させた。

５）　行動療法と発達心理

２年次前期

関根 剛、吉村 匠平

行動分析、認知行動療法の基礎について解説し、学生自身の日常の健康行動改善の目標設定、行動改善プログラムの作成を行わせた。作成したプログラムは、夏期休暇中に実施して、作成したプログラムの問題点・改善点についてレポートさせる等、具体的・体験的に行動療法的アプローチを理解させた（行動療法）。

進化発達心理学の知見に基づき、言語発達、運動発達、アタッチメントについて、受講者がお互いに意見を交流しながら講義を進めた。加えて、ICFモデルによる発達障害の理解をベースとして、発達障害をスペクトラムという視点でとらえることの重要性、サポートの視座などについて理解させた（発達心理）。

４　卒業研究

1. ファッション志向性と将来のナース服の着こなしとの関連
2. 青年期の愛着とファン対象の有無との関係
3. ベッドサイドにおけるパーソナルスペースについての実験的研究
4. 作業休息時における動物動画視聴による作業効率への影響
5. 入学早期の志望動機と生活スタイル志向性との関連

１　教育方針

環境保健学研究室では、環境保健学が直接カバーする知識や問題以外に、物理、化学、生物、統計学に関係する基礎的事項から社会的な問題まで広くカバーすることで、学問の奥深さを学ぶ機会を提供している。学部教育では環境保健学概論に加えて、環境保健学詳論がスタートし、基礎的な項目と社会的な問題との関連を意識しながら、学問に対するモチベーションを育成する講義となるようにしている。健康と環境は、看護の基礎にある科学的な見方として不可欠であること、健康がどんな要因と関係しているのか、そのことを知るためにどんなアプローチがとられていて、また、どんな考え方で健康に対処しようとしているのかを環境保健の講義から学ぶように指導している。一方で、放射線は医療において不可欠な存在であることから、放射線の基礎知識から健康影響、医学利用まで保健医療に携わる者が身につけるべき知識を教授している。大学院教育では、広域看護学コースの環境保健学特論（必修）、NPコースの放射線・超音波診断演習の支援を中心に、健康科学専攻の院生の研究指導を行っている。

２　教育活動の現状と課題

１年次から２年次に進学すると、他の科目の負担が大きくなるために、国家試験との関係が比較的薄い内容であるためか、環境保健に対する関心が低下することは従来からの課題である。２年次の環境保健学詳論では、参加型の授業を取り入れ、環境と健康の関係を自ら調べ考えるよう指導した。４年次の選択科目である「環境倫理学」は選択する学生が年々少なくなっているため、平成23年度入学生からは、「環境リスク論」と統合して、演習方式で環境保健全体に関係する課題へのアプローチについて基礎力をアップする「環境疫学・生物学演習」に衣替えしている。

３　科目の教育活動

１）　環境保健学概論

１年次前期

甲斐 倫明、小嶋 光明、石川 純也

環境保健全般をカバーすることではなく、基本的な考え方や健康との関係を理解するための方法を中心に講義をしている。講義内容は次の通りである。1)環境と健康に関する社会問題、2)環境保健の基礎概念（曝露、量反応関係）、3)環境保健の基礎概念（因果関係と相関関係）、4)がんの生物学、5)がん以外の健康影響、6)人における発がん、7)環境疫学:基礎、5)環境疫学:事例、9)安全性試験１、10)安全性試験２、11)ライフスタイルと健康、12)環境リスク論、13)環境リスク心理学、14)環境リスクの諸問題とまとめ、15)試験および解説

２） 環境保健学詳論

２年次前期後半

小嶋 光明、甲斐 倫明

環境と健康との関係を方法論と事例を通して学ぶために、学生に参加型の授業を導入し理解を促す配慮をした。講義内容は次の通りである。
1) オリエンテーション、2) 健康影響の原因、3) MRI検査でなぜ金属物を持ち込めないのか、4-1) 低周波音問題が通常の騒音問題とは同じに扱えないのはなぜ、4-2) ミクロショックでは微量な電流でもなぜ致死的なのか、5) 鳥インフルエンザはなぜ世界が注目して警戒するのか、6) BSEはなぜ全頭検査をしてもリスクがあるのか、7-1) 食中毒はなぜへらないのか、7-2) 熱中症対策に塩分はなぜ必要か、8) PM2.5の健康影響をどう考えればよいか？その対策は、9) 化学物質中毒死の中で最も多い原因が一酸化炭素中毒であるのはなぜ、10) 社会的な喫煙対策が進まないのはなぜか、11-1) 給食でのアレルギー死亡事故はなぜ起きるのか、11-2) 食生活が健康に大きく影響するのはなぜか、12-1) 遺伝子検査・染色体検査の陽性結果をどう伝えるか、12-2) アスベストは規制してもなぜ将来への影響が危惧されるのか、13-1) 健康診断のマイナス面は何か、それはなぜ生じるのか、13-2) 予防ワクチンの集団の効果も期待し、個人の副作用リスクを避けるにはどうするか、14) 多くの健康食品の効果はプラシーボ効果で説明できるか

３） 放射線健康科学

２年次後期前半

甲斐 倫明、小嶋 光明、石川 純也

放射線と健康との関係を理解するために、放射線の物理、生物、医学、リスクまでの広範囲の知識をコンパクトにして講義を行っている。その際、物理や生物は同時期に実施している健康科学実験と合わせて理解できるように配慮している。また、医療における放射線利用に対する基礎知識を持たせる。昨年度に引き続き、県の関係機関からの専門職が受講した。講義内容は次の通りである。
1)放射線影響と放射線防護の歴史、2)放射線とは何か、3)放射性同位元素と放射能、4)放射線と物質との相互作用、5)放射線の線量、6)身近な放射線・放射線源、7)放射線の生体応答（DNA損傷と突然変異）、8)放射線の生体応答（染色体異常と細胞死）、9)放射線の健康影響（確率的影響）、10)放射線の健康影響（確定的影響）、11)放射線リスクの評価とその不確かさ、12)安全の考え方と放射線防護基準、13)患者のための放射線防護、14)医療における放射線利用、15)試験および解説

４） 環境疫学・生物学演習

３年次後期後半

甲斐 倫明、小嶋 光明、石川 純也

健康と環境（生活習慣を含む）との関係は疫学的な統計によって明らかになってくる知見、分子細胞レベルの生物的な仕組みを通して明らかになってくる知見とがある。基礎的事項の演習と事例を通して、健康と環境との関係についての知見が生まれてくる仕組みの基礎を論じた。講義内容は次の通りである。１）データのバラツキとヒストグラム（血圧、身長、体重、BMI）、３）正規確率紙の利用と正規分布からのズレ、４）年齢調整死亡率と標準化死亡比、５）ケースコントロール研究とオッズ比、６）コホート研究と相対リスク、７）バイオインフォマティクスとゲノム科学、８）バイオテクノロジー、９）染色体と遺伝子、10) 遺伝性疾患と遺伝子診断、11) ウイルスとインフルエンザ

５）　健康科学実験　VI　放射線

石川 純也

本実験では、実験前に身近な放射線の種類、自然放射線または人工放射線による被ばく線量の概略、放射線測定方法及び測定機器の概略などについて講義し、実験では実際に屋内外の自然放射線量、人体を構成する物質の放射線量、臨床で想定されるベッドサイドでの放射線量を測定させた。これらの実験より、普段、人々が生活している空間における年間被ばく線量、人体を構成する物質からの年間被ばく線量などを算出させ、その量を具体的に把握させた。また、ベッドサイドの実験では、臨床の現場で日常的に使用される放射線による被ばく線量を具体的に把握させ、放射線防護の観点から非験者以外の患者や医療従事者に対して講じるべき措置について科学的に把握させた。

６）　健康科学実験　VII　測定誤差と変動

甲斐 倫明

医療では様々な測定が行われ、その測定値をもって判断が行われる。測定値は、測定の原理や測定条件、あるいは測定器の特性などから同じ対象を測定しても同じ数値を得るとは限らない。本実験を通して、測定値のもつ誤差および影響を与える因子よる変動を区別して理解し、測定データの読み方を学ぶ。実験内容は次の通りである。1)血圧測定の誤差と変動、2)体温測定の誤差と変動

７）　健康科学実験　VIII　染色体異常

小嶋 光明

染色体の実体と染色体異常の発生機序について理解を深めるために、正常染色体および放射線によって誘発した異常染色体の標本を、学生一人一人に検鏡させた。また、染色体異常が疾患の原因となり得る例としてダウン症候群と慢性骨髄性白血病を取り上げ、核型分析等を通して異常染色体を同定させた後、疾患との関係について簡単な解説を加えた。

４　卒業研究

1. 甲状腺がんの癌登録罹患率とスクリーニング有病率との関係に対する腫瘍増殖モデルによる分析
2. γ線をくり返し照射したC3H系マウスにおける造血系細胞数の経時的変化
3. γ線照射したC3H系マウスの脾臓及び骨髄に存在する造血幹細胞の細胞動態の比較
4. γ線照射したC3H系マウスの造血幹細胞における8-OHdG生成の経時的変化
5. 低線量率γ線長期連続照射したマウスの脾臓内造血幹細胞の細胞動態変化
6. 造血幹細胞の分化過程に関する数理モデルの構築と実験データ比較分析

３－７－６　健康情報科学研究室

１　教育方針

科学的根拠に基づいた看護実践と基盤となる、情報収集と分析および発信のための知識と技術の修得をめざして教育を行っている。また、学習と業務における情報処理の能力を早期に高めることができるよう配慮し、実践的な教育内容を展開している。

特に、単なるデータの取り扱い技術や数的処理の知識として学ぶのではなく、看護職として、また一人の社会人として適切に判断・行動ができる能力を養うため、具体的な事例において自ら考えて学習することを推進している。

２　教育活動の現状と課題

看護師のみの養成となった学部カリキュラムにおいて，EBNや看護業務の基盤となる知識・技術を教授することを主目的とした教育内容及び進め方についてもおおむねひと区切りとなった。看護の臨床における情報の取り扱い技術やEBNの中核となる疫学・統計学の知識ならびに一般教養としての統計学を中心とした数的処理能力、情報リテラシーの獲得を目指した教育内容を整理して、充実することができた。

しかし、教授内容に関する理解不足や興味関心の欠如といった問題への対策は今後も継続する必要を認めている。特に、数学的基礎能力の確認とリメディアル教育、自己学習への対応など、学生の状態に注意深く配慮しつつ，更に進めていくことが必要であろう。

３　科目の教育活動

１）　健康情報学

１年次前期

佐伯 圭一郎

保健統計・疫学領域の内容を教育することは継続しているが、保健師に固有と考えられる部分を一部の事例紹介にとどめ、看護師としての基礎知識、EBNの導入としての内容を一層充実させた。

内容として、様々な保健統計の意味と現状、EBNのための基礎的な疫学の諸理論を教授した。また、健康情報処理演習の演習テーマとして、保健統計の現状について自ら情報収集と分析、疫学データの基本的な解析を設定し、知識の定着と応用能力の向上を図った。

２）　生物統計学

１年次後期

野津 昭文、佐伯 圭一郎

看護学研究を遂行する上で必要とされる記述統計学、推測統計学の基礎的知識を身につけることを目標に講義を行った。

講義の進行については、多くの履修者にとって本講義が本格的に統計学に触れる最初の機会となることから、特に重要となる推測統計学の中心的内容（区間推定、仮説検定）は、前週の講義内容に関する復習を冒頭に行い、確実な定着を図った。

問題演習については、講義の合間に具体的な問題を解く時間を与えることで、講義が単調になることを防ぐとともに、学生の理解度の把握や指導方法の調整に努めた。また、各単元ごとにレポートを課すことで、履修者個人の定着度の確認を行うとともに、自己学習を習慣づける取り組みを行った。

データ解析手順については、推測統計学を具体的に捉えるために、コイン投げ等の試行や簡単な官能検査の演習を行い、得られた実データに対して統計的仮説検定を適用するなどの実験的演習を取り入れた。また、健康情報処理演習において計算機を用いたデータ解析手順も併せて学ぶことで、理論と実践を切り離すことなく理解するための工夫を施した。

３）　健康情報処理演習

１年次

品川 佳満、野津 昭文、佐伯 圭一郎

パーソナルコンピュータを活用して、学習や保健医療の場における情報管理の道具として役立てるための技術について演習形式で教授した。主な演習内容は、ネットワークの利用（WWW、メール、ファイルサーバ、コミュニケーションサーバ）、データ管理、ワードプロセッサ、表計算、プレゼンテーション、ホームページ作成、画像処理、データベースの利用、統計データの分析である。また、演習に加えて、実際に医療現場で扱う情報システム（オーダリングシステム、電子カルテシステムなど）について講義形式で解説を行った。さらに、コンピュータの技術的な面だけでなく、ネットワーク、情報セキュリティ、情報モラルなど情報を扱う上で重要となる知識についても解説を行った。

復習および技術習得のチェックが行えるように、コミュニケーションサーバを活用して練習問題や課題を提示した。

４　卒業研究

1. 患者個人情報取扱い事故の年次推移―法規制の効果及び情報通信技術の進展との関係―
2. Webサイトの発信者・発信形態による医療情報の質の違い
   ―「クローン病」と検索した場合を例に―
3. 日本のインターネット依存の現状と対策 ―韓国・中国と比較して―
4. 災害現場における看護師に求められる能力―DMATや救護班の活動記録からの考察―
5. 看護師の地位・待遇に関する日米韓比較
6. 後期高齢者医療費の地域差に関連する要因の分析

３－７－７　言語学研究室

１　教育方針

言語活動の四技能であるSpeaking, Listening, Reading, Writingをバランスよく伸ばすことを念頭に、将来の専門分野で役に立つ英語が身に付くよう、実用的で易しい英語コミュニケーション（Speaking, Listening）に取り組ませている。また、人間としての感性を養うという観点を含め、英語処理能力を高めるために、易しい英語で書かれた様々な分野、ジャンルの英語読本を積極的かつ多量に読ませる「多読」を導入、実施している。更に、教室内での活動を課外でも維持継続できるよう、CALL（Computer Assisted Language Learning:コンピューターを用いたウェブ学習システム）によるTOEIC対策英語学習プログラムを実施している。

２　教育活動の現状と課題

ネイティブ・スピーカー教員の授業では、自作の教材を毎回配布し、学生はパートナー同士、または、小さなグループで英語コミュニケーション（Speaking, Listening）を練習する。１年次生の講義内容は、一般的な日常生活の話題（Food, Shopping, Home, その他）、２年次生の講義内容は、看護英語である。各話題について３～４週間かけてじっくり練習を行い、同じ学生が毎回同じグループに含まれないように配慮することで、新鮮な気持ちで楽しく学習できるよう工夫している。応用可能な文法・語法の講義をもとにして、学生同士で授業ごとの討論課題について英語で意見交換などの言語活動を行う。また、１年次生前期の授業では、CALL学習を必修授業として取り入れている。授業を二部構成とし、上記の自作教材を用いたグループでの英語コミュニケーションの練習と、CALL学習を行なう。１クラスを２グループに別け、グループ毎に交互に講義を行っている。両者をバランスよく組み合わせ、学生の英語運用能力の維持、向上を目指す。

日本人教員の授業では、授業を二部構成とする。前半では、英文テキストの日本語訳を最初に配布し読ませることで、テキストの内容を理解、把握させ、それをもとに、課題となるテキスト部分についての語彙、文法、発音についての講義を行う。こうした基本的な理解を基盤として、ネイティブ・スピーカーの発話を音声CDで確認し、実際に発声の反復練習を行う。講義で取り扱った課題テキスト部分は次週までに暗唱できるようにしてくることが課題となり、次週には実際に暗唱（含む筆記）できるかの確認を行う。後半では、易しい英語で書かれた書物を、辞書を用いることなく読み、総読書語数100万語を目指す多読を実施する。「辞書は使わない・分からない部分は飛ばす・つまらない本は途中でやめる」を原則に、学生自らが読む本を自由に選択することで学習動機を維持しつつ、英語運用能力の維持、定着、向上を目指す。

言語能力の向上には継続学習が不可欠である。しかし時間的な制約もあり、教室内での活動は限定的にならざるを得ない。そこで、年間を通し、全ての学生（１～４年次生、大学院生）が自ら自由に英語学習に取り組めるよう授業外での多読教材の貸し出しや、CALLシステムによるTOEIC対策のための英語学習、学習期間前後のTOEIC IP試験を実施している（前期：１年次生必修。後期：全ての学生を対象に希望制にて実施）。受講した学生は、真剣に取り組み、結果として学習効果の向上がみられた。

CALLシステムについては、授業での取り組みを将来看護の道を目指す多くの学生に知ってもらうため、７月20日（日）のオープンキャンパスにて、２回の模擬授業を実施した。参加した学生や保護者の方々に、実際にCALLシステムを体験してもらい、授業への理解を深めてもらった。

学生の英語学習に対する意欲の維持や学習活動の継続を図るべく、日々学習環境の整備を模索している。さらに魅力的な教室内活動の実現と自主的な学習へのきっかけ作りをいかに構築していくかが今後も継続課題である。

３　科目の教育活動

１）　英語Ⅰ－Ａ１

１年次前期

宮内 信治

英語の音声については、母音を中心に発音記号と発声法について確認と練習を行い、その定着を図った。講読では、デイル・カーネギー、アン・リンドバーグ、ミッチ・アルボム、バートランド・ラッセルなど20世紀のエッセイや文学、哲学を題材にした英語名文集を教科書として用いた。テキストに併記されている日本語訳を参考に、その解釈に至る基本的な文法の理解を深め、添付の音源CDを活用してスムーズな音読を習得すべく、発声練習を試みた。学んだ英文を帳面に書写し、次の講義までに暗唱音読ができるようにすることを課題とした。現代においてもなお規範となる英文テキストの一部を暗唱することにより、英語の世界の教養の一端を体得できたと思う。

２）　英語Ｉ－Ａ２

１年次後期

宮内 信治

英語の音声については、子音を中心に発音記号と発声法について確認と練習を行い、その定着を図った。講読では、前期と同じ教科書を用いて、リチャード・ファインマン、アインシュタインのエッセイに触れて理解を深めると同時に、シェークスピアのソネットにも触れた。また、国際的に著名な日本人が英語で著した規範的名文として、新渡戸稲造『武士道』、鈴木大拙『禅と日本文化』を読むことで、日本人とはいかなるものか、という問いに答える英語を、書写と音読、暗唱で体得した。

３）　英語Ｉ－Ｂ１

１年次前期

Gerald T. Shirley

This class had two components: an eight-week-long Computer Assisted Language Learning (CALL) session, and speaking and listening activities in the classroom. The CALL session focused on listening, reading, and grammar problems. Students took the TOEIC test before and after the CALL session. In classroom work, a topical syllabus was used. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities were used to maximize student interaction. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students had to participate actively in every class.

４）　英語Ｉ－Ｂ２

１年次後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

５）　英語II－Ａ１

２年次前期

宮内 信治

原書Word Power Made Easyを用いて、英語語彙の増強を図った。ギリシャ語、ラテン語起源の語源についての知識を習得しつつ、性格を描写する語彙、医療職者を表す語彙を学び、さらにそこから派生する様々な語彙についての習得に努めさせた。学習した次の週に単語小テストを課し、学習の確認と評価とした。期間中に３回、教科書本文の中から教員が指示した原文について、音読暗唱の課題を与え、評価した。1年次に引き続き、多読活動にも取り組ませた。

６）　英語II－Ａ２

２年次後期

宮内 信治

前期に引き続き、原書Word Power Made Easyを用いて、英語語彙の増強を図った。医療職者を含めた実践者（practitioners）と、科学者についての語彙を学習し、さらにそこから派生する様々な語彙についての習得に努めさせた。学習した次の週に単語小テストを課し、学習の確認と評価とした。期間中に３回、教科書本文の中から教員が指示した原文について、音読暗唱の課題を与え、評価した。多読活動も実施させた。

７）　英語II－B１

２年次前期

Gerald T. Shirley

This class had two components: an eight-week-long Computer Assisted Language Learning (CALL) session, and speaking and listening activities in the classroom. The CALL session focused on listening, reading, and grammar problems. Students took the TOEIC test before and after the CALL session. In classroom work, a topical syllabus was used. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities were used to maximize student interaction. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students had to participate actively in every class.

８）　英語II－B２

２年次後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

９）　英語III

３年次後期後半

Gerald T. Shirley、宮内 信治

講読担当　語源学の知見を基に医療や看護に関連する語彙を習得させた。また、論文構成を確認したうえで、実際に発表された英語の原著論文を読解させた。双方ともに、看護・医療に関連する新しい語彙と知見に触れさせることができた。

４　卒業研究

1. 臨床実習において看護師から受ける否定的ケアリング体験が看護学生の学習に及ぼす影響
2. J-POPからみる若者の恋愛観－歌詞の中の携帯電話に関する言葉から－
3. 介護老人保健施設での認知症ケアにおける関わりの現状調査：ユマニチュードに着目して
4. 地方都市の商業施設における多言語対応の実態

３－７－８　基礎看護学研究室

１　教育方針

基礎看護学では看護学の導入部分として看護の歴史やその発展及び看護理論を理解するとともに援助方法の基礎について学ぶカリキュラムを実施している。具体的な教育目標と該当する科目は(1)看護とは何か、看護の本質と機能および看護専門職の役割と活動を理解する(「看護学概論」)、(2)日常生活の援助技術および医療に伴う看護技術の基礎を理解する(「生活援助論・医療技術論」)、(3)看護を学ぶ初学者が実践と理論は表裏一体の関係であることを知る(「看護理論入門」)、(4)入院患者に接しながら、看護の対象の生活環境や心身の状態をふまえ、専門職としての看護師の役割を理解する(「基礎看護学実習」)等である。講義を行うにあっては上記の科目の学習進度にそってさまざまな看護実践と関連づけたり、実際に体験させたりしながら、双方向の教育をめざし、看護の基盤としての理解が進むように配慮している。

２　教育活動の現状と課題

カリキュラムの改正にともない、講義・演習・実習が有機的に結合されるように具体的な教育目標の実施に当たっては特に配慮をした。専門職である看護師について理解させ、将来の進路に対しても方向づけできるように学生同士の討議やグループワークも取り入れて行った。演習での視聴覚教材の活用や講義、実習前後のレポート指導なども強化して行った。また昨年同様にe-learningシステムの充実に取り組み、学生が活用できるDVDの作成を行った。学生が大学だけでなく、自宅でもe-learningシステムが活用できるように、関係部署への働きかけや情報収集を行った。今後、少ない講義時間や演習時間を補う効果的な指導の検討や講義等では時間制約の中で不足しがちな自らがやってみる、考えてみる活動を増やすことを目標に取り組んでいく。

３　科目の教育活動

１）　看護学概論

１年次前期

伊東 朋子、秦 さと子

看護学の導入として看護とは何か、看護の本質と機能および看護専門職の役割と活動について理解させ、自らの看護に対する興味関心を高揚させることができるように配慮した。講義中心の授業展開に偏らないようにできるだけ、学生が主体的に考えることができるように教材の精選や提示方法を検討して、学生が興味を持って積極的な参加が可能となるように配慮した。学生が調べたものを発表する機会を多く設け、筆記試験だけの評価ではなく、発表した内容や回数も点数化して加点した。

２）　看護理論入門

１年次後期

伊東 朋子、秦 さと子

看護活動に必要な看護理論に焦点を当てて、看護理論とは何か、看護理論の必要性などについて理解させた。主な理論家について事前学習させて、学習内容を発表させながら、講義を展開した。2段階(基礎看護学)実習への橋渡しとして、生活援助論で学んだ具体例などを取り上げ、実際の臨床現場における看護理論の考え方について指導した。

３）　生活援助論

１年次前期後半・後期前半

秦 さと子、伊東 朋子、巻野 雄介、水野 優子、石丸 智子

看護援助を行う意義やこれまで学習した基礎知識を根拠として看護援助と結び付けること、看護基礎技術を対象者にどのように応用していくのかという点を主軸に講義構成をし実施した。また、演習では、対象の安全、安楽の視点で常に自分の援助を振り返るように指導を行うと共に、単に技術の手順を覚えるのではなく原理原則に基づいて技術展開が想起されるように測定などの科学的な側面の演習を取り入れた。さらに、学生間で色々な視点から考えだした技術展開を発表してもらうことで、さまざまな工夫や判断があるということを感じてもらい、一通りの技術ではなく、目的に沿って対象に合わせた技術展開を考える思考につながるように工夫をした。これに際し、担当教員の指導方針の統一を図るため単元の担当教員を中心に演習構成に関しての事前の打ち合わせを行い、対象学生のレディネスに応じた授業展開に努めた。課外での自主学習環境の調整のため、e-learningの整備、教員の指導体制の調整などを行った。

４）　医療技術論

２年次前期

秦 さと子、伊東 朋子、巻野 雄介、水野 優子、石丸 智子

医療技術論では対象の身体侵襲を伴う援助技術が中心となることから、対象の安全を最優先とすることを常に自覚して行動することを指導の中心とした。また、医学的検査や治療の際に付随して発生する対象の苦痛や不安をできるだけ軽減し、検査の目的や治療の効果が最大限に達成されるように援助する方法について自ら想起し判断できる力を育てるために、解剖生理学などで得た知識との統合や生理的機能を活かした看護手法について自ら考える構成とした。さらに、看護技術の原理を科学的に体験することで技術の背景にある法則性や科学性に基づいた技術の習得につなげられるよう工夫した。課外で自主学習できるようにe-learningの整備や教員の指導体制の調整など学習環境の調整も行った。

５）　基礎看護学実習

１年次後期

藤内 美保、伊東 朋子、石田 佳代子、秦 さと子、河野 優子、巻野 雄介、川野 明子、樋口 幸、植田 みゆき、中釜 英里佳、河野 梢子、甲斐 博美、小山　珠美、田中 佳子、江月 優子、水野 優子、石丸 智子、西部　由里奈、杉本　圭以子

１年次後期後半(01/9～01/26) に２単位を担当した。

既習科目の学習内容と実践が統合できるように実習前・実習後指導を入念に行った。患者1名を受け持つ本格的な実習としては初めての学習であるため、実習施設の看護部長による講話を依頼し、実習に対する動機づけを目的に施設実習初日に行った。また3つの実習施設(15病棟)での実習が望ましい形で展開できるように担当教員や学生の構成メンバーを十分に検討し、実習施設での備品・消耗品等の整備にも努めた。冬季という実習時期の問題もあり、実習病棟でのインフルエンザ蔓延による実習病棟の変更や風邪による学生自身の欠席などもあったが、帰学日等を活用して、不足分を補習指導した。

４　卒業研究

1. 筋萎縮性側索硬化症患者における催眠レベル測定値(BIS)を用いた光環境の違いによる睡眠支援の検討
2. 日本ALS協会会員を対象としたALS患者の夜間睡眠の現状と課題
3. A県内のがん拠点病院における連携の実態調査
4. スペクトログラムと音声波形による嚥下音の特徴
5. 有酸素運動の嚥下反射機能への効果
6. 足関節の底背屈運動が総頸動脈の血流速度に及ぼす影響

１　教育方針

看護アセスメント学は、基礎看護科学講座に位置づけられ、人の健康問題について、根拠に基づきアセスメントできる能力を養うことを目的としている。看護の基盤となる人間科学講座で教授された内容との融合を図りつつ、身体的、心理的、社会的側面から看護学の視点でアセスメントできることがねらいである。現在教授している具体的な科目は、「看護疾病病態論Ⅰ」「看護疾病病態論Ⅱ」「ヘルスアセスメント」「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」「看護アセスメント学実習」である。

「看護疾病病態論Ⅰ」「看護疾病病態論Ⅱ」では、主要な疾病の理解や病態の理解、さらに「ヘルスアセスメント」においては、看護師の五感を活用し頭部からつま先まで身体の観察ができる能力を身につけ、身体的なアセスメントができる知識・技術に加え、これらを踏まえた看護過程の展開ができるための基礎的能力を身につける。「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」は、看護過程の展開ができることを目的とし、講義および演習を組み合わせて、知識の習得を段階的に行っていく。個人およびグループワークを通し、一人一人が看護過程の展開ができる基礎的能力を養う。2週間の「看護アセスメント学実習」では、受け持ち患者と関わり、看護過程の展開を行い、患者の立場を常に考え、患者の健康問題を見極め、適切な看護ケアにつなげられるための思考と実践能力を養い、専門看護学領域の基盤を作る。

２　教育活動の現状と課題

平成23年度改正カリキュラムが進行し、4年間で看護師教育を充実させることを考え教育している。特に看護アセスメント学が担う科目では、エビデンスに基づく思考過程、判断能力を高める教育を行うことである。授業の目標、授業構成、授業方法、授業評価等に対して、例年のように見直し少しずつ改善を試みている。今年度は、学生自らが自主的に思考することを強化するため、2年次の看護疾病病態論Ⅱにおいて、各講義で病態のメカニズムに関する個人レポート課題を課し、これらの内容を踏まえ、グループワークをとおして、課題に関する病態の理解を深め、他学生に説明することで、思考訓練の場とし、科学的根拠に基づいた思考力の基盤を形成することをねらいとした。平成21年度改正カリキュラムから新たに加わった「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」の科目の理解度など調査を平成24年度に行ったが、おおむね理解度は良かった。そのため科目目標や方法は踏襲しているが、時期を半期それぞれ前倒しにし、「ヘルスアセスメント」科目と関連させながら並行して授業を進めるよう計画した。しかし学生にとっては混乱する部分もあり順序性を整理し、授業を進めていくことが課題となった。看護アセスメント実習では、在院日数の短縮や患者の状況の変化に応じて看護過程の展開が困難なケースや、季節的にインフルエンザの流行や積雪などで最終日は実習中止となる場面もあったが、全員が実習目標を到達した。技術面においても、看護アセスメント学実習の前に第１段階看護技術演習を12月に実施し、実習終了後に学生および教員にアンケートを行い、効果がみられたという結果であった。今後は、さらにヒトの構造や機能、病態との融合を図りつつ、人間を包括的に観る視点と分析的に観る視点を深め、エビデンスに基づく判断能力を身につけることが課題である。

３　科目の教育活動

１）　看護疾病病態論Ⅰ

１年次後期後半

藤内 美保、石田 佳代子、河野 梢子、田中 佳子

主な疾患に関する病気の概念、症状・検査・治療などを中心に講義形式で行う。アレルギー・膠原病・感染症、感覚器系の眼・耳・鼻・皮膚、消化器、呼吸器、腎疾患を行った。各系統の解剖や生理の基礎的知識を想起させながら教授した。教科書は系統看護学講座シリーズを使用するとともに、進級試験の範囲である病気の地図帳、健康の地図帳を活用し、配布資料も提供して教授した。専門的内容が多いため、中間試験を実施して、知識の獲得ができるよう配慮した。後期後半の途中に基礎看護学実習が行われるため、学生は疾患をしっかり学ぶ必要性を認識するようである。

２）　看護疾病病態論Ⅱ

２年次前期前半

藤内 美保、石田 佳代子、河野 梢子、田中 佳子

主な疾患に関する病気の概念、症状・検査・治療などを中心に講義および最後にグループワークを行った。授業内容は、脳・神経系、代謝・内分泌系、生殖器系、血液・造血器系、感覚器系の眼・耳・鼻・皮膚を行った。各系統の解剖や生理の基礎的知識を想起させながら教授した。教科書は系統看護学講座シリーズを使用するとともに、進級試験の範囲である病気の地図帳、健康の地図帳を活用し、配布資料も提供して教授した。専門的内容が多いため、中間試験を実施して、知識の獲得ができるよう配慮した。またグループワークは昨年度からの試みで、講義の時に病態のメカニズムに関する個人レポート課題を課した。その内容を踏まえ、グループワークをし、最後に体育館で発表会を行い、他学生に模造紙で図解したもので説明し、理論的・科学的思考をもち意見交換を促した。これらの課題によって疾病や病態に関する理解を深め、思考訓練の場となり、科学的根拠に基づいた思考力の基盤を形成の一助となった。

３）　ヘルスアセスメント

２年次前期後半

藤内 美保、石田 佳代子、河野 梢子、田中 佳子

ヘルスアセスメントでは、身体的側面からの観察に主眼を置き、ヘルスアセスメントの意義、基本技術、健康歴聴取、消化器系、呼吸器系、循環器系、脳・神経系、運動器系のアセスメントについて、講義・演習を行った。講義と学内実習は、別日に実施するように変更したことで、学内実習に臨むにあたっては事前に復習する姿勢が確認できた。さらにこれまで既習した知識・技術を活用することを目的に高齢者のボランティアグループに協力を得て、フィジカルイグザミネーションをさせていただき、高齢者へのインタビューや、正常と異常の判断、フィジカルアセスメントの技術等を効果的に学んだ。最終的に筆記試験と実技試験を実施し、一定の知識・技術の能力を身につけることができた。

４）　看護アセスメント概論

２年次前期後半

藤内 美保、石田 佳代子、河野 梢子、田中 佳子

看護過程の展開の基礎的能力を身につけるため、看護過程の概要、看護過程と基礎理論、アセスメント、看護診断、計画、実施、評価について、講義およびペーパーペイシェントによる個人ワークを行いながら、理解を確実にするよう努力した。個人ワークのペーパーペイシェントはイメージしやすい糖尿病事例を用い、身体面、心理面、身体面からのアセスメントが必要な事例で看護過程を展開させた。個人ワークでは昨年の方法を改善し、段階的にレポートを提出させた。昨年度、病態を深く導けない、検査データをアセスメントできないなどが明らかになり、身体的な知識の充実を図るように指導を強化した。

５）　看護アセスメント演習

２年次後期前半

藤内 美保、石田 佳代子、河野 梢子、田中 佳子

看護過程の基本的知識を活用するために、１グループに５名～６名でペーパーペイシェントによる看護過程を展開させた。事例は、乳がん、肝硬変、白血病の３事例とし、病名や発達段階、性別、それぞれ異なる看護診断が導けるような事例を作成した。学生は既に個人ワークで看護過程の展開を行った上で、グループワークで検討させ、グループメンバーとディスカッションすることで視野が広がりや内容の深まりに繋がったようである。中間発表会と全体発表会を行い、患者の全体像やアセスメントの深まりは確認できたが、病態を踏まえた考え方が課題であった。看護アセスメント学実習で担当教員となる教員にも発表会に参加してもらい、実習指導の際の参考にしてもらった。教員からのアンケート結果では、発表会の参加により学生のレディネスの把握や実習で強化すべき点などが参考になったという意見が多かった。

６）　看護アセスメント学実習

２年次後期後半

藤内 美保、石田 佳代子、伊東 朋子、秦 さと子、川野明子、巻野雄介、石丸 智子、
中釜 英里佳、足立 綾、甲斐 博美、河野 梢子、河野 優子、江月 優子、田中 佳子、小山 珠美、
水野 優子、後藤 成人

１名の受け持ち患者を持ち、看護過程を展開する基礎的能力を身につけることを目的にした。県立病院８病棟、大分赤十字病院５病棟、アルメイダ病院２病棟の計１５病棟に４～６名の学生を配置した。１年次の基礎看護学実習で配置された同じ病院で異なる病棟に配置をした。基礎看護実習は１年次に行われ、１年ぶりの実習であったが、技術チェックなどの技術練習も学内で行い、実習に臨むことができた。在院日数の短縮や患者の状況の変化に応じて看護過程の展開が困難なケースがあったが、インフルエンザの流行や積雪もなく、順調に実習が終了し、全員が実習到達できた。１週目は受け持ち患者の病態を考える、２週目では心理・社会面を総合的に捉え患者の全体像を踏まえた看護診断、看護計画、実施、評価ができるように指導を行った。

４　卒業研究

1. 医療系学生が参加した災害ボランティア活動と課題　―文献調査より―
2. 血液疾患の終末期患者の想い ―看護師の印象に残った患者のことばから―
3. 2つの異なる地域における看護大学生の防災意識の比較
4. 訪問看護ｽﾃｰｼｮﾝにおける大学院NP教育修了生の導入前後の実態調査
   ―訪問看護関連報酬に焦点を当てて―
5. 地方中規模病院の病棟における大学院NP教育修了生の活動と効果
   ―タイムスタディ調査と満足度調査を通して―
6. 摂食嚥下の認知期における感覚情報の役割－3パターンの食事介助方法を比較して－

１　教育方針

成人・老年看護学は、成人期・老年期の対象への看護実践に必要な専門知識・判断能力・援助技術を習得することを目標としている。そのため、成人看護学概論、老年看護学概論、成人看護援助論・老年看護援助論、成人・老年看護学演習、成人・老年看護学実習の各教科を設定している。概論では成人老年領域の発達段階や保健に関すること、理論について学び、援助論では専門的知識を習得するとともに、実践する力を養うために、担当教員以外に臨床で働く様々な医療職者を学外講師として招き、援助方法を学ぶことができるようにしている。さらに成人・老年看護学演習において、健康段階の特徴をとらえられるように、急性期・慢性期・終末期の模擬事例へのケアについて考え学びを深め、ロールプレイを通して関連の看護技術習得する機会を取り入れている。最終的に、成人・老年看護学実習では、医療機関や老人施設において、知識・技術・態度を統合した看護の実践を学べるように組み立てている。

２　教育活動の現状と課題

成人・老年看護学は青年期から老年期までの長いライフスパンにある対象者への看護の学びであり、学習範囲は非常に広範囲にわたっている。そのため限られた時間数の中での学習内容と方法を吟味しながら展開している。成人・老年看護学概論では基礎となる対象者の理解と看護について学生が考えることが必要であり、対象者を理解するための理論を主体的に学習し思考を深められるようにしている。また、成人・老年看護援助論や成人・老年看護学演習では、幅広い年齢層の対象理解や多様な疾病とその治療方法や援助方法の理解を助けるために、具体的な事例、機械器具を提示し臨床経験のない学生の関心と学習意欲を高め印象に残る講義をするようにしている。講義や試験などの質問対応、解答等の時間確保が例年と課題であり、学生との通信ネットワークを用いた対応などフィードバックを強化することに今後も取り組んでいく。

３　科目の教育活動

１）　成人看護学概論

２年次前期前半

小野 美喜、松本 初美

成人期に生じる多様な健康問題と対象へ看護援助の概要を学ぶ目的で、ライフサイクルにおける成人期の位置づけと特徴を発達課題・行動、健康の側面から総合的に理解し、看護を実践していく上で基盤となる知識を教授した。特に中範囲理論を学習し、成人の理解と看護アプローチの学びを深めた。

２）　老年看護学概論

２年次前期前半

小野 美喜

老年期に生じる健康問題と看護援助の概要を学ぶ目的で、ライフサイクルにおける老年期の特徴、健康問題をもつ高齢者の身体的、心理的、社会的問題を理解し、慢性疾患や機能障害を持ちながら日常生活を送る対象への看護援助に必要な知識を教授した。老人施設から外部講師を招き、施設で生活する高齢者の実情について講義する機会を設け、認知症に伴う症状や援助役割などが実例をもって示されたため、学生の理解が深められた。また、高齢者の機能低下とQOL、高齢者の保健医療福祉における課題など文献学習し論述する機会をつくった。学習効果もあがったため引き続き来年度も実施する。

３）　成人看護援助論

２年次前期後半

小野 美喜、松本 初美、江月 優子、中釜 英里佳、河野 優子、西部 由里奈、川野 明子

成人期にある対象者の特性をふまえ、特徴的な健康障害時の急性期、慢性期、回復期、終末期の各期における看護援助方法を学ぶことを目的とし、これまで学んだ障害や疾病の知識を土台に科学的な看護実践のために必要な知識と技術を身につけられられるよう講義を行った。

４）　老年看護援助論

２年次後期

小野 美喜、松本 初美、江月 優子、中釜 英里佳、河野 優子、西部 由里奈、川野 明子

老年期にある対象者の特性をふまえ、特徴的な健康障害時の急性期、慢性期、回復期、終末期の各期における看護援助方法を学ぶことを目的とし、これまで学んだ障害や疾病の知識を土台に科学的な看護実践のために必要な知識と技術を身につけられるよう講義を行った。

５）　成人・老年看護学演習

２年次前期

小野 美喜、松本 初美、江月 優子、中釜 英里佳、河野 優子、西部 由里奈、川野 明子

学生の臨床実践能力の向上を図るため、成人期および老年期の人々を対象に、健康問題に応じた看護過程の展開と看護の方法を学ぶことを目的とした演習を行った。
成人期、老年期の特徴を踏まえ、臨床の場で様々な健康問題を持つ、急性期、慢性期、終末期の対象者に必要な援助を計画し、看護過程の展開の中で援助技術を練習できるように演習を行った。また、模擬患者への健康問題の査定や個別性のあるケアプランの立案、および実践、評価についても学生が自ら主体的に取り組むことができるように演習を行った。

６）　成人急性期看護実習

３年次前期後半・後期前半

小野 美喜、松本 初美、江月 優子、中釜 英里佳、河野 優子、西部 由里奈、水野 優子、巻野 雄介、河野 梢子、田中 佳子、岡元 愛、石丸 智子、川野 明子

成人看護学実習は、急性期・慢性期・回復期・終末期にある患者の看護の特性や看護実践を学ぶために大分県立病院および大分市医師会立アルメイダ病院にて12週間（学生一人５週間の臨地実習と１週間の学内セミナー）の実習を実施した。今年度から教員の指導体制を原則常駐型とし、学生が看護スタッフとの連携を自らとるなど自律的な実践できることを目指した。実習指導者の理解も得られ、学生に対する指導が充実した。今後もチーム医療の中で学生が主体的に行動できるような指導方法を継続していく。

７）　老年看護学実習Ⅰ

３年次前期前半

小野 美喜、松本 初美、江月 優子、中釜　英里佳、河野 優子、西部　由里奈、水野 優子、巻野 雄介、河野 梢子、田中 佳子、川野 明子、石丸　智子、後藤　成人

施設に入所している高齢者および通所している高齢者の生活の支援を通して、対象を理解し、保健・医療・福祉分野における看護職の役割と課題を学ぶ目的で、大分市内および由布市内にある介護老人保健施設６施設、介護老人福祉施設６施設の合計12施設において２週間の実習を行った。各担当教員が巡回しながら指導にあたり、学生は臨地指導者との連携の下で実習を行った。高齢者の生活の質をとらえたリクリエーションの企画や実施などができた。

８）　老年看護学実習II

３年次前期後半・後期

小野 美喜、松本 初美、江月 優子、中釜 英里佳、西部　由里奈、水野 優子、巻野 雄介、河野 梢子、田中 佳子、石丸　智子、川野 明子

老年看護学実習Ⅱは、治療を必要とする高齢者への看護の特性や看護実践を学ぶために大分県立病院および大分市医師会立アルメイダ病院にて12週間（学生一人５週間の臨地実習と１週間の学内セミナー）の実習を実施した。今年度から教員の指導体制を原則常駐型とし、学生が看護スタッフとの連携を自らとるなど自律的な実践できることを目指した。実習指導者の理解も得られ、学生に対する指導が充実した。今後もチーム医療の中で学生が主体的に行動できるような指導方法を継続していく。

４　卒業研究

1. 外来化学療法を受けるがん患者に関わる外来看護師の実践
　　－治療期における看護に着目して－
2. 訪問看護ステーションにおける診療看護師）NP）の効果
3. 特定看護師を導入した介護老人保健施設における高齢者の健康管理
　　－入所から１か月間の看護介入に着目して－
4. 介護老人保健施設における尿路感染症に対する特定看護師の介入
5. 介護老人保健施設における慢性心不全高齢者への介入の実態
　　－「特定看護師を中心としたチームアプローチに着目して－
6. 介護老人保健施設における糖尿病を持つ高齢者への特定看護師の介入

３－７－11　小児看護学研究室

１　教育方針

小児看護学の講義と演習、実習を通して、発達過程にある小児の保健と小児看護の特殊性を理解することをねらいとしている。そのため、小児看護学では対象である小児の成長と発達について発達理論を学び、小児の健康の維持増進・健康障害の現象に対する家族を包含する小児看護の特殊性について理解を深め、小児看護の看護過程の展開とそれに必要な援助技術を学ぶことが目的である。

小児看護学では、基礎看護科学講座で看護理論や看護技術を学んだ学生に対して、小児とその家族への関わりにおいて、小児看護の倫理を思考し小児看護の実践ができるよう成長することを期待して教育を行っている。学生が健康・不健康に関わらず小児とその家族への援助者としての態度を身につけ、肯定的な子ども観を構築できるよう配慮している。

２　教育活動の現状と課題

小児看護学の講義は、２年次前期に15コマ１単位で行う小児看護学概論と、３年次前期に２単位30コマの小児看護援助論と20コマの小児看護学演習を行った。概論では小児を取り巻く保健、福祉、看護などの課題を学ぶ。学生が自分自身の「子ども観」をレポートし、自己の子ども観を認識するように工夫している。３年次前期はより小児看護の専門的な講義と学内演習を通して、学生は多くの小児に関する学びを深める。後期は、それまで学んだ専門的知識を臨地実習で実践し、看護場面に知識を応用する。初めて学生は対象である小児とその家族と出会い、小児看護とは何かを悩みつつ、看護職あるいは大人としての役割を意識し、看護活動ができるように成長するようにカリキュラムを構成している。

最近は少子化で兄弟姉妹も少なく周囲に子どもがいない、また子どもに接したことがないという学生が少なくない。講義では視聴覚教材を多用して、動的な子どものイメージを持つことができるように配慮している。毎回の講義終了後に、講義内容に対する質問や意見を求め、次の講義時間に質問に答え、学生の疑問を残さないようにしている。学生は欠席も少なく意欲的に受講していた。小児看護学の学習内容の定着のために２回に分けて小テストを行い工夫した。また、再試験を実施してフォローした。

３　科目の教育活動

１）　小児看護学概論

２年次前期

高野 政子、草野 淳子

本科目では、小児看護の特質と概要、および小児の成長と発達を理解することを目的としている。基本的概念として小児の特徴を発達的にとらえ、小児と小児を取り巻く環境を考え、小児保健、小児医療の動向を述べ、教育や福祉の視点からも小児看護の役割と重要性について教授した。具体的な内容は次の通りである。1)小児看護学の変遷と小児看護の特殊性、2)世界の子どもの健康と医療、3)子ども観の変遷と子どもの権利、4)日本の母子保健・行政と母子福祉、家族と親子関係、5)小児の成長と発達総論、6)小児の形態・機能的発達、7)心理的・社会的・言語的発達である。８回～14回までは、乳児から学童・思春期までの成長・発達について理論等を展開した。最終回は、学生のフィールドワークの親と子の観察レポートを発表して意見交換することで、子どもを意識的に観察するように動機づけを行った。

２）　小児看護援助論

３年次前期前半

高野 政子、草野 淳子、足立　綾

小児の発達過程の特質を理解するための主要理論に基づき、小児の行動を多面的に捉え、発達過程の応じた日常生活の援助方法と各期の保育と保健を講義し、援助技術の演習を行った。また、健康障害のある小児とその家族への援助方法を教授した。主な講義項目は、1)小児期の主要な発達理論、2)小児各期の発達アセスメント、3)乳児期、幼児期の保育理論と技術、4)学童期、思春期の保健と看護、5)病気の子どもと家族、6)小児の健康障害と看護、7)障害のある子どもと療養生活の援助、8)親子関係に問題のある場合の看護ほか。一方、看護過程の展開は、全員で発表会を開催し、グループワークで展開を完成した事例を２グループずつ発表し意見交換を行った。

３）　小児看護学演習

３年次前期後半

高野 政子、草野 淳子、足立 綾

演習は２つの課題を設定した。前半は小児領域の主要な病態と疾患について講義形式で解説を行い、学生のグループワークによる主要な疾患と看護について調べ学習の作業とその発表形式で行った。また、後半は臨地実習でよく出会う事例を５事例提供し、グループワークで紙上での看護過程の展開について検討し、まとめてレポートして発表した。２つの課題を実施したが、学生は積極的な参加を求められる学生個々に事例展開を求め、グループワークを通して互いの疑問点を話し合い発表する方法で行っている。真面目な取り組みが見られた。一部の学生が個人ワークを軽視する傾向もあり、グループワークに全員が取り組んでいるか、適宜グループワークに入り指導した。小児看護技術の演習は、大分県立病院小児病棟看護師４名を講師として招き、教員と共に援助技術として高機能シミュレータを用いてバイタルサイン測定の実施と技術小テスト、静脈点滴の固定、服薬介助や離乳食の実際などを指導した。指導の方法や内容は指導者間で統一して、20名ずつの４グループに分けてローテーションする方法で指導した。学生と臨床看護師との相互関係が構築されるようにした。

４）　小児看護学実習

３年次後期前半

高野 政子、草野 淳子、足立 綾、岡元愛（4W）、甲斐博美（8W）

小児看護学実習は、大分県立病院に１グループ学生８～９人で６グループ（合計53人）、別府発達医療センターに学生４～５人で６グループ（合計25人）配置とし、専任教員と担当教員と臨床実習指導者の連携により指導を行った。学生１人に対象児１人の受け持つことを目指したが、在院日数の短縮化に伴い、実習期間中に２人の受け持ちする可能性を避けた。１人の子どもを継続できた場合は、学生が遊びの工夫などもみられたが、複数の子どもを受け持つことで看護実践まで到達した学生も少なくない。３日間の保育所実習は、７月末から８月第１週までに実施した。子どもの理解やコミュニケーションができるようになること、病児と家族への関わりがスムーズとなるので健康な子どもの保育は今後も必要と考える。実習の時期は夏季休暇最初に行うことが冬の感染の予防の視点からもよいと考える。

７日間のうち外来実習を半日行った。外来診療の場面に立会い子どもや家族の様子、外来看護師の指導のもと、子どもの発達に合わせた看護技術について学ぶことができた。実習では、受け持ち患児のバイタルサイン測定は全員が経験することができた。実習終了後、実習施設の実習指導者と専任、担当教員で実習反省会を持ち、意見交換を行った。学生の実習到達度や記録に差があると報告された。実習に対して学生が動機づけられ積極的な実習を行えるように指導することが課題と考える。

４　卒業研究

1. 普通校における医療的ニードのある児童生徒の実態と養護教諭の意識調査
2. ワクチン同時接種に対する乳幼児の保護者の意識調査
3. 病院における在宅療養児者と家族のためのレスパイトケアの実態と課題
4. 在宅療養児への訪問看護師の介入に対する母親の認識

１　教育方針

母性看護学では、女性のライフサイクルおよびマタニティサイクルにある妊娠・分娩・産褥・新生児の生理・病態と母子およびその家族への援助の理論と方法について学ぶことを目的としている。科目は2年次に母性看護学概論、母性看護援助論、3年次に母性看護学演習、母性看護学実習で構成している。特に母性看護学実習は周産期に重点をおいて実習を展開している。

２　教育活動の現状と課題

母性看護学では、学内で学んだ理論と技術を実習で実践し、理論と実践を結びつけることを目標としている。母性看護学実習においては、男子学生の増加によりグループ編成が困難になってきたこと、対象受け持ち患者が少なくなっておりペアーで１例の事例を受け持つことが多くなってきたため、平成24年度から施設を増加して3カ所とした。受け持ち患者の症例は正常褥婦だけでなく、帝王切開術後の褥婦や入院中の妊婦も受け持ち対象者としている。実習施設を3カ所にしたことで１施設の学生数が4～5名となり充実した実習となっている。実習期間中の分娩数は施設によって異なり、施設によって分娩見学ができない学生もいる。今後は分娩件数の少ない施設での学生の実習の工夫が課題である。

３　科目の教育活動

１）　母性看護学概論

２年次前期

林 猪都子、猪俣 理恵、植田 みゆき

母性看護学の基本概念および意義を理解し、人間の性と生殖の側面から、女性の生涯を通じた健康生活の促進と健康問題への援助活動を学び、母性各期における母性看護の役割と重要性について認識を深めることをねらいとして、母性の概念、セクシュアリティ、リプロダクティブヘルス／ライツ、母性看護の歩み、母性の健康と社会、母子保健統計からみた動向、母性看護に関する組織と法律、母性看護の対象の理解、ライフサイクル各期の健康と看護などについて教授した。母性の健康と社会についてはグループワークにて、学習を深め、学んだ学習の中から課題を抽出し発表する機会を与えた。来年に向けては講義資料や内容を修正して講義内容の充実に努めていきたい。

２）　母性看護援助論

２年次後期

林 猪都子、猪俣 理恵、植田 みゆき

妊娠期・分娩期・産褥期の母子の生理的変化とその家族への看護について学ぶことをねらいとした。妊娠期では妊娠の生理・経過、妊婦の健康診査、母体と胎児の管理、妊婦への看護、分娩期では分娩の生理・経過、産婦と家族への看護について教授した。産褥期では妊娠から分娩までの経過が褥婦と新生児に及ぼす影響とその看護について授業を展開した。事前学習、授業毎の小テスト、グループ学習を取り入れたTeam-based Learning方式の学習で、学生が積極的に参加し自ら学習を深めることができるよう工夫した。学生間の学びに差が見られるものの自主的に学ぶ姿勢が見られた。

３）　母性看護学演習

３年次前期

林 猪都子、猪俣 理恵、植田 みゆき

母性看護の実践に必要な看護技術を理解し基本的技術を習得することを科目のねらいとした。講義回数は、看護技術演習7回とウェルネス看護診断に基づいた母性看護過程の展開８回の全15回であった。看護技術演習では、モデル人形を用いた妊婦腹部触診・計測、胎児心拍数陣痛図モニター装着、新生児計測や沐浴など母性看護を行う上で必要な看護技術の演習を実施した。母性看護過程の展開では、正常３事例、異常３事例をグループワークでまとめ、発表し学習内容の共有を図り、さらに、グループワークで担当しなかった事例について個別で看護過程を展開した。学生の取り組みは熱心であったが、基礎的な解剖生理学の知識が身に着いていなかったため、母性領域の事例についてアセスメントすることが難しい学生が多く見られた。

４）　母性看護学実習

３年次後期

林 猪都子、猪俣 理恵、植田 みゆき、石岡 洋子、安部 真紀

母性看護学実習施設は３施設であり、実習期間は１グループ２週間（延べ12週間）であった。学生および教員の配置人数は、堀永産婦人科医院は学生４～５名配置（合計28名）、大分県立病院は学生５名配置（男子学生３名）（合計30名）、アルメイダ病院は学生４名配置（男子学生５名）（合計24名）、担当教員は各施設１名配置した。実習は学生1名につき妊婦または褥婦を1名受け持ち、妊産褥婦、新生児の看護について学び、母性各期の特性とニーズに応じた看護過程の展開を学習した。すべての学生に生命の誕生の場面を通して自己を振り返る実習を期待し、母性各期の保健指導をそれぞれ工夫して取り組むように努力した。本年度は分娩第1期から入室しないと分娩見学できなかったこともあり分娩見学ができなかった学生がいた。また、帰学日は祝日があるときは帰学日を設けず、２週目は木曜日に設け、記録のまとめや技術の見直し、最終カンファレンスの準備を行った。今年度は学習ノートを実習前に作成して個人学習を強化した。

４　卒業研究

1. 産後ケアのニーズと希望する褥婦の背景要因
2. 日本と海外における水中出産の安全性と効果についての文献検討
3. 冷え症が妊娠に及ぼす影響に関する文献研究
4. 夫婦の関係性が父親の育児に及ぼす影響に関する文献検討

３－７－13　助産学研究室

１　教育方針

大学院助産学コースは、助産師が専門職として社会に対して果たすべき役割について理解し、高度な周産期母子医療に対応するためにハイリスク妊産褥婦を含めた助産診断能力及び助産技術やリプロダクティブ・ヘルスを推進するために女性の性と生殖に関わる健康問題に対応できる能力を修得し、他職種との連携や協働、社会資源の活用を図ることができる助産師を育成することを目的としている。特に、高度な周産期母子医療、ハイリスク妊産褥婦への助産診断能力及び助産技術を身につけさせるために、体験型の演習や技術試験を取り入れ実践力を強化している。さらに、大学院修了の専門職業人として旺盛な探究心や豊かな人間性を身につけることを目指している。

２　教育活動の現状と課題

大学院助産学コースは、昼間に助産学専門科目、夜間に共通科目を履修することにしている。1年次の前期・前半は、昼間も夜間も講義・演習があり課題レポートが重なるなど、体力的にモチベーションを維持することが困難な場面もみられたが、個別に教員が対応をするなど工夫している。後期は、実習場での学びを学内で振り返り、対象に応じた助産ケアを教員の指導を受けながら思考することができている。講義・演習・実習が並行していることで、多重課題に混乱する様子がみられたが、課題を一つずつ達成できるように配慮しながら助産過程の思考のプロセスを理解させることができた。次年度からは、後期の実習での多重課題をクリアできるように段階的OSCEを取り入れるなど教授方法を修正する予定である。２年次生は、５月から７月に分娩介助実習とハイリスク妊産婦ケア実習を履修している。今年度の１学生の分娩介助例数は、10例から13例で、平均11.7例であった。夜間・休日の実習や待機などで体調を崩す学生がおり、適宜休養をとりながら実習した。次年度からは、帰学週を設け体調面の管理と介助介助事例の振り返りと院生間でのディスカッションを行い、助産過程の展開が無理なくすすむように計画する。９月以降は、地域で生活する母子の支援や助産所助産師の自律した助産ケアの実際を経験し、修了後の助産師活動をイメージすることができた。課題研究は調査の実施が９月以降となり、データの解析、論文作成の期間が短かったにもかかわらず全員提出し、３月に報告した。７月の国際学会で発表する予定である。今後は、大学院生としての思考力、自己学習力を養い人間関係スキルを向上させるための方略を検討しながらカリキュラム全体を見直していく。

３　卒業研究

1. 生後1か月児の皮膚状態と母親のわが子の皮膚に対する認識との関連
2. 立ち合い分娩と育児参加との関連についての文献研究－海外と比較して－
3. 看護師長による子育て中の臨床看護職者への支援の実態
4. 男性の育児休業取得に対する女性の働きかけの実態
5. 死産のケアを経験した助産師の心理的受容過程

３－７－14　精神看護学研究室

１　教育方針

学部教育では、1)精神科領域での看護だけでなく他のさまざまな場で心に焦点を当てた看護を行うこと、2)看護の対象者の症状や疾病だけでなく、社会参加・自己実現や生きにくさに焦点を宛てた看護を行うこと、3)対象者だけでなく看護者自身の心や治療的人間関係に目を向けること、および4)医療のみならず保健・福祉サービスとの連携を意識することを強調している。講義・演習・実習は、上記の目標に必要な視点、知識、技術、態度を獲得するための、一連の流れとして構成している。また卒業研究に関しては、できるだけ各学生の関心に沿ったテーマで研究を進められるよう配慮している。

２　教育活動の現状と課題

講義では、心の健康と疾患、精神医療・精神看護の歴史と現状、治療的環境と看護の役割、社会と精神看護の関係などについて、具体的な事例や視聴覚教材を紹介しながら学生にイメージを把握させるよう努めている。演習は、紙上事例演習、グループワーク、体験的学習、実習施設や家族会・NPOのスタッフによる活動紹介などで構成し、続く実習への準備性を高めることを狙っている。実習では、学生が自らの不安も含めて自己を振り返ることや、相手について、互いの関係性について振り返ることを奨励・支援している。前年度から、精神科病棟での実習期間を短縮し、代わりに福祉サービス事業所での実習を導入して、地域で生活する精神障がい者について理解を深めること、およびこれとの比較で入院患者の退院後の生活について想像力を働かせることを目標とした。卒業研究に関しては、学生の希望と計画の実現性をすり合わせながら進めることができており、学生の満足度も高いので、従来の方針を続ける予定である。

３　科目の教育活動

１）　精神看護学概論

２年次後期

影山 隆之

精神健康の概念、精神疾患と病態、治療の構造と方法、精神医療・精神看護の歴史と法制を中心に、印刷配布資料と映像教材を多用して講義を行った。出席確認を兼ねた授業中の小レポートに加え、無記名で提出できる感想・質問カードを用いた。学生自身の個人的・家族的問題が匿名で示された場合も含め、疑問・質問に関して次の回に復習・解説を追加したことは効果的であった。

２）　精神看護援助論

３年次前期前半

杉本 圭以子

精神看護学の２つの柱（人々のメンタルヘルスに関わる看護と精神科領域における看護）を再確認したうえで、これらの柱にそった講義を展開した。精神科領域での看護、精神科領域以外での精神看護について映像や実例を多用してイメージしやすいよう配慮した。地域生活における精神障害者への援助についても講義し、病気と折り合いをつけながら生活していくための援助について理解を深めるようにした。

３）　精神看護学演習

３年次前期後半

影山 隆之、後藤 成人、杉本 圭以子

紙上事例について精神看護アセスメントを行い、事例の理解や看護計画について討論する演習を行った。自己理解、対象者理解、関係性の理解を深める方法を学ぶために、「異和感」の対自化、プロセスレコード、自己一致に関する演習を行った。精神障がい者のための福祉サービス事業所でも実習を行うので、関連施設スタッフや家族会メンバーによる特別講義を行った。学生の提出物から判断して、学生の興味・関心・疑問などを高めることができたものと推察される。

４）　精神看護学実習

３年次後期前半

影山 隆之、後藤 成人、杉本 圭以子、佐藤 弥生、桑野 紀子

前年同様、１週間は大分丘の上病院で実習を行い、もう１週間は４つの福祉サービス事業所に学生が分散して実習を行った。病院実習はすべて病棟で行い、学生二人で一人の患者を受け持って、全人的な理解とアセスメントおよび患者に行われている看護の理解に向けて指導を受け、プロセスレコードやカンファレンス等を通じて対人関係における自己の特徴について実際的に学んだ。福祉サービス事業所では利用者に混じって各種のプログラムに参加し、精神障がい者が社会で生活できるための条件、そのために必要な援助、リハビリテーションのニーズを把握するためのアセスメントなどの実際を見て学んだ。実習最終日を帰学日として、二つの場での学びを統合するための最終カンファレンスを行った。異なる場で異なる体験をした学生同士の情報交換は活発であったが、それらを統合して言語化する作業が不十分な学生もいた。事前学習で準備性を高めることや、最終カンファレンスの持ち方とファイナルレポートの課題設定を再調整することを図ったが、なお改善の必要があると考えられる。

４　卒業研究

1. 男性看護師の離職に関連する要因－職業性ストレス・コーピング特性の側面から
2. 看護学生の睡眠についての質問紙調査－実習期間とそれ以外の期間との比較
3. 看護学生の睡眠に関する知識と生活習慣・自覚的な睡眠健康度との関連
4. 看護学生の自殺に対する知識・態度と自殺念慮者への対応－精神看護学の実習経験および講義受講の有無に注目して

３－７－15　保健管理学研究室

１　教育方針

地域社会で生活する人々の健康を支える看護職者に必要な知識と技術を習得するとともに、学生が自律して学習する態度を身につけて欲しいと考え、教育プログラムを組み立ててきた。さらに、新カリキュラムから新新カリキュラムへの移行が完了し、統合領域の科目では、昨年度から３年次の健康支援論、災害看護論が新たな開講となったのに加えて、今年度は、４年次前期に看護管理学概論が新たに開講し、在宅看護論実習が１週間から２週間になる等の変更があった。さらに４年次の第６段階・総合看護学実習では、看護管理の視点をいれた実習目標が組み込まれた。このため、４年間での看護師教育を進めるにあたっては、１年次から４年次までの講義・演習・実習を関連させながら、地域で活動する看護職の役割を教授するよう検討を行った。これまでの講義・演習の組み立てに加えて、地域で生活する人々の多様な健康ニーズにあった看護を提供するためには、地域包括ケアシステムを理解し、組織マネジメントやケアマネジメントといったマネジメント力の強化が重要であり、１年次からの健康論や初期体験実習の意味付けを考え、社会資源の活用や他職種との連携・共同など、広くマネジメント能力を育成する教育を進めることに力を入れた。

２　教育活動の現状と課題

講義においては、今日の社会の変化に応える最新の知識の提供を目指すとともに、多様な健康ニーズと社会の要請に対応できるよう内容の検討を行ってきた。昨年度に引き続き、広域看護学講座として教育内容を見直し、制度や政策を踏まえ、災害看護、在宅看護、看護管理など統合領域のカリキュラム内容を充実させ、学生の学習状況に応じた教授方法を工夫した。さらに、これまで学んだ内容を統合して看護ケアを提供していくことができる能力が養われるよう演習やディスカッションを組み入れた学習方法を工夫した。次年度からは予防的家庭訪問が実施されるため、地域で生活する対象者のイメージができるようになると考えられることから、学生の経験からの学びをいかして、地域の資源を活用したマネジメントができる看護職を育成するための講義・演習・実習の内容を工夫していきたい。

３　科目の教育活動

１）　健康論

１年次前期前半

桜井 礼子、平野 亙、佐藤 弥生、村嶋 幸代

健康の概念と健康に対する考え方の歴史的変遷を理解し、健康の意味を考え、健康の維持・増進の重要性について学ぶことを目的とした。さらに人々の健康ニーズを把握し、健康増進活動における看護職の役割を認識するとともに、生活習慣と健康との関連を意識し、学生が自らの生活体験を通して健康を考え、また生活習慣を見直すきっかけとなるよう、健康日本21（二次）などの取り組みを基盤に、食・運動・休養・喫煙・飲酒等の具体的な項目内容を交えながら講義を行った。また、日本赤十字社の赤十字救急法基礎講習（AEDを含む）を受講、入学前に救急蘇生法を学習した経験をもつ学生も多かったが、改めて講義と演習を通して心肺蘇生法を習得することができていた。

２）　保健福祉システム論

２年次後期

平野 亙

生活者である対象者をケアする看護職にとって、社会資源に関する理解は不可欠であり、さらに社会保障が国民のいのち・健康と生活を守るための制度的保障であることを理解する必要がある。そのため、まず「生存権」について論じたのちに、社会保険、国家扶助および保健・医療・介護・福祉を内容とする社会保障制度の概要とその意義を論じた。授業回数が限定されているため、福祉・介護をはじめ高齢化社会に求められている制度を中心に講義を整理し、できるだけ体系的に理解できるよう構成した。加えて、臨床におけるルールであるインフォームド・コンセント、個人情報保護、障がい論など、患者・障がい者の諸権利を保障するための基本事項について論じ、専門職としての行動に必要な基礎知識を獲得できるようにした。

出席した学生の学習態度は比較的良好であったが、出席率は例年より低く、出席者が固定される傾向にあり、成績が良好でないものが散見された。その一因として講義の欠席だけでなく「一夜漬け」で試験に臨むために理解までに至らない学生が多いことが推測され、学習への動機付けならびに理解を促進するための学習支援について更なる工夫が必要と考えられる。

３）　健康支援論

３年次後期後半

桜井 礼子、平野 亙、佐藤 弥生、小山 珠美、佐藤 玉枝、赤星 琴美、岡元 愛

保健・医療・福祉の場において、看護職の視点から集団の健康問題に対して、保健活動のひとつである健康教育の展開方法とその実践力を養うことを目指した。健康教育が行われる場として、母子保健・学校保健・産業保健・高齢者などライフサイクルに応じた健康支援の場と対象者について、個人・集団・地域を対象として健康教育を考えることができるよう講義を行った。講義にあたっては、地域看護学研究室の教員と分担をして講義を行い、必要に応じて演習も盛り込んだ。また、「食育」をテーマとして外部講師を招き、ワールドカフェ方式でのディスカッションなども実施した。後半には健康教育の演習を実施、地域、学校、産業などの保健活動の場を設定し、事例を用いて、それぞれの対象集団の健康問題を明確にしてどのような健康教育を行うか、グループワークによる作業を行った。発表会は、各事例についてすべてのグループが教育場面のロールプレイを含むプレゼンテーションを行い、ディスカッションを通して考えることができる場とした。学生は、健康教育の対象となる個人および集団の特性を現実的にとらえアセスメントすることや、様々な条件を考慮して教育プログラムを考えるといった点について、グループワークの過程で学習できていた。

４）　医療福祉と人権

４年次後期

平野 亙

看護専門職としてだけでなく社会人として必要な基本的人権に関する知識を習得するとともに、人権感覚を身につける目的で今年度から開講された選択科目である。人権という理解が難しい概念を整理し、憲法をはじめ諸法に規定された事柄だけでなく、その本質的な意義と役割について理解できるよう、「人権　その概念と意義」、「医療福祉における人権課題」、「人格と自由権」、「社会権～生存権と社会保障」、「子どもの人権」、「高齢者の人権」、「障がい者の人権」、「患者の権利」の講義を行った。

４年次後期の選択科目のためであろうか、受講生が１名であったが、問題意識のある学生が受講したことで、ゼミのように議論しながら講義を進められ、理解も深まったと思われる。

５）　初期体験実習

１年次前期

桜井 礼子、平野 亙、安部 真紀、足立 綾、石丸 智子、植田 みゆき、江月 優子、岡元 愛、川野 明子、河野 梢子、桑野 紀子、河野 優子、後藤 成人、小山 珠美、佐藤 弥生、田中 佳子、中釜 英里佳、西部 由里奈、巻野 雄介、水野 優子

初期体験実習は、３日間の施設実習と学内でのグループワーク、発表会の計６日間で構成されている。施設実習を通して、看護職の活動を見学し自ら体験することにより、保健・医療・福祉の場において、看護の実践の場の広がりや看護の役割を理解すること、また対象となる人々の多様な健康ニーズを理解すること目指している。さらに、施設実習後に学内でのグループワーク、発表会を通して、今後の学習の動機付けをすることも目標としている。学生にとって第一段階の初めての臨地実習であり、学生が実習で自らが体験して学ぶプロセスも重要な課題ととらえ、学生へのオリエンテーションを充実させた。実習期間を通して担当教員の指導のもと、施設実習から全体発表会まで充実した実習をすすめることができた。

実習施設：18ヶ所
・事業所：新日鐵住金株式会社大分製鉄所
・保健福祉施設：大分県こころとからだの相談支援センター
・健診機関：大分労働衛生管理センター
・学校：大分県立新生養護学校、大分大学保健管理センター
・病院：大分県立病院、農協共済別府リハビリテーションセンター、湯布院厚生年金病院、別府発達医療センター、大分赤十字病院、国立病院機構 西別府病院、大分市医師会立アルメイダ病院、中村病院、大分三愛メディカルセンター
・介護老人保健施設等：介護老人保健施設　わさだケアセンター、介護老人保健施設 健寿荘、特別養護老人ホーム 百華苑
・地域保健：大分市

４　卒業研究

1. 地域在住高齢者の健康関連体力の経年変化と身体活動との関連
2. 地域在住高齢者の運動器障害と生活習慣・体力との関連
3. 訪問看護師における在宅療養者のがん緩和ケアに関する認識の現状と課題
4. 障がい者福祉施設における虐待防止の取り組みに関する実態調査
5. 病院における患者サポート体制充実加算および医療対話推進者の配置に関する実態調査

３－７－16　地域看護学研究室

１　教育方針

看護を展開する対象として個人・集団・地域へと視点を拡大し、地域全体を包括的に捉えた看護活動を行うために必要となる基本的な思考力を身に付け、支援方法を学ぶことを目的とし、地域看護学概論、家族看護学概論、地域看護学実習を展開している。特に地域看護学概論では、保健所や市町村で働く保健師の講義を取り入れ、地域看護活動の現状や課題について学習が深められるようにしている。担当科目および関連領域科目との講義と実習の連動性を考慮して、内容や展開方法に工夫を凝らしている。

２　教育活動の現状と課題

地域看護学概論の講義では、実践活動との連動性を重視し、保健所や市町村で働く保健師および多職種の連携の必要性が理解できるよう教授している。さらに、実習の場において個人・家族、集団、地域を対象とした具体的な看護展開ができるように、学内演習では実習場面を意識した事例を用いて、ロールプレイ等を行っている。地域の健康問題を踏まえた活動内容が理解できるよう、実際に学生が実習を行う市町村の既存の資料を基に、地域看護診断を行っている。また、個人・家族を対象とした支援では、新生児の事例を基に、保健師が行う家庭訪問における看護過程の技術を展開することで、地域での看護活動の視点や具体的な支援技術について理解できるよう工夫している。今後も社会の変化に対応し得る看護支援を目指して、常に教育内容を繰り返し検討していく必要がある。

３　科目の教育活動

１）　地域看護学概論

２年次後期

佐藤 玉枝、村嶋 幸代、赤星 琴美、藤内 修二

地域における個人・家族、集団への看護活動を行うために、地域住民の主体性を重視し地域看護学の基本的な内容について講義をした。今年度より看護師養成のカリキュラムとなり、公衆衛生の概要や地域看護学の概念、プライマリ・ヘルスケアとヘルスプロモーション、地域看護活動の場と特性、地域看護活動の対象と方法（個人・家族、集団、地域社会）など地域看護の必要性を理解するために時間を十分にかけた。また、地域看護の変遷や大分県の地域看護活動についても教授することができた。常に資料やパワーポイント、DVDなどを活用することで学生が地域で活動する看護職をイメージでき、かつ、地域看護についての理解が深められるよう教授した。

２）　家族看護学概論

２年次後期前半

赤星 琴美、佐藤 玉枝、岡元 愛

家族が主体的にセルフケア能力を高め、健康的なライフスタイルを獲得していくために必要とされる家族看護の基本的な考え方と支援方法について講義と演習を行った。内容は、家族看護学の概念、家族の機能、家族を理解するための諸理論、看護職の役割、家族看護過程、家族看護過程の演習である。特に家族看護過程の演習では、家族を一つのユニットとして捉えて支援するカルガリー看護アセスメントを取り上げ、その意義や方法が理解できるようにグループワークを行い、より具体的に看護過程の展開が学習できるよう工夫した。

３）　地域看護学実習

４年次前期前半

佐藤 玉枝、赤星 琴美、岡元 愛、キット 彩乃、桜井 礼子、平野 亙、佐藤 弥生、小山　珠美、桑野 紀子

大分県下全域の保健所(保健部支所含む)９か所、市町村保健センター及び支所16か所、支所配置６か所合計31か所の施設に、それぞれ２～４名の学生を配置し２週間の実習を行った。実習指導体制は、それぞれの施設の保健師が実習の現場で直接指導を行い、担当教員は各施設を巡回することで学生と実習指導者双方の状況把握を行いながら、中間カンファレンスや終了カンファレンスでの指導、記録物の指導などを行った。実習では、地域で生活する人々を理解すること、多職種との連携の必要性について学んだ。実習終了後、まとめ会を開催し、実習成果を学生間で共有した。

４　卒業研究

1. 看護学生の保健師に対する理解に関する調査-接した経験・講義・実習との関連-
2. 離島の病院で勤務する看護師の自己学習環境の実態
3. 保健室に対する生徒が持つ印象と来室理由との関連
4. 離島在住高齢者の健康的な生活を支える社会的要素

３－７－17　国際看護学研究室

１　教育方針

International nursing courses aim at the development of an understanding of global cooperation and networking of health and of nursing, and the development of an understanding of global health issues and strategies; and the realization of roles and responsibilities of nursing profession in the global era in the diverse socio-economic, cultural, and eco-geological context. The age of transculturalism and the trend of globalization of Nursing are essential today. Globalization necessitates a comparative perspective with the maintenance of holistic care and the prevention of illnesses.

Transcultural Nursing as well as International Nursing has also emphasized a comparative and holistic perspective. Nurses must move beyond an international focus of studying the relationships between two cultures to that of considering several cultures from a transcultural comparative focus. This means expanding one's views and using critical analysis by contrasting insights and knowledge from several country cultures.

Three mandatory courses for baccalaureate students, one for sophomore class and two for junior students are planned and carried out.

２　教育活動の現状と課題

Language used for the classroom activities: Texts, Presentations, questions and answers are carried out in English.English proficiency of the students are to be promoted.

Autonomy of the study; Detailed seminar orientation such as on the themes of self-study, references, methods of presentation, and a focus of group-study were planned and presented by the faculty at the beginning of the Quarter. Grouping of students for self-study and choice of the themes are assigned to the students for the student's autonomy by the class-leader.

Activities and autonomous participation by the students are to be promoted. Evaluation of the courses by the students; Students were provided with the opportunities to evaluate the course. Evaluation for the level of achievement of the aims and objectives of the course, contents of the course, time allotment and teaching methodology etc. were planned by the faculty and carried out by the students.

１）　国際看護学概論

２年次後期後半

Myoung-Ae Choe, N. Kuwano

Objectives and contents;

1. To develop an understanding of the concept of, and to define international health and international nursing.
2. To describe the background, course and trends of international cooperation and globalization of health care.
3. To understand the context, scope, principles and approaches of international nursing.
4. To develop an understanding of the perspectives of international health issues and strategies.
5. To develop an understanding of the international health and nursing networks.

Contents;

1. Orientation and introduction to the nature of international nursing -definition, characteristics, aims-
2. Introduction to the nature of international nursing - relations with some factors: preparation, history-
3. Main nursing concepts and trends of international nursing and health - Globalization nursing, transcultural nursing, international cooperation-
4. Trends of international nursing and health, -Global health care problems, history, models for services-
5. Risks to health and life in the world - Introduction, risks factors, mortality causes, communicable disease -
6. Risks to health and life in the world - Non-communicable disease -
7. International networking of health; WHO
8. Wrap-up, evaluation of the course

２） 国際看護比較論

３年次後期後半

Myoung-Ae Choe, N. Kuwano

Objectives:

1. To develop an understanding of the context, scope and approaches of international nursing and international health.
2. To develop a global perspective of issues and strategies on health and of nursing.
3. To develop an understanding of the need for human resources development for global health and nursing.
4. To develop an understanding of the role of the international health, nursing and relief networks and the impact of international aids during war and disaster.

Contents;

1. Orientation, Brief summary of international nursing, Global health issues
2. Culture and transcultural nursing
3. Human resources for global healthcare: development and planning
4. International Relief Organization: Red Cross
5. Grobal strategies of health for all
6. Foreign patients in Japan, Reproductive health & rights
7. International relief organization; JICA
8. Actual situation of international nursing activity, Direction and issues for international nursing

３） 国際看護学演習

３年次後期後半

Myoung-Ae Choe, N. Kuwano

Objectives of the Course:

1. To develop an understanding of the concept, scope and approaches of international nursing/health in the diverse eco-geological, socio-economic, cultural and political context.
2. To develop understanding of the system of and the need for planning and development of the human resources for global nursing and health.
3. To develop an understanding of the role of the international nursing, health and relief networking.

Activities:

Orientation to the course activities includes;

Aims and objectives of the course, grouping, designation of role of each member, themes of the group study and presentations, time allotment and place allocation, references, soft and hard computer aids and equipments for the study and presentation.

Group-works / studies:

Carried out by students; grouped into 4Gr.-5Gr., according to prior planned schedule.

Themes for the group-works / studies and presentations;

I. Health issues and strategies; of a Nation/population group
II. Millennium Development Goals
III. Health issues and strategies; of a nation
IV. Foreign Country’s Impact and context of aids by JICA

４　卒業研究

1. 日本人女性とインドネシア人女性の月経の捉え方と月経随伴症状への対処行動の比較
   Comparison of perception on menstruation and coping strategies with the menstrual symptoms between Japanese and Indonesian women
2. 災害特性の異なる国で生活する看護学生の災害看護に関する学習意欲の相違
   ―日本と韓国を比較して―
   Comparison of motivation for disaster nursing between Japanese and Korean nursing students
3. 海外医療現場派遣を経験した日本人看護職者の異文化適応に関する体験
   Adaptation-related experience of dispatched Japanese nurses to the medical field of foreign countries

３－７－18　共通科目

１）　自然科学の基礎

１年次前期

甲斐 倫明、小嶋 光明、岩崎 香子、定金 香里、品川 佳満、石川 純也、吉田 成一、野津 昭文、佐伯 圭一郎

自然科学の基礎として習得しておくべき基本的事項を学ぶ。高校までに十分に習得できなかった項目を学ぶための講義であると同時に、自然科学の考え方について理解するための講義となっている。講義内容は次の通りである。
1) 入学後試験（物理、化学、生物、数学）、2)科学的自然観とは、3)生物：細胞とは、4)生物：細胞分裂の仕組み、5)生物：DNA複製の仕組み、6)生物：遺伝子・遺伝の仕組み1、7)生物：遺伝の仕組み2、8)生物：タンパク質合成の仕組み、9)生物：免疫～遺伝子と生体防御システム、10)生物：分子発生生物学、11)生物：生物化学（エネルギー、酵素、代謝）、12)生物：生物化学（化学エネルギーを獲得する経路）、13)物理：電気と磁気、14)物理：力とエネルギー、15)物理：熱と圧力、16)温度と相変化、17)化学：物質の構造、18)化学：物質の反応（酸化と還元、酸とアルカリ）、19)化学：モルと濃度計算、20)化学：有機化合物の構造、21)化学：人間生活と物質、22)数学：数学の基礎１（基本概念）、23)数学：数学の基礎２（指数と対数）、24)数学：数学の基礎３（微分と積分）、25)数学：数学の基礎４（確率）

２）　健康科学実験

２年次後期

中林 博道、岩崎 香子、安部 眞佐子、市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里、甲斐 倫明、小嶋 光明、石川 純也、稲垣 敦、松本 佳那子(外部講師)

本健康科学実験は２年次生に実施しており、基本的な実験演習や測定を通じて、人の身体、健康に関係した事項や人間をとりまく自然環境に関する基本的な現象を体得し理解を深めることを目的としている。実験テーマは11テーマからなる実験を行った。1）解剖実習（担当者：中林 博道、岩崎 香子、安部 眞佐子）、２）組織学実習（担当者：中林 博道、岩崎 香子、安部 眞佐子）、３）血液検査（担当者: 定金 香里）、４）基礎微生物学実習（担当者：吉田 成一）、５）ラットの解剖（担当者：市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里）、６）測定誤差と変動（担当：甲斐 倫明）、７）放射線（担当：小嶋 光明）、８）染色体異常（担当者：石川 純也）、９）呼吸循環器系持久力（当者：稲垣 敦）、10）心電図（担当：松本 佳那子、岩崎 香子）、11）食物栄養学実習（担当：安部 眞佐子）

３）　総合人間学

４年次後期前半

教育研究委員会委員

さまざまな分野で活躍され、かつ造詣の深い講師の物の見方や考え方を通して。人間として、医療者として備えておくべき豊かな知識と感性をやしなうことをねらいとしている。なお本科目は公開講義とし、県内に広く情報を提供して参加を促している。本年度の開講日、テーマ、講師を以下に示す。

第１回９月12日：癒しと生きる意味　―人を活かす医療と看護が世界を変える―：上田 紀行
第２回９月19日：お肌の健康と笑顔：中澤 友里
第３回９月26日：君は人生の運転免許を持っていますか：広瀬 舜一
第４回10月３日：近代都市計画の起源：佐藤 誠治
第５回10月10日：活き活き暮らせるまちに向かって
―東京大学大槌イノベーション協創事業―：太田 与洋
第６回10月17日：あたりまえに生きて：宮西君代
第７回10月24日：感染看護を通して看護実践の質を上げる方策：チョン・ジェ・シム
第８回10月31日：結婚するならイクメン
―幸せな結婚・子育て・仕事のヒント―：安藤 哲也

３－７－19　統合科目

１）　看護管理学概論

４年次前期

桜井 礼子、伊東 朋子

今年度から、開講時期が４年次前期となり、時間数も時間数も増加した。講義のねらいは、これまでと同様に、看護管理の概念を理解し、看護を提供するための「しくみ」について学び、看護職として看護実践のマネジメントについて考えることとした。また、看護の対象となる人々に有効で良質な看護を提供するための方策である看護管理システムの諸相を学び、管理の概念と看護管理の変遷を振り返りながら、看護領域独自の看護管理のあり方を学び、組織の一員としての関わり方を理解することを目標とした。さらに、今年度からは総合看護学実習に看護管理の視点を組み込んだ目標が設定され、各自、夜勤実習や看護管理者について実習するといった計画をたて、実習後に看護管理の視点からどのようなことを学んだかをレポート課題とした。このことにより、看護を実践するにあたって必要なマネジメントについて考える機会となったと考える。

２）　看護の倫理

２年次後期

平野 亙、小野 美喜

看護職に必要な生命倫理学の知識を習得するとともに、倫理的規範に基づく判断のための思考訓練を行うことを目的に講義を行った。講義は、「Bioethics：生命倫理の展開と課題」・「Profession の責任と倫理」・「倫理的判断の方法」・「生殖と誕生にかかわる倫理」・「生と死のかたちに関わる倫理」・「医療従事者の事故対応と責任」・「人間の尊厳、個人の尊重と自立支援」の７回を平野、「看護職の価値観と文化、社会規範」を小野が担当した。

講義の中で、「ケースブック医療倫理」（医学書院）をテキストに事例演習を行った。また講義時間中にミニレポートを課して講義内容の整理と出席管理を行い、ミニレポートの提出と個人課題レポートにより成績評価を行った。

課題としては、学生に予習の習慣がなく、また講義回数の制約もあって少人数での討論が形成できないために、事例演習が双方向的な討論の場になりにくく、教員の注釈に終始する傾向のあることがあげられる。

３）　看護と遺伝

３年次　後期後半

市瀬 孝道、定金 香里、岩崎 香子、松田 貴雄、濱口 和之、川野 由紀枝

講義前半では、中学・高校レベルの基礎的な遺伝の仕組みについて学習することに重点を置いた。メンデル遺伝および遺伝疾患発現、遺伝子変異が関与する疾患や体質との関連について講義し、看護師として知るべき単一遺伝子疾患の遺伝メカニズムを理解できるよう配慮した。講義後半では臨床遺伝学についての講義を行った。メンデル遺伝病について家系図を踏まえて次世代への遺伝を考えた。さらに出生前診断や遺伝子カウンセリングの実際を例を挙げながら概説し、遺伝学の基本が実際の臨床の場でどのように生かされているかを述べた。

４）　災害看護論

３年次前期後半、後期後半

桜井 礼子、石田 佳代子、佐藤 弥生、小山 珠美

昨年度から１単位の科目となり、演習を取り入れた授業とし、学生により実践的に理解を深めるようカリキュラムを構成した。災害に対する理解を深めるために、これまでの自然災害・人為災害等の実態から、学生が災害をイメージし、災害が人々の健康と生活に及ぼす影響について学生自身が考えられるように支援した。また、災害の実態から、①災害発生時の対応（急性期～慢性期・静穏期）に至るまでの災害看護のあり方と連携について、②災害予防・減災のための備えや法制度、地域での取り組みの重要性について教授した。さらに、学外講師を招き、災害発生時の実践的活動として、トリアージ（START法）および災害発生後の患者受け入れ病院の初期対応の演習を実施、災害に関わる専門職および看護職の実際を活動の理解につながったと考える。

５）　第２段階看護技術演習

３年次前期後半

小野 美喜、赤星 琴美、石岡 洋子、石田 佳代子、植田 みゆき、足立 綾、桑野 紀子、後藤 成人、佐藤 弥生、秦 さと子、中釜 英里佳

第４段階看護学実習前の基礎看護技術チェックとして3年次生79名に実施した。実施日程は、練習期間を７～８月とし、チェック日を９月１日（月）～３日（水）、４日(木)を予備日として企画・実施した。「血糖測定、皮下注射事例」「上気道吸引・吸入、ガウンテクニック、呼吸音聴取事例」「無菌操作」「膀胱留置カテーテル挿入事例」「浣腸、陰部洗浄事例」「点滴管理、全身清拭事例」「沐浴事例」の７事例を行い、教員の指導過程を経て全員が合格した。

６）　第３段階看護技術演習

３年次前期後半

小野 美喜、赤星 琴美、石岡 洋子、石田 佳代子、植田 みゆき、足立 綾、桑野 紀子、後藤 成人、佐藤 弥生、秦 さと子、中釜 英里佳

４年生を対象に看護技術習得確認シート卒業時到達目標AAの看護援助技術45項目の技術力強化を目的に、Eラーニングシステム「ナーシングスキル」Web上の課題に対する個人ワーク、および課題技術に対するグループワークを実施した。履修生82名が期限までにWeb課題を終了し、グループワークでの課題を展開することができた。

７）　スキルアップ演習

４年次後期前半

藤内 美保、石田 佳代子、赤星 琴美、佐藤 弥生、秦 さと子

４年次生後期に看護基礎教育の総仕上げとして、人間科学講座の専門基礎科目と看護の専門科目で学んだ知識・理論を有機的に統合し、適切なアセスメント能力および看護技術を提供できる能力を養うことをねらいとしている。医療・保健現場において遭遇しやすい事例（成人老年、小児、母性、精神、在宅）を通して、多角的な見方や論理的な考え方を深め、適切にアセスメントする能力を身につけること、検討した事例について、根拠に基づき、対象者のニーズや状況にあわせて判断し、安全・安楽な看護技術を提供できることを目標とした。グループワークおよびロールプレイを行い、さらに、発表後のディスカッションを通じて、自らのグループを含む全てのグループの発表を適切に評価し、学習を深めた。今年度の新しい試みとして、ロールプレイの発表会で、本学の卒業生、修了生にアドバイザーとなって参加してもらった。大分県立病院、大分赤十字病院、大分医師会立アルメイダ病院、厚生連鶴見病院、敬和会東部病院の卒業生8名が参加し、臨床現場にいる看護職として適切なコメントがあり、４年生の満足度も高かった。

８）　第４段階看護技術演習

４年次後期後半

小野 美喜、赤星 琴美、石岡 洋子、石田 佳代子、植田 みゆき、足立 綾、桑野 紀子、後藤 成人、佐藤 弥生、秦 さと子、中釜 英里佳、甲斐 博美

卒業前の学生に対して、基本的な看護技術を確実に修得させ、自信を持たせることにより、臨床における看護技術実践への橋渡しの機会とすることを目的に行った。対象学生は希望者とした。大分県赤十字病院の指導者によるデモンストレーションや指導を新たに加え、「蘇生法」、「静脈血採血」、「点滴静脈内注射」、「筋肉内注射」の技術の中から学生が希望項目を選択し、技術練習を行った。技術力を強化する機会となった。

９）　第一段階看護技術演習

２年次後期

小野 美喜、秦 さと子、桑野 紀子、赤星 琴美、石岡 洋子、石田 佳代子、植田 みゆき、足立 綾、後藤 成人、佐藤 弥生、中釜 英里佳、甲斐 博美

第一段階看護技術演習の目的は、対象への日常生活援助を一人で実施できる能力を身につけることで、具体的には以下の３点を習得することであり、第３段階実習前の２年次生を対象とした。チェック内容は、「血圧測定およびアセスメント」」と生活援助に焦点をあてた７事例「歩行・更衣」、「フィジカル・ストレッチャー」、「膀胱留置カテ指導時の排便介助・陰洗」、「おむつ交換・体位変換」、「車いす移乗・足浴」、「持続点滴中のシーツ・寝衣交換、口腔ケア」、「洗髪」を実施した。履修者全員が合格した。

10）　在宅看護論

３年次前期前半、後期後半

桜井 礼子、平野 亙、佐藤 弥生、小山 珠美

疾病や障害をもちながら地域で生活する人々とその家族に対して、在宅看護を行うために必要とされる基本的な考え方や援助方法を理解することをねらいとした。またケアマネジメントの視点を持ち、社会資源を活用し、多職種や多機関との連携・調整をはかり、継続した看護が提供できるマネジメント力を養えるよう演習を行った。新新カリキュラムとなり、３年次前期に講義が早まったことから、２年次の看護アセスメント学実習と在宅看護実習Ⅰ（介護老人施設）での体験をもとに、できるだけ在宅でのイメージを持つことができるよう事例などを提示しつつ教授した。また、４段階実習終了後の後期後半では、外部講師を招き、「在宅酸素療法」、「認知症者の看護」について講義を設けた。

11）　在宅看護論実習

４年次前期

桜井 礼子、佐藤 玉枝、赤星 琴美、佐藤 弥生、キット 彩乃、岡元 愛、河野 梢子、桑野 紀子、小山 珠美、田中 佳子、石丸 智子

在宅看護論実習は、訪問看護ステーションでの実習を通して、在宅で療養する人々とその家族を対象に、継続した看護が提供されるよう、社会資源を活用したケアマネジメントを通して、訪問看護の必要性と援助方法の実際、様々な機関や他職種との連携・協働について理解することを目的とした。今年度より実習期間が２週間となったことから、１事例を受け持ち、アセスメントと看護計画の立案から看護計画に基づいた実践と評価までを行う看護過程の展開に力を入れるとともに、ケアマネジメントとして、さまざまな職種との連携や、関連する施設や事業者等との連携の場を体験することを目標に追加した。

学生は、訪問看護師に同行し様々な対象への訪問看護を体験することができていた。また、実習期間が２週間になったことで、受持ちの訪問回数も増え、情報収集しアセスメントに基づいた看護過程の展開ができていた。また、対象者本人と家族に対する個別的な看護の重要性について学ぶことができていた。さらに、さまざまな在宅の場の体験を通して、在宅看護における訪問看護師の役割や他の職種や機関との連携を学ぶことができていた。

実習施設：県内訪問看護ステーション19施設
大分市５施設、別府市２施設、由布市２施設、日出町１施設、杵築市１施設
日田市１施設、中津市１施設、国東市１施設、豊後高田市１施設、豊後大野市２施設
臼杵市１施設、佐伯市１施設

12）　総合看護学実習

４年次前期

看護系教員全員

総合看護学実習は、看護学実習の最終段階にあたり、各学生がこれまでの学習の達成度を評価し、これを強化、発展させ、看護職として働く環境を理解し、将来の活動につなげることをねらいとしている。総合看護学実習は、これまでの実習と異なり、実習計画から実施・評価まで学生自身が自分の手で創り上げていく実習であり、このために、１月末に学生へのオリエンテーションを実施し、２月に自身が希望する実習施設を選択し調整の上実習施設が決定され、２月末から適宜担当教員の指導を受け実習に向けた準備が行われた。看護マネジメントや夜間実習などを新たな実習内容に加え、実習はテーマごとに小グループでの発表と質疑を行った。発表時の活発討議を次課題とする。

13）　看護科学研究

３年次後期後半

佐伯 圭一郎、村嶋 幸代、影山 隆之、定金 香里、安部 眞佐子、猪俣 理恵、岩崎 香子、関根 剛、野津 昭文、品川 佳満

卒業研究および将来の臨床における看護研究に必要とされる基本的な考え方、知識、技術を修得することを目標とし、研究テーマの設定から文献収集、研究計画書の作成といった過程のすすめ方，研究デザインの決定やデータ解析技法の知識と実践といった一連の内容を教授した。講義内容と担当は次の通りである。
1)看護研究の意義（村嶋），２．研究の倫理と安全（影山），3)実験研究（定金），4)調査研究（安部），5)質的研究（猪俣），6)文献検索と読み取り（佐伯），7)論文の書き方，発表の仕方（岩崎），8)文献研究（関根），9)統計学の考え方（野津），10)データ解析の方法（野津・品川），11)研究計画の作成（野津），12)文献検索＆抄読演習1（佐伯），13)文献検索＆抄読演習2（佐伯），14)データ解析演習1（野津・品川），15)データ解析演習2（野津・品川）

14）　看護研究・卒業研究

４年次通年

教員全員

平成26年度は82名の学生が卒論研究に取り組んだ。学生は17研究室に配属され、それぞれ配属された研究室において教員の指示のもと、卒論研究テーマを決定して、研究を実施した。12月４日に論文要旨を提出し、12月９日に卒業論文を提出した。12月11日と12日に卒業研究発表会を実施し、それぞれの卒論生が自分の行った卒業研究を発表した。

３－８　大学院における教育活動

３－８－１　博士（前期）課程

１）　生体科学特論

１年次前期前半

中林 博道、安部 眞佐子、岩崎 香子

大学院のNPならびの管理コースの学生に対して、生体（人体）の構造（解剖学）や仕組み、働き（生理学、生化学）、さらに組織学に関する講義を行った。

２）　病理学特論

１年次前期後半

市瀬 孝道

疾病の基本的事項を理解するために退行性病変、進行性病変、代謝障害、生体防御システムに関わる炎症、免疫やアレルギー、腫瘍、更に系統別の個々の疾患についてプリントとパワーポインを用いて詳しく講義した。また、４症例について、病理解剖時の所見とともに死に至る迄の経過や病気の病態像をパワーポイントで説明し、病気の理解を深めた。

３）　病態生理学特論

１年次前期

崔 明愛、巻野 雄介

This course was designed to provide the student with knowledge on alterations in human physiological functions that result from disease processes. Knowledge gained in this course will prepare the student for subsequent clinical nursing courses or clinical practice. Understanding these fundamentals enables the student to apply that knowledge to other disorders that will be encountered in clinical practice or in subsequent courses in specialized areas of pathophysiology.

In this course, students presented some diseases based on their study of pathophysiology. All students also conducted case study and presented about the case study. In the presentation, we had discussion with the attendance. Through this process, students might deepen their knowledge of pathophysiology.

４）　健康増進科学特論

１年次前期

稲垣 敦、安部 眞佐子

運動に関しては、臨地で運動メニューの作成や運動指導ができるようにするため、加齢と体力、エネルギー代謝、運動強度、身体活動量、呼吸循環器系持久力、筋力トレーニング、ストレッチ、運動処方、運動療法等について講義し、測定実習等を行った。

栄養に関しては、熱量素、ビタミン、ミネラル、現代の食生活の動向について講義した。

５）　人間関係学特論

１・２年次後期

関根 剛、吉村 匠平

シラバスの構成を中心としながら、参加学生の関心を取り入れて、関連する書籍等の紹介、解説を行いながら、相互の討議を促しながら、検討を深めさせた。夜間開講のみであった。

６）　健康社会科学特論

１・２年次後期

平野 亙

人間の健康に関する考察・研究においては、個々の人間行動の分析・探求と並んで、社会政策など社会システムに対する分析、人間行動に対する社会学等の社会的アプローチが重要である。これら社会科学的な思考と方法論の基礎を習得することを目的として、講義と課題演習を行った。講義は、「社会システム論１　法と行政」、「社会システム論２　社会保障と生存権」、「障がい論、自立と差別の考察」、「社会学の方法」、「医療人類学の方法」、「医療経済学の方法」の各講で、課題演習は、１）日本における医療・保健・介護の政策に関するレポート作成と解題、２）医療・保健領域における社会科学の方法論による文献の抄読を行った。

７）　保健情報学特論

１・２年次前期

佐伯 圭一郎、品川 佳満、野津 昭文

保健医療分野において必要とされる情報入手・情報処理・情報管理の基盤となる理論と技術について、演習も交えながら教授した。各回の内容は以下の通り。

1～2.情報管理・処理のためのコンピュータ技術
3～4.医療・保健分野でのデータ処理
5.情報システムの構築と管理
6～7.統計データとは，データの要約
8～9.確率，確率分布
10.推測統計総論
11.推定
12.検定
13.統計ソフトウェア演習１
14.検定各論
15.統計ソフトウェア演習２

８）　看護科学研究特論・健康科学研究特論

１・２年次前期

小嶋 光明、村嶋 幸代、甲斐 倫明、藤内 美保、福田 広美、平野 亙、吉村 匠平、関根 剛

EBNの基礎をなす看護科学研究と健康科学研究の理論および手法を概観し、研究活動を自ら展開するために必要な事項を論じた。さらに、実際の研究例の輪読と検討により、研究活動に関する実践的能力の育成をおこなった。

1.	看護研究の意義	村嶋
2.	研究テーマ・デザイン	村嶋
3.	研究の倫理と安全	平野
＜研究方法＞		
4.	調査研究	吉村
5.	観察研究	甲斐
6.	介入研究	小嶋
7.	既存のデータ分析	関根
8.	質的研究	藤内
9.	文献検索の方法	小嶋
＜原書講読＞		
10.	調査研究	吉村
11.	調査研究２	福田
12.	観察研究	甲斐
13.	介入研究	小嶋
14.	文献研究	関根
15.	質的研究	藤内

９）　看護管理学特論

１・２年次後期

桜井 礼子、福田 広美、甲斐 仁美

保健・医療・福祉に関する制度と組織、看護管理の基本となる組織論、人材育成、マネジメントに関する理論とその展開について教授し、管理プロセスに対する理解を深めるとともに、質の高い看護サービス提供のために看護組織が備えるべき機能や看護管理者に必要とされる能力について学生自身が考える機会となることを目指した。学生には、いくつかの課題を提示して、文献や自らの経験を踏まえたプレゼンテーションとディスカッションは実施した。学外講師からは、現任のトップマネジメントの立場から、看護職の業務管理のあり方、病院経営と看護管理について教授いただいた。

10）　看護理論特論

１年次後期

李 笑雨、藤内 美保、高野 政子、猪俣 理恵、秦 さと子、桑野 紀子、伊東 朋子

This course is an introduction to the nature of scientific explanation and inquiry of theoretical conceptualizations in nursing. Origins of and strategies for theory development in nursing were examined. Analysis of the role of theory in nursing practice and research were explored.

Class time was provided for critics for the proposals of the nursing meta-paradigm in nursing theories. Class time was also provided for groups to meet to discuss the proposals for the nursing meta- paradigm study. And addition to that, Class time was provided for groups to meet to discuss comparative theory evaluation.

The issues for discussion were those concerning how one chooses among theories.

11）　看護教育特論

１年次後期後半

高野 政子、梅野 貴恵、石田 佳代子、宮崎 文子

看護を担う人材の育成が、質の高い看護教育に基礎をなすという観点から、教育的機能を理解することを目的として教授した。1)看護教育の歴史的変遷と法的基盤、2)看護教育制度、3)看護教育カリキュラム、評価など基本的な基盤とした。その後、各教授陣の領域を題材に、4)看護教育方法論を展開した。また、自己学習（教育）力や生涯教育能力の開発、継続教育を教授した。最後は「それぞれの立場で看護教育を考える」という課題を提出、受講生８名がそれぞれ発表し、教員と受講生で質疑応答し討論した。

12）　看護コンサルテーション論

１・２年次前期後半

佐藤 玉枝、吉村 匠平、関根 剛、小野 美喜

看護コンサルテーションについての正しい理解を得るために、原著を用いて演習形式で概念とプロセスを確認した。その後、各論として対象者理解のための心理的アセスメント、効果的な心理教育と心理的援助の具体的方法について学んだ。最後にこれらを統括し、看護コンサルテーションの実際を演習形式で体験し、コンサルタントとコンサルティーの関係性についての理解を深めるとともに、各自の課題についてディスカッションを行った。

13） 看護倫理学特論

１・２年次前期

平野 亙、小野 美喜、関根 剛

倫理的思考は、すべての看護職に不可欠であることから、各受講者が専攻する領域での臨床に活かせることを基本とし、必要な生命倫理学の知識を習得するとともに、倫理的行動規範に基づく思考訓練を行うことを目的とした。11回の講義と３回の事例演習を行い、さらに最終回には受講生の事例報告による評価を行った。講義は、「Profession の責任と倫理」、「Bioethics：生命倫理の展開と課題」、「臨床倫理：倫理的判断の方法」、「人間の尊厳と自己決定権」、「個人の尊重とプライバシー権」、「ケアとしての苦情解決」を平野、「看護職の責任と倫理規程」、「看護職の価値観と倫理」、「看護場面の倫理的ジレンマとその解決ステップ」を小野、「倫理的行動とコミュニケーション」、「問題解決のためのコミュニケーション・スキル」を関根が担当した。事例演習は、３名の教員各々が講義と関連付けて行い、受講生による事例報告は３名の教員すべてが出席してコメントし、評価を行った。

14） 看護政策論

１年次後期前半

村嶋 幸代、小池 智子、立森 久照、小山 秀夫、佐藤 玉枝、影山 隆之

保健・医療・福祉を取り巻く制度や政策の決定プロセス、決定された政策が看護の現場にどのように影響を及ぼすか、政策の評価方法などを考えるために、オムニバス形式で講義を行った。国政レベルでの保健医療政策、看護における労働問題、大分県における看護政策、医療経済と保険、保険診療制度に仕組みに関するなど、今日における看護政策課題などの講義から学生自らが看護政策を立案するための視点を教授した。

15） 英語論文作成概論

１年次前期前半

甲斐 倫明、影山 隆之

修士論文で英文アブストラクトを書くための基礎的事項を教授した。講義内容は次の通りである。1)英語科学論文の特徴、2)論文を科学的に構成する5つのステップ、3)日本人が間違いやすい英語表現、4)調査研究データ特有の英語表現の事例とアブストラクトの書き方、5)実験研究データ特有の英語表現の事例とアブストラクトの書き方

16） Intensive English Study

１年次前期

Gerald T. Shirley

Competence in English is important for graduate students. This course aimed at improving the basic English language ability of students through intensive practice in reading, listening and grammar. It was an eight-week course in which students practiced reading, listening and grammar problems to help them improve their basic language abilities in these important areas. The course used a Computer Assisted Language Learning (CALL) system. The CALL course is designed so that students can access and practice CALL at any time on their computers at home and in the Graduate Student Room. There were no classroom sessions in this course. Students practiced the CALL course problems during their own time. Their progress was monitored and evaluated by the instructor during the eight-week course. Individual assistance and instruction was available to each student through consultation with the instructor. The course consisted of an orientation session in the CALL classroom in which the CALL course was introduced and class guidelines were discussed. The TOEIC-IP test was administered before and after the CALL course, and it was mandatory that students take both tests.

17)　原書講読演習

１年次前期

宮内 信治

共通教材として、原著論文「Nurse Practitioners and Physicians: Patients' Peerceived Health and Satisfaction with Care」を教材として英文解釈の基礎に取り組んだ。発音記号の復習、語源学の知見を基にした医療看護英単語の増強・習得、英文法の基礎の確認と演習を取り入れ、原著論文の読解へとつなげた。

18)　看護アセスメント学特論

１年次後期

藤内 美保、高野 政子、伊東 朋子、石田 佳代子

クライエントに対するマネージメントを遂行するために、看護職が問題解決過程を展開し、信頼性のある方法論に従い、身体的、包括的な機能評価のための情報収集の基礎理論と技法について教授した。１つは看護過程を展開する場合の看護理論による違いにより、看護診断に違いがあるか、診断過程の違いがあるかなど検討し、ディスカッションした。２つは小児のフィジカルアセスメント、看護過程の展開を行い、レポートさせた。３つ目は在宅看護における神経難病の患者理解と看護判断についての演習をした。いずれも、基礎理論を踏まえた看護判断に関する具体的適用方法の課題学習を行い、レポートおよび出席状況により評価した。

19)　精神保健学特論

３年次前期

影山 隆之

地域保健・職域保健・学校保健活動としての精神保健活動を軸に、精神健康のモデルと評価法、精神保健のシステムと活動、精神保健の法制と政策等について、講義形式で開講した。

20)　基盤看護学演習

１年次前後期

伊東 朋子、影山 隆之、藤内 美保、品川 佳満

基盤看護学演習における研究の手法について、さまざまな視点からその手技方策を具体的に解説した。４名の担当教員が専門とする内容をチュートリアル形式の演習によって展開した。「看護の安全と看護管理」、「精神健康測定法と睡眠測定法」、「看護師の臨床判断と形成過程」、「看護研究と自律神経機能評価指標」の4つを実験や提出されたレポートをもとに討議した。信頼性のある方法論を用いることの意義と看護実践におけるエビデンスを検証する場合に必要とされる研究手法について教授した。

21)　小児看護学特論

１年次前期前半

高野 政子、草野 淳子

本講座では、小児医療の沿革と課題、小児看護の役割と変遷、小児看護で用いる理論の解説し、その後に、小児医療における生命倫理、小児看護の主な命の成長・発達、子育て支援や愛着形成の障害、障がい児の課題では、発達障害や在宅療養をする子どものと家族の看護についてを講義した。評価は講義への参加とレポート課題の提出を求めた。

22)　成人看護学特論

１年次後期

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、伊東 朋子

平成26年度は３名が履修した。成人看護学の急性期・慢性期・終末期に関する研究、教育の動向について４名の講師がオムニバス方式で教授した。

23)　老年看護学特論

後期

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、安部 眞佐子、佐藤 弥生、増井 玲子

１名が履修した。老年期の健康課題と介入について学習し、特に栄養、認知症、他職種連携に焦点をあてた講義を行いケース介入について思考を深めた。NPコースの学生とともに高齢者の看護についてディスカッションを行うことで、他学習者との知識の交流ができた。

24)　地域看護学特論

１年次前期

佐藤 玉枝、村嶋 幸代、赤星 琴美

地域社会におけるヘルスプロモーション及びプライマリヘルスケアの概念やそのアプローチ方法、健康の保持・増進を支援するための理論と概念、活動方策を教授した。さらに、個人・家族・集団・地域社会の視点、家庭・職場・学校・国際社会の視点、全てのライフステージへの視点という地域で広域的に展開する看護活動の意義、目的、機能、役割について構造的に理解できるよう教授した。

25)　広域看護学演習

２年次後期

佐藤 玉枝、桜井 礼子、崔 明愛

地域看護、在宅看護、国際看護および公衆衛生領域における最新のトピックスを扱った原著の英語論文をとりあげ、各担当教員がチュートリアル方式で演習を行った。

26)　NP Early Exposure実習

１年次　前期後半

小野 美喜、松本 初美、江月 優子

NPコース１年次生４名が１週間の臨地実習を履修した。実習は修了生（NP）が活動する佐伯中央病院、鶴見の太陽、訪問看護ステーションつるみの３ケ所で行った。臨地でのNPの実践に同行したことや指導者との意見交換等を経験し学習効果が高かった。

27）　老年ＮＰ特論

１年次後期後半

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、桜井 礼子、安部 眞佐子、増井 玲子、木本 ちはる

NPコース履修生４名が受講した。EBNに基づいたケアを提供できる実践能力を高めるために、加齢に伴い生じる身体的・精神的・社会的機能の変化と、老年期の発達課題を理解し、NPとしての看護を実践する理論、方法を探究することを目的として講義を行った。NPの看護の対象者は、健康増進や疾病予防を必要とする高齢者や、慢性疾患をもち生活している高齢者であり、各健康レベルにおける看護を専門とする大学教員や臨床で活動する認定看護師などがオムニバス方式で教授した。今年度は学習を統合させる目的で、学生の身近な高齢者ケースをアセスメントしマネジメントプランを立案する課題を課しプレゼンテーションを行った。課題を当初からオリエンテーションしていたため、十分に時間をかけた取り組みができていた。また発表に対する意見交換によって各自の課題が明らかになり、今後の学生に継続する学びとなった。

28）　老年疾病特論

１年次後期

麻生 哲郎、安東 優、糸永 一朗、伊奈 啓輔、兒玉 雅明、小寺 隆元、財前 博文、竹下 泰、三浦 芳子、影山 隆之

NP履修生４名が受講した。老年期にある対象者に適切なプライマリケアを提供するために、老年期によくみられる疾病について学び、その診断・治療（検査・処方）について理解することを目的に行った。実際にNP実習を指導している医師および地域の医療機関で診療を行っている医師を、が非常勤講師となり各専門領域の講義を展開した。ただし各診療領域の時間数は限られており、すべての疾患を取り扱うことは難しく、学生の授業外の主体的な学習は必要であることは、例年通りの課題である。さらに、診療ガイドラインを用いて基本的な治療を学習することを強化していきたい。

29）　老年臨床薬理学特論

１年次後期

吉田 成一、伊東 弘樹、佐藤 雄己

診断後、医薬品を処方するにあたり必要となる基礎的な薬理学総論および各種疾患の治療に用いる医薬品に関し、作用、副作用、相互作用等の面を重点的に身につけるための講義を行った。医薬品の商品名と一般名の双方を理解できるよう心がけ、講義を行った。最終日に筆記試験を行い、当該科目の理解度を確認した。

全ての学生は看護職のため、自身の勤務先で使用している医薬品に関しては商品名での理解は高いものの、一般名に触れる機会がないため、習得が難しい部分が散見された。しかし、今年度は、全ての履修者が所定の学習修得レベルに到達し、単位取得できた。

30）　老年診察診断学特論

１年次前期後半・後期前半

中林 博道、岩波 栄逸、安東 優、糸永 一朗、工藤 欣邦、山口 豊、阿部 航、吉岩 あおい

老年NPコースの大学院生に対して全身の臓器・器官系ごとに老年者を対象とした診察や診断において必須の知識や技術について講義した。

31）　老年アセスメント学演習

２年次前期前半

立川 洋一、永松公明、麻生 哲郎、中林 博道、小野 美喜、桜井 礼子、石田 佳代子、松本 初美、福田 広美

老年看護の対象（高齢者・家族・地域社会）に対して、包括的健康アセスメントおよび看護的治療マネジメントを行うことを目的に、専門的知識と技術を修得するうえで必要なシミュレーショントレーニングを行った。トレーニングには、臨床に即した代表的な事例として、初期診療を必要とする症例と、慢性期にあり継続的な診療を必要とする症例について演習を行った。

32）　老年薬理学演習

２年次前期前半

濱田 一

成人や高齢者の初期治療や症状マネジメントに使用される薬物処方について、アセスメントおよび医療処置管理が行えることを目的に、事例に適した薬物の選択やマネジメントに関する演習を行いトレーニングを行った。高齢者に生じやすい副作用や薬価についても演習を行い、これらを考慮した薬物選択について事例を通して学習を行った。

33）　老年実践演習

２年次前期後半

佐藤 博、古川　雅英、山本 真、石川 純也、小野 美喜、松本 初美、前田 徹、竹内 山水

NP履修生６名が履修した。老年期の対象者に看護的治療マネジメントを行うための専門的知識と技術を修得するために、シミュレーショントレーニングを行うことを目的に演習を展開した。NPに必要なデブリドメント、局所麻酔、抜糸、胃ろうカテーテル交換、気管挿管、X線読影のスキルが向上する演習を展開した。学生には授業時間だけでなく課外の自主トレーニングも実施できる環境を整え全体的な到達度があがった。

34）　老年ＮＰ実習

２年次前期後半・後期

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、石田 佳代子、中林 博道、立川 洋一、
小寺 隆元、財前 博文、増井 玲子、石丸　修、麻生　哲郎、川上 克彦、酒井 浩徳、長松　宜哉、江月 優子

プライマリ診療を行う場で実践力を身につけることを目的にNP実習を展開した。昨年度同様に、病院施設８週間、老人保健施設２週間、診療所４週間の合計12週間で構成した。６名の学生が履修し、医師、大学教員ともマンツーマンでの指導形式をとった。さらに実習前後に施設長、主指導医、看護部長、大学側との実習施設合同会議を設け、実習目標と方法の共通理解と評価の共有を行うなど大学と各施設との連携をとった。医療事故なく実習を終了することができた。

35）　老年ＮＰ探求セミナー

２年次後期

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、石田 佳代子、江月 優子、中林 博道

老年NP実習にて診療を担当したケースを振り返り、文献等を活用しながらケースレポートの作成をした。ケース発表会では担当教員や他学生との意見交換をとおして知識強化し、全学生との共有を促進した。さらに次段階の実習準備として介護老人保健施設での研修を設けた。セミナーによって病院実習の学びの整理ができ、医療体制や保険制度の異なる実習施設で療養する高齢者の健康問題とNP役割を考察につなげられた。

36)　ＮＰ論

１年次前期前半

藤内 美保、小野 美喜、桜井 礼子、高野 政子、村嶋 幸代、草間 朋子

米国および韓国から学ぶNPの歴史的変遷、NPの役割と実践活動と、日本におけるNPの必要性と教育カリキュラム、NPの求められる能力について教授し、今後の自分たちの目指すNPの活動の場と実践内容について検討した。また、NP卒業生からNP活動の実際を知る機会とした。

実際に卒業生が働く臨地にて体験実習を行い、NPが組織の中でどのように役割をとり、実践しているのかを学んだ。実習終了後には学生間で討議を行い、プライマリケア領域におけるNPの役割と今後の自らの学習課題を確認できた。

37)　フィジカルアセスメント学特論

１年次前期後半

藤内 美保、中林 博道、石田 佳代子

クライエントの包括的・全身的な身体的健康状態のアセスメント能力を高めることを目的に教授した。五感を駆使した問診、視診、触診、打診、聴診の基本技術を身につけるため、講義および演習形式で行った。全身、頭部、頸部、胸部（肺および心血管系）、腹部、直腸、四肢、神経系のフィジカルアセスメントを系統的に実施した。演習では異常な状態把握ができるようにフィジカルアセスメントモデル、高機能シミュレーター、眼や耳のシミュレーターを使用した。確実な知識・技術が身につくように中間試験と総合試験を実施した。試験は筆記試験およびOSCEを行った。また、構造化されたフィジカルアセスメントの評価表でトレーニングすることにより、確実なフィジカルアセスメントができている。

38)　小児アセスメント学演習

２年次前期前半

高野 政子、草野 淳子、江口 春彦、大野 拓郎、黒木 雪絵、後藤 愛

小児看護の対象（小児と家族・地域社会）に対して包括的アセスメント、医療処置管理を行うための専門的知識と技術を習得するために、事例や高機能シミュレーターを通してアセスメンとするトレーニングを行う。最初に、学内で高機能シミュレーター―で診察練習を行い、実習協力病院の医師と診察の実際を行った。その後に、初期症状を伴い包括的健康アセスメントが必要な事例（アレルギー性紫斑病の女児）と、慢性疾患のもち継続治療を必要とする事例（小児気管支喘息をもち肺炎を合併した男児）をレポートにまとめ、プレゼンテーションを行って質疑応答した。評価は演習の全体を通して総合的に判断した。

39)　小児薬理学演習

２年次　前期前半

松本 康弘、高野 政子、草野 淳子

本講座は、小児疾患に対する薬物療法を理解し、薬物療法に影響を与える要因、小児の薬用量、服薬指導などについて知識と技術を学ぶこと、また、小児に多い疾患の事例で演習し、処方箋の書き方やなど薬物の処方の実際についての能力を修得する。講義は、小児に使用する薬剤の形と吸収、小児の薬の特性と禁忌、アドヒアランス向上と服薬指導、１型糖尿病の薬物と処方、アトピー性皮膚炎の薬剤と処方、小児気管支喘息の薬剤と処方、小児の便秘、嘔吐、下痢の薬剤と処方、中耳炎、溶連菌感染等の薬剤と処方、授乳と薬剤などを講義と、毎回の演習をミニテスト方式で実施した。評価は、最後に試験を実施した。

40)　小児実践演習

２年次　前期後半

古川 雅英、山本 真、石川 純也、高野 政子、草野 淳子、前田 徹、竹内 山水、佐藤 圭右

小児NP学生は、老年NP履修生と共に履修した。専門的知識と技術を修得するために、シミュレーショントレーニングを行うことを目的に学内で演習を展開した。後半は、NPに必要なデブリドメント、局所麻酔、抜糸、胃ろうカテーテル交換、気管挿管、X線読影のスキルが向上する演習を展開した。学生には授業時間だけでなく課外の自主トレーニングも実施できる環境を整え全体的な到達度があがった。

41)　小児NP実習

２年次　後期前半

大野 拓郎、岩松 浩子、金谷 良能、糸永 伸能、福永 拙、佐藤 圭右、別府 幹庸、高野 政子、草野 淳子、黒木 雪絵、後藤 愛

プライマリ診療を行う場で実践力を身につけることを目的にNP実習を展開した。病院８週間、重症心身障害児者施設５週間、診療所２週間の合計15週間で構成した。小児医療の隣地で、医師の包括的指示の下に活動するＮＰ修了生の高度実践看護師についても学んだ。指導は、医師、大学教員ともマンツーマンでの指導形式をとった。さらに実習前後に施設長、主指導医、看護部長、大学側との実習施設合同会議を設け、実習目標と方法の共通理解と評価の共有を行うなど大学と各施設との連携をとった。医療事故なく実習を終了することができた。

42)　小児NP探求セミナー

２年次後期前半

高野 政子、草野 淳子、黒木 雪絵、後藤 愛

小児NP実習にて診療を担当したケースを振り返り、文献等を活用しながらケースレポートの作成をした。ケース発表会では担当教員、修了生２名が参加し意見交換をとおして知識強化した。セミナーによって病院実習の学びの整理ができ、医療体制や保険制度の異なる実習施設で療養する小児の健康問題と小児NPの役割を考察することなった。

43)　広域看護学概論

１年次前期

佐藤 玉枝、村嶋 幸代、赤星 琴美、藤内 修二

地域社会におけるヘルスプロモーションおよびプライマリヘルスケアの概念やそのアプローチ方法、健康の保持・増進を支援するための理論と概念、活動方策を教授した。さらに、個人・家族・集団・地域社会の視点、家庭・職場・学校・国際社会の視点、全てのライフステージの視点という広域的に看護活動の意義、目的、機能、役割を探究した。

特に、地域保健領域での法改正や保健事業の見直しなど、常に新しい情報をすばやくキャッチし、新鮮な情報を学生へ提供しつつ、複雑化する行政機関における広域看護の役割・機能を具体的に理解できるように教授した。

44)　地域保健特論

１年次前期

佐藤 玉枝、赤星 琴美、品川 佳満、大津　孝彦、甲斐　香代子

地域で生活する個人・家族、集団を対象とした保健師がおこなう支援の基本的な考え方を理解し、人びとが生活している地域における看護の役割と機能を理解できるよう講義した。また、個人を対象とした支援から地域社会全体を対象とした支援までの保健師活動方法を教授した。

受講生の学習状況を把握しながら講義を行い、レポートおよび出席状況により評価した。

45）　産業保健特論

１年次後期

佐藤 玉枝

労働環境および作業上の諸条件から発生しやすい疾病・障害を防止し、身体的・精神的・社会的健康と福祉を維持増進するための産業保健システム、活動、看護の位置付けと役割・具体的な活動方法をヘルスプロモーションや産業保健に関する理論やモデルを用いて教授した。

常に資料やパワーポイントなど活用することで、学生が産業保健分野で活動する看護職をイメージでき、理解が深められるよう教授した。

46）　健康危機管理論

１年次前期

赤星 琴美、佐藤 玉枝、桜井 礼子、甲斐 倫明、玉井 文洋、本山 秀樹、足立 佐智子

健康障害のある個人、家族、集団を対象として保健師がおこなう支援の基本的な考え方が理解できるように講義した。さらに、地域社会における健康危機管理（災害時保健活動を含む）に関する考え方や保健師活動の展開方法および多職種連携について理解を深めるために時間を十分にかけた。

保健所の保健師を講師として招くことで、地域での健康危機管理の実際や課題などについて活動方法や事例を使いながら講義を行った。

また、大分DMATで活躍している講師による講義を通して災害発生時の対応についても学ぶようにするなど、学習に深みを持たせられるよう配慮した。

47）　健康増進技術演習

１年次前期

関根 剛、安部 眞佐子、稲垣 敦

本講義では、発達段階や健康レベルに応じた個人・集団の健康と生活を評価し、効果的な疾病予防・健康増進の支援ができる知識と能力を養うことを目標に、運動指導、栄養指導、心理相談の３テーマから講師による講義を行った。

運動指導（合計６回）は、科学とは？、運動の強さと量、身体活動量測定実習、健康づくりのための身体活動基準2013、筋と老化・不活動、筋トレの実際、介護予防運動、柔軟性とストレッチング、トレーニングの原則。

栄養指導（合計７回）は、エネルギー代謝、栄養素について、消化と吸収、食事摂取基準、食事バランスガイド、ライフステージ別栄養のトピックス、食品と食品表示。

心理相談（合計８回）は、心理相談の技術（１）講義（２）傾聴技法（ロールプレイ）（３）積極技法（ロールプレイ）、グループダイナミックス（１）リーダーシップ（２）構成的エンカウンターグループ・リラクゼーション（自律訓練・行動療法）、ＰＴＳＤの予防と被害者や被災者への支援、社会資源の利用とリファーの仕方。

48）　広域看護アセスメント学演習

１年次後期

赤星 琴美、佐藤 玉枝、村嶋 幸代、佐伯 圭一郎、品川 佳満

最も重要なスキルである地域看護診断を用いて地域社会の健康問題の抽出とその評価と、それに対する改善策について講義と演習を行った。既存資料の利用、地区視診をおこなうことで対象集団の理解やニーズを多面的にアセスメントし、地域の抱える健康問題、地域住民の健康課題を抽出し、支援方法を立案する演習を取り入れた。

内容としては、「地域マネジメント実習」を行う対象の市の二次データを用いながら、地域の健康問題の抽出を行った。

49）　健康教育特論

１年次前期

赤星 琴美、佐藤 玉枝

個人と集団が、自らの健康および福祉の維持増進のための主体的な取り組みが行えるための支援方法について講義を行った。必要な知識・技術を対象者に効果的に伝達できる能力を習得できるよう心がけた。

健康教育に関連した理論を教授し、教育的働きかけのあり方と保健師の地区活動の展開方法の具体的事例を挙げ、基礎知識・技術が習得できるような講義内容とした。

レポート課題を教員・学生で共有し、ディスカッションを繰り返しながら、健康教育のデモンストレーションを行い、さらに修正していくという過程を踏むことで学習を深めた。

50）　健康リスクアセスメント演習

１年次後期

赤星 琴美、佐藤 玉枝、本山 秀樹、足立 佐智子

個人、家族、集団が抱える潜在的な健康問題（リスク）を的確に予測し、保健師としてのリスクマネジメント、支援のあり方を習得するために講義と演習を行った。さらに、対象者または対象集団がリスクを予測し、自らリスクマネジメントができる支援方策を習得するため、具体的な事例を使用して学習を深めた。

51）　疫学特論

１年次前期

佐伯 圭一郎

人間集団における健康事象の頻度分布とそれに影響を与える多様な因子を分析するために不可欠な疫学の理論と実践の手法を身につけることを目的としてテキストの講読とディスカッションを行った。さらに保健師としての活動で特に必要度の高い調査手法とその具体例について理解を深めた。

52）　保健統計学

１年次前期

佐伯 圭一郎、野津 昭文

人口統計や疾病統計、保健情報など、公衆衛生活動の基礎となる集団における健康情報の調査法とその概要、ならびに分析法について、その発生源から取り扱い、解釈に至るまで体系的に扱った。また、それら健康情報を適切に整理・分析するための生物統計学の手法を教授した。内容は以下の通りである。

１．健康情報の基盤となる理論
２．人口統計
３．傷病に関する統計
４．その他の保健統計
５．統計学的基礎
６．調査計画と推測統計手法
７．人口統計における統計手法
８．地域保健医療データの統計解析

53）　疫学・保健統計学演習

１年次後期

佐伯 圭一郎、品川 佳満、野津 昭文

疫学および保健統計学の知識に基づいて、実践する能力を身につけることを目的として演習を行った。保健師業務に必須であるICT技術を身につけ、情報収集・分析・発信に活用できる能力を養った。

本年度の内容は以下の通りである。

１．情報処理・情報管理の基礎
２．情報収集の技術
３．疫学データの解析
４．保健統計データの解析(1)
５．保健統計データの解析(2)
６．グラフィカルな手法・マッピング
７．シミュレーション
８．情報発信の技術

54）　社会保障システム特論

１年次前期

平野 亙

社会保障制度の理念と構造を理解するために、生存権の意味と法・行政など社会制度の位置づけ、社会資源としての諸制度に対する理解を深めることを目的に、講義を構築した。具体的には、法と行政の構造、財政の仕組み、社会保障理念の変遷、所得保障の諸制度、医療制度とマンパワー、医療の安全管理、公衆衛生施策の体系、高齢者の保健とケアの制度、児童福祉、障がい者福祉の諸制度である。今年度も受講生が１名であったため、ゼミのような一問一答の討論が実施できた。成績評価は、講義内容に関連して、中間と期末の２回のレポート提出により行った。

55）　保健医療福祉政策論

１年次後期

平野 亙、阿部 実

保健師として各種保健事業を企画・執行するのに必要な、政策形成、企画立案の能力を涵養する目的で、保健・医療・福祉の政策理念と政策上の課題、社会保障財政の現状、保健活動と社会福祉の評価、障がい論、自立支援、権利擁護について講義し、さらに締めくくりとして、県の保健福祉行政に長年携わってこられた阿部講師（非常勤）から、地方保健福祉行財政の計画と実際について2回の講義をいただいた。成績評価は、実際の大分県の保健・医療・福祉に関する基本計画を検索、整理して課題分析を行うレポートにより行った。

56）　疾病予防学特論

１年次前期

佐藤 玉枝、藤内 修二、池邉 淑子、増井 玲子、三浦 源太

さまざまな健康レベルにある個人、個人を取り巻く家族、集団、社会の健康状態を的確に判断・評価する能力を身につけるために、解剖・生理学、疾病病態学、フィジカルアセスメント、臨床検査法等、診断治療学などの医学的な知識を教授した。また、疾病予防のためにエビデンスに基づいた保健師としての健康教育・健康相談の実践活動ができるようにするために、必要な知識、および実践能力を習得できるように教授した。

57)　実践薬理学特論

１年次前期前半

吉田 成一

生体内に投与された薬物の生体への影響（薬力学）と、生体内に入った薬物の生体処理法（薬物動態学）を理解し、薬害と有害作用、処方概要と投薬設計、治療効果と副作用についての基礎知識に関する講義を行った。特に生活習慣病を中心とした疾患（糖尿病、高脂血症、高血圧症など）に対する主な治療薬の作用機序、副作用、注意事項など、保健指導に活用できる実践薬理学の基礎知識が習得できるような講義内容とした。

58)　薬剤マネジメント学特論

１年次後期

赤星 琴美、平川 英敏

ノンコンプライアンス者とその家族への処方内容・指示に関する指導、家庭での薬物管理（残薬管理等）と服用方法などについて教授した。さらに、健康危機状態にあるハイリスク対象者への薬物の取り扱い方法や内服方法、効能などについての薬剤指導法（DOTS、抗結核薬、抗うつ・抗不安薬、催眠・鎮静剤、副腎皮質ホルモン剤などの取扱と服用方法など）など保健師の保健指導に必要な知識などについて、具体的に理解が深められるよう、資料とパワーポイントを活用した。

59)　環境保健学特論

１年次前期

甲斐 倫明

環境と健康との関係を理解するために、社会的ニュースを事例にして、物理的要因、化学的要因、生物的要因および社会的要因と健康との関係についての基礎概念の整理を行い、最新の英語研究論文を紹介しながら問題意識を高める工夫をした。講義内容は次の通りである。1)環境保健とは何か、2）生存率とハザード関数などの指標、3)DALYs（障害調整生存年数）およびその他の健康指標、4）因果関係、5)IARCモノグラフ、6）喫煙の健康影響、7）ETSのリスク、8）放射線のリスク、9)携帯電話とがんリスク、10）化学物質の非遺伝毒性、11）化学物質の遺伝毒性（ベンゼンのリスク）、12）感染症のリスク、13）食の安全、14）生活因子/社会因子/遺伝因子、15）リスクガバナンスとリスクの考え方

60)　地域生活支援実習

１年次後期

佐藤 玉枝、村嶋 幸代、赤星 琴美

個別ケースを通して、対象者とその家族が地域で暮らしていけるように、ケアマネジメント、地域ケア資源の活用方法について考えることを目的として訪問看護ステーションの訪問看護師に同行し、実習を行った。６月から１月までの８か月間に合計９回の訪問を行い、成果報告会を３月３日（火）に行った。実習前、実習中にはカンファレンスを行い、実習目標の検討、方法の共通理解と評価の共有を行うなどして連携をとった。事故なく実習を終了することができた。

61）　地域マネジメント実習

１年次後期

赤星 琴美、佐藤 玉枝、村嶋 幸代

広域看護アセスメント学演習で作成した地域看護診断に基づいて、地域全体の健康課題の解決に向けた地域活動支援を実施し、評価ができる能力を養うことと、地区組織化活動や地区管理を通して、関係者・関係機関との連携・調整・交渉などができる能力を養うことを目的に実習を展開した。

市において、３週間の合計15日で構成した。１名の学生が履修し、実習指導保健師の指導を受けながら実習を行った。

10月17日(金)に実習施設の方々の参加を得て、実習成果報告会を開催し、実習成果を共有した。

62）　広域看護活動研究実習

１年次後期

佐藤 玉枝、村嶋 幸代、赤星 琴美

開発すべき社会資源や健康政策・保健医療福祉システムについて考察・探求し、地域社会の健康づくりの組織者として、個人のみならず地域社会全体のQOLを向上させる活動を研究的視点を持ちながら実行できる能力を養うことを目的に実習を展開した。

保健所および市、産業において、９週間の合計45日で構成した。１名の学生が履修し、実習指導保健師の指導を受けながら実習を行った。

１月16日(金)に実習施設において、実習成果報告会を開催し、実習成果を共有した。

63）　助産学概論

１年次前期

梅野 貴恵

助産の基本概念および女性をとりまく社会的背景を認識し、助産師の責務と社会変化のなかで期待される役割と重要性について、さらに助産師活動に積極的に取り組む姿勢について系統的に教授した。授業方法は、半分は資料を用いた講義形式、半分は課題を提示し、学生がプレゼンテーション、その後ディスカッションを行った。「出産の満足度」をとりあげた研究論文を各自でクリティークし発表、ディスカッションを通して、助産とは何か、社会に求められる助産師の役割を検討することができた。今後は、助産師としてのアイデンティティを培うことができるような授業展開を行うことが課題である。

64）　周産期特論

１年次前期

佐藤 昌司、飯田 浩一、豊福 一輝、軸丸 三枝子、後藤 清美、梅野 貴恵

マタニティサイクルにある女性と胎児及び新生児に関する助産診断を行うために、妊娠・分娩・産褥・新生児の生理とその管理についての基礎知識、さらに周産期における異常を判断するために、主な疾患の病態・検査・治療やNICUにおける新生児管理、新生児救急蘇生法について教授した。すべての講義は周産期における正常・異常を判断するために必要な最新の医学的知識と技術の習得を目指して産婦人科医師・新生児科医師を講師とした。評価は、筆記試験を実施した。

65)　母子成育支援特論

１年次前期

石岡 洋子、高野 政子、平野 亙、吉村 匠平、桑野 紀子、上野 桂子、井上 祥明

母子関係及び家族関係の構築に必要な支援だけでなく母子とその家族を取り巻く環境や諸問題にも視点をあて、家族の機能とその支援方法について講義を行った。

具体的には、発達心理学からみた女性のライフサイクル、発達心理学からみた親子関係、発達心理学からみた夫婦関係、生殖医療を取り巻く社会環境とその課題、生殖医療への不妊治療をうける対象の理解、社会的支援が必要な母子への援助、家族と社会、日本と世界の子育て、子育て支援である。ゼミ形式もとりいれた。成績評価は、レポート提出により行った。

66)　リプロダクティブ・ヘルス特論

１年次後期

井上 貴史、中村 聡、嶺 真一郎、宇都宮 隆史、谷口 一郎、堀永 孚郎、梅野 貴恵

女性の性や生殖に関連する健康問題を判断し対応できる能力を習得するために、性分化の機序をはじめ、生殖器に関する携帯機能や主な疾患及び治療に対する基礎知識や最新の生殖補助医療の現状と課題、ワクチン接種等の予防も含めた子宮頸癌の動向についても教授した。すべての講義は性と生殖における正常・異常を判断するために必要な最新の医学的知識と技術の習得を目指して産婦人科医師を講師とした。評価は、筆記試験を実施した。

67)　ウイメンズヘルス特論

１年次前期

梅野 貴恵、甲斐 倫明、市瀬 孝道、影山 隆之、赤星 琴美、桑野 紀子、實崎 美奈

女性の生涯を通じた健康づくりを視野にリプロダクティブ・ヘルスを推進するために女性のライフサイクル全般における性と生殖に係わる健康問題を検討し、健康教育を実施するための知識や技術を教授した。主な内容は、講師の専門性を考慮したオムニバス形式で実施し、各講師からのレポート課題で評価した。

68)　妊娠期診断技術特論

１年次前期

安部 真紀、梅野 貴恵、石岡洋子、吉田 成一、安部 眞佐子、小嶋 光明、渡辺 しおり

妊娠期の経過及び生活状態に関する必要な情報を収集するためのフィジカルアセスメントや助産診断を行うための基礎的な知識及び助産技術について講義を行った。具体的には、妊娠の生理と診断に必要な情報とアセスメント、助産師外来の実際、妊娠期のフィジカルアセスメント、妊産褥婦の栄養摂取と栄養指導、妊産褥婦と薬剤、妊婦の日常生活適応への支援と保健指導、母子に対する放射線の影響、出生前診断を受ける妊婦への支援、MFICUにおける妊婦管理、ハイリスク妊婦の支援である。成績評価は、筆記試験と出席状況により行った。

69)　分娩期診断技術特論

１年次前期

石岡 洋子、樋口 幸、生野 末子、渡邊 めぐみ

分娩期の経過及び生活状態に関するフィジカルアセスメントや助産診断を行うために必要な基礎知識及び助産技術について講義を行った。具体的には、分娩開始の診断、産婦の健康生活状態の診断、胎児の発育と発育状態の診断及び胎児付属物のアセスメント、産婦の支援、ハイリスク・異常分娩時のアセスメントと対応である。成績評価は、出席状況、筆記試験により行った。

70)　産褥・新生児期診断技術特論

１年次前期・後期

樋口 幸、和田 美智代

産褥期にある女性と新生児、乳幼児の健康状態を包括的にアセスメントし、助産を実践するための内容を教授した。授業方法は講義と演習を組み合わせて行った。産褥の母乳育児支援は、実践で活躍する外部講師に２コマ依頼し、講義と演習を行った。また、授乳指導の演習を取り入れ、実際の指導場面を想定し体験した。産褥期の退院指導では、個人で指導案・パンフレットの作成を行い、ロールプレイで発表し意見交換や自己評価を行った。新生児の講義・演習では、NICUにおけるケアを体験し、「周産期診断技術演習」や「NICU課題探究セミナー」の導入とした。評価は、筆記試験、レポート、演習参加度から実施した。

71)　周産期診断技術演習

１年次前期

樋口 幸、佐藤 昌司、河野 富美代

妊産褥婦と胎児・新生児の健康状態をエビデンスに基づいて診断する技術と、具体的な支援方法について教授した。

胎児の健康状態の診断については、高機能シュミレーターを用いて胎児の計測や奇形の有無などから成長・発達、健康状態の診断、異常の早期発見に関する知識と技術を習得し、OSCEで到達度チェックを行った。さらに、CTG波形の判読についても実際のモニター波形から学び、総合的に胎児の健康状態を診断できる能力を養った。また、新生児蘇生法については、学内演習で新生児蘇生のアルゴリズムに則り、新生児モデルで出生直後から気管内挿管、薬剤の投与に至るまで、様々な事例に合わせて必要な援助技術の習得を行った。その後日本周産期・新生児医学会の新生児蘇生法「一次」コースを受験し、全員合格した。さらに、マタニティーヨーガやマタニティービクス、産褥体操など分娩や育児期の身体づくりやマイナートラブル緩和のための方法について、解剖生理も含め理論を教授したうえで、実際に体験した。

また、新生児の栄養について、桶谷式乳房ケアを行う臨床助産師を講師に招き、乳房トラブルの予防やマッサージの方法など、実際に乳房モデルや模型を使用して演習を行った。なお、様々な新生児の健康状態に合わせて対応できるよう、人工栄養の基礎知識についても教授した。学生はすべての講義・演習に積極的に参加した。

72)　助産保健指導演習

１年次前期

石岡 洋子、樋口 幸、安部 真紀、梅野 貴恵

女性とその家族の個別性を理解し、各発達段階にある個人及び集団を対象とした、保健相談、健康教育、援助活動について演習を行った。また、妊娠期・産褥期に行う保健指導の際に使用するパンフレットを作成した。思春期教育は、実際に近隣の小学校で実施した。成績評価は、レポート、演習内容により行った。

73)　分娩期実践演習

２年次前期

石岡 洋子、梅野 貴恵、樋口 幸、安部 真紀

助産実践に必要な基本的分娩介助技術の修得にむけた演習を実施した。産婦とその家族にとっての安全で安楽な分娩について考えるとともに、助産師の役割についても理解を深めた。

評価は、筆記試験、技術試験、出席状況を考慮して行った。

74）　助産過程展開演習

１年次後期

梅野 貴恵、石岡 洋子

助産を実践するための基本的な助産過程の展開についてペーパーペイシェントを用いて習得し、実践へ応用する能力を身につけさせるために教授した。助産診断の概念・助産診断のプロセスを教授したのち、正常から逸脱した妊婦1事例、正常経過をたどる分娩期の事例1例、正常から逸脱する可能性の高い分娩期の事例1例の計３事例を用いて助産過程の展開を実施させた。事例の展開方法は各自で自己学習したのち、各自の発表やグループワークを行った。発表の後、教員が解説することで理解を深めることができていた。評価は、提出されたレポート、発表内容等から実施した。

75）　助産マネジメント論

１年次後期

梅野 貴恵、宮﨑 文子、生野 末子、戸髙 佐枝子、越田 津矢美、安部 真紀

助産師の職務、業務範囲および法的責任を理解し、助産業務を遂行するために必要な助産管理を教授した。主な内容は、管理の基本概念、助産管理の概念と助産業務管理、助産に関連する法規、助産所の経営管理と働く場の違いによる助産業務管理の特性、周産期管理システム、周産期における医療事故とリスクマネジメント、母子への災害看護等をとりあげ、オムニバス形式で実施した。評価は、筆記試験を実施した。

76）　地域母子保健学特論

２年次後期

梅野 貴恵、赤星 琴美、疋田 理恵、吉冨 豊子

日本の地域母子保健の現状について理解を深め、社会に求められる助産師の役割を明確にするための内容を教授した。母子保健の変遷、母子保健施策、母子保健の水準、育児を取り巻く社会環境についてオムニバス形式で実施した。

77）　助産マネジメント演習

２年次後期

梅野 貴恵、生野 末子、菊池 聖子

助産業務の行われる病院・助産所において、母子保健医療チームの一員としての助産師の役割と責任を認識し、助産の対象者の健康管理や助産マネジメントを実践する能力を習得するための演習科目とした。地域周産期医療センターに母体搬送される事例をもとに、受け入れ施設の助産師として求められる役割と助産ケアについてディスカッションしたあと、シミュレーション学習をした。さらに、助産院の院長について日常的な助産管理全般を経験し学びを深め、将来の目標と自己の課題を明確にし、助産師としてのアイデンティティを培うことにつながった。

78）　分娩介助実習

２年次前期

梅野 貴恵、石岡 洋子、樋口 幸、安部 真紀

人間尊重の基本理念に基づき、新しい命の誕生に携わらせていただくことへの感謝と責任をもって、妊娠期から産褥・育児期まで継続して母子とその家族を受持ち、個別性に即した助産ケア実践能力を養うことを目的に７週間の実習を行った。実習施設は、診療所２施設と地域周産期医療センターである。分娩介助目標例数を13例以上として取り組み、10～13例の実施となった。夜間・休日の実習や待機もあり学生２名が体調を崩し、病院受診をして１週間程度の休養をとり、その後実習を継続し終了することができた。継続事例3例を妊娠期から産後１か月まで受け持ち助産実践を行うことで、継続支援の重要性と助産師としての役割を自覚することができた。

79）　ハイリスク妊産婦ケア実習

２年次前期

梅野 貴恵、石岡 洋子、安部 真紀

周産期におこる異常やリスクに対して的確な判断力と高い予見性、緊急事態に対応する能力を養うことを目的に３週間の実習を行った。実習施設は、総合周産期母子医療センターと地域周産期医療センターである。受持ち対象者のリスク状況に差はあったものの、母児の安全に配慮し助産過程を展開することができた。周産期センターにおける助産師としての役割やチーム医療、他職種との連携等について学びを深めることができた。

80）　妊娠期課題探究セミナー

１年次後期

梅野 貴恵、石岡 洋子、樋口 幸、安部 真紀

妊娠期の助産診断技術を活用し、妊婦と胎児の健康水準を助産師が自律的に判断し、科学的根拠に基づいた助産診断を行い、さらに妊婦のニーズに寄り添い、安全で快適な出産を迎えるための保健指導ができる能力を身につけるための実習としている。前半の８週間で大分県立総合周産期母子医療センター産科外来、わたなべ助産院、生野助産院で実習し、12月からは、堀永産婦人科、別府医療センターに分かれ実習した。２月からは７月に出産する予定の妊婦を継続事例として受持ち、健診日に実習した。臨地での産科医師による指導や助産師の指導を受けながら、個別に応じた保健指導が行えるようになった。超音波を用いた妊婦健康診査20例と保健指導の実際12例以上の目標は、到達することができた。

81）　ＮＩＣＵ課題探究セミナー

１年次後期

梅野 貴恵、樋口 幸

ハイリスク新生児の生理的特徴を理解し子宮外生活適応の過程をアセスメントし、基本的ニーズに応じた看護を展開し、母子分離された母親とその家族への親子関係成立のための支援を実施するために、大分県立総合周産期母子医療センターNICUで、2週間実習を行った。学生はハイリスク新生児1名を受け持ち、受持ち児と保護者のニーズに応じた看護過程の展開を実施し、保護者への退院指導の一部を実施した。また、NICUに入院中の超低出生体重児の看護の実際や他部門との連携を見学することで、母子分離された両親への愛着形成促進のためのケアや助産師として果たすべき役割について学んだ。

82）　地域母子保健演習

２年次後期

梅野 貴恵、大分市保健師、別府市保健師、渡邉 しおり

助産師として地域における母子保健ニーズに対応し、質の高い母子保健活動を展開する能力を養うための演習科目とした。大分市・別府市の母子保健事業の概要と母子保健の水準等を自己学習したのち、大分市・別府市の担当保健師とディスカッションを行い、母子保健環境の特性を理解した。４か月児健康診査、１歳６か月児健康診査に参加し、母親が抱える子育ての問題を理解し、解決へ向けた保健師の対応や地域における取組、他機関との連携を理解した。特に、４か月児健康診査では、継続事例または分娩介助実習での受け持ち母子の健診に付き添うことで、家族や地域の人に支えられ成長していく母子への助産師としての役割を認識することができた。大分市の４か月児健康診査は個別健診のため、堀永産婦人科における３～４か月児健診に参加した。

83)　健康運動科学特論Ⅰ

１年次後期

稲垣 敦

科学の特性について、具体例を上げて解説し、運動に関する基本的な事柄をとりあげ講義した。また、修士論文の計画作成や指導の中で、科学、健康、運動について議論した。

84)　身体機能適応科学特論

１年次後期

稲垣 敦

修士論文テーマに関連する論文を学生が選び、また、科学的常識を学べる論文を教員が選んで精読し、論文精読フォームにまとめで発表した。

85)　放射線健康科学特論Ⅰ

１年次　前期

甲斐 倫明、小嶋 光明

放射線・放射性物質の物理的基礎から生物・健康影響、さらには医療利用について、テキスト「放射線基礎医学（第12版）」に沿って講義形式で行った。講義内容は次の通りである。
1）物質の構造と放射線、2)放射線の物質の相互作用、3）放射線に関する量と単位、4)放射線の測定、5）X線発生装置とX線撮影の原理、6）放射線治療、7）線量分布と線量計算、8）放射線生物作用の一般的特徴、9）放射線損傷と細胞応答、10）放射線損傷と修復、11）人レベルの健康影響、12）放射線防護の考え方

86)　放射線保健学特論

２年次後期

甲斐 倫明、小嶋 光明

医療で用いられる放射線・放射性物質及び環境中の放射線源とそれから被ばくに伴う健康影響についての基礎的な知識、さらに、医療および原子力災害において、看護職が患者等との対応に必要な知識と放射線の健康リスクについて教授した。

87)　放射線リスク学特論

１年次　後期

甲斐 倫明、小嶋 光明

放射線リスクに関する最新原著論文を取り上げ、抄読会方式で輪講し解説を行った。取り上げた内容は次の通りである。
1）CT被ばくの線量評価（WAZA-ARI)、2）CT被ばくの疫学調査結果(英国）、3）CT被ばくの疫学調査結果(オーストラリア、台湾)、4）CTの肺がんスクリーニングのリスクと便益、5）小児放射線治療に伴う２次がんのリスク、6）医療放射線と脳腫瘍のリスク、7）CT検査による線量の施設間差、8）白血病リスクの標的となる骨髄線量評価

88)　英語論文作成概論

１年次前期後半

甲斐 倫明、影山 隆之

修士論文作成に必要な英文アブストラクを書くための基礎的事項を教授した。講義内容は次の通りである。1)英語科学論文の特徴、2)構造化抄録および論文の構成、3)日本人が間違いやすい英語表現、4)調査研究データ特有の英語表現の事例、5)実験研究データ特有の英語表現の事例、6)アブストラクトの事例、7)アブストラクの書き方

89)　特別研究（看護学専攻）

通年

指導教員：石田 佳代子、吉村 匠平
副指導教員：稲垣 敦、桜井 礼子、赤星 琴美、石田 佳代子

下記の研究テーマの論文指導を行った。

1) 衛藤 泰秀：Ａ県公立中学校における応急手当に関する教育方法と課題
—教員への意識調査より—
2) 中釜 英里佳：看護系大学生による実習中の業的援助要請は臨地自己効力感おび実習中のストレス反応とどのように関連しているか

90)　課題研究（ＮＰ）

通年

指導教員：高野 政子、小野 美喜、市瀬 孝道、伊東 朋子、中林 博道、桜井 礼子、福田 広美
副指導教員：品川 佳満、草野 淳子、吉村 匠平、江月 優子、福田 広美、河野 梢子、小嶋 光明、平野 亙、安部 眞佐子、松本 初美、中林 博道、秦 さと子、猪俣 理恵、関根 剛

下記の研究テーマの論文指導を行った。

1) 菅谷 愛美：大学院小児NP修了生の２年間の活動の実態と今後の課題
2) 向井 拓也：緩和ケアにおけるNPと看護師の協働によるケアアプローチに関する研究
3) 宮川 ミカ：病院に勤務する 特定看護師の活動 と多職種評価
－プライマリ・ケア領域の大学院NP教育修了者に関する分析－
4) 佐藤 健誠：在宅療養中のALS患者に対する訪問看護における特定看護師の役割
—人工呼吸器が継続的に必要な患者に対して—
5) 松 久美：救急搬送症例からみた高齢者施設におけるNPの役割
—Ａ市一地区における救急搬送症例の分析から—
6) 窪田 千草：大分市東部地域の中核救急施設における来院時心肺停止症例のうち老人施設入所者症例の検討
7) 相良 久美代：慢性心不全患者の包括的アセスメントシートの提案
—入退院を繰り返す在宅療養者の症状マネジメントへの活用—
8) 谷山 尚子：在宅医療を担う特定看護師の実践に関する質的研究

91）　課題研究（リカレント）

通年

指導教員：村嶋 幸代、藤内 美保、桜井 礼子
副指導教員：赤星 琴美、甲斐 倫明、桑野 紀子、市瀬 孝道、定金 香里、草野 淳子、宮内 信治、佐藤 玉枝、品川 佳満

下記の研究テーマの論文指導を行った。

1）佐藤 貴子：保健所保健師の市町村支援に対する役割認識と方法論
—地域保健法施行以降に焦点をあてて—
2）首藤 佐織：職員の抑うつ傾向と職域特性を含む要因との関連性
3）高橋 優子：慢性疾患をもつ脊椎手術患者の術後合併症状のデータ分析
—全身状態を捉え、観察能力を向上させるために—
4）深野 久美：ライフステージ別にみた病院で働く看護師の組織コミットメント、職務関与および職業キャリア成熟度の特性
5）渡邉 薫：中小規模病院における中堅看護師の学習ニードの分析
6）川上 慶子：海外で就業する日本人の健康を支援する看護職者の役割と求められる能力

92）　課題研究（助産学）

通年

主指導教員：梅野 貴恵、佐伯 圭一郎
副指導教員：石岡 洋子、稲垣 敦、赤星 琴美、小嶋 光明 、樋口 幸、伊東 朋子

下記の研究テーマの論文指導を行った。

1）種　恵理子：Ａ大学医学生と看護学生の出産についての認識に関する研究
2）相良 実香：月の満ち欠け・潮の満ち引きと分娩の関係
3）三ツ井 理恵：高校生のライフプランにおける妊娠・出産への考えに関連する背景についての調査

３－８－２　博士（後期）課程

１）　健康増進科学特論

３年次通年

安部 眞佐子、稲垣 敦

学生の作成している論文の高齢者の低栄養に関する分野で、運動に関する論文と栄養に関する論文を選択して複数読み、レビューとしてまとめた。

２）　保健情報科学特論

１年次前期

佐伯 圭一郎、野津 昭文、品川 佳満

生物統計学を中心に疫学・情報処理について、自己の研究を遂行する能力を高めるべく、履修者の研究課題に基づいて学習を進めた。受講者が１名であったため、マンツーマン形式で演習を含んだ内容であった。

３）　精神保健学特論

１年次後期

影山 隆之

精神健康原論、産業メンタルヘルス、および自殺予防論を主なテーマとして、セミナー形式で行った。

４）　看護基礎科学演習

１−３年次後期

甲斐 倫明、市瀬 孝道、安部 眞佐子、稲垣 敦、佐伯 圭一郎、影山 隆之、吉村 匠平

チュートリアル方式で、各分野の教員が課題あるいは論文を与え、レポートあるいは課題に対するプレゼンを行うことで実施し討論を行った。

５）　生活支援看護学特論

１年次前期

藤内 美保、村嶋 幸代、伊東 朋子

オムニバス方式であり、生活援助に関する視点、援助技術の検証に関する視点、地域で生活する健康保持増進のための生活支援の３つの視点と博士論文のテーマに関するものと関連づけ、看護実践に必要とされる理論的枠組み、生活支援の在り方を理論展開できるための文献検索およびまとめを行った。最後に、3名の教員と学生とのディスカッションを行った。学生は、博士論文のベースとなる理論枠組みを探求することで、博士テーマに関する知識や考え方が深まっている。

６）　看護管理学特論

１年次後期

桜井 礼子、福田 広美

保健医療福祉に関する制度と組織、看護管理の基本となる理論、具体的な管理プロセス、質の高い看護サービス提供のために看護組織が備えるべき機能、および看護管理者に求められる能力等について概要を講義した。さらに、個々の学生がこれまでの看護職としての経験や研究を通して、それぞれ関心のある課題を選択、文献等を用いて看護管理の視点から問題点および対応策等をまとめ、プレゼンテーションとディスカッションを行った。最終レポートでは、これまで看護管理についての関心やこれまでになかった視点などが得られたと考える。

７）　国際看護学特論

１年次後期

崔 明愛、桑野 紀子

This course provided students with advanced knowledge of international and transcultural nursing. This course was to prepare students to analyze global health and nursing issues.

The contents could be foundation of nursing research on international and transcultural nursing and designing a study to generate evidences for international and transcultural nursing.

In this course, students presented some theme which is related to international nursing based on their interests. In the presentation, we had discussion with the attendance. Through this process, students might deepen their insight about international and transcultural nursing.

８） 看護専門科学演習

２年次後期後半

藤内 美保、小野 美喜、林 猪都子、福田 広美、佐藤 玉枝、高野 政子

学内演習を通して、患者のアセスメント、患者ニーズの把握方法とニーズに応じた生活援助の在り方について教授した。学生は自己の課題に添った事例について、レポートした。提出されたレポートで評価した。

９） 放射線健康科学特別演習

１～３年次後期

甲斐 倫明、小嶋 光明

医療放射線被は゛くの評価方法おび健康影響推定に関する英語論文資料を抄読することで、論文ごとに解説する方式で行った。また、PHITSコードを用いたモンテカルロシミュレーションによる計算演習を行った。取り上げたテーマは次の通りであ る。1) CT検査における患者ごとの線量推定（WAZA-ARI)、2)放射線治療に伴う二次か゛んに関する米国における前向きコホート調査、3)肺がんCTスクリーニン グ、4) CT被ばくの疫学調査結果(英国) 、5) CT被ばくの疫学調査結果(オーストラリア、台湾)、6) 皮膚表面細胞の線量分布についてのモンテカルロシミュレーション、7) 陽子線治療によるビームラインのモンテカルロシミュレーション

10） 健康情報科学特別演習

２年次通年

佐伯 圭一郎、品川 佳満、野津 昭文

１名の履修者に対し、履修者の研究テーマに対応する形で演習を行った。
特に、コンピュータ・シミュレーション高速化のため、複数コンピュータを連携させて演算するグリッド・コンピューティング環境を構築する課題を中心に実施した。

11） 環境健康科学特論Ⅱ

１年次前期

市瀬 孝道、吉田 成一

環境中に存在する各種要因の生体影響に関する論文レビューを通し、健康影響研究についての講義を行った。

12） メンタルヘルス特論Ⅱ

１年次前期

影山 隆之

研究に関連する文献のクリティカルレビューを通して、精神保健看護学の研究方法論について演習討論を行った。

13)　特別研究（看護学専攻）

通年

指導教員：影山 隆之
副指導教員：伊東 朋子、関根 剛

博士論文の指導は、指導教員による個別指導と、研究計画報告会および研究中間報告会での全教員が関わる討論によって、研究方法、結果の分析およぶ考察などの各指導が進められた。
下記の論文は論文審査会を経て学位審査に合格し、博士（看護学）が授与された研究である。

三ケ田 暢美：認知症をもつ人の特性を活かした構造化によるBPSD軽減の有効性
－TEACCHプログラムにおける構造化を応用して－
赤星 琴美：「特定健康診査・特定保健指導」における特定保健指導の対象除外者の実態に関する調査研究
杉本 圭以子：救急医療機関の看護師による自殺未遂者の再企図リスクアセスメントに関する研究
－再企図防止のケアに向けた組織としての準備に着目して

14)　特別研究（健康科学専攻）

通年

指導教員：甲斐 倫明
副指導教員：小嶋 光明

博士論文の指導は、指導教員による個別指導と、研究計画報告会および研究中間報告会での全教員が関わる討論によって、研究方法、結果の分析およぶ考察などの各指導が進められた。
下記の論文は論文審査会を経て学位審査に合格し、博士（健康科学）が授与された研究である。

亀井 修 ： CT検査における個人の体型を反映した被ばく線量評価法の開発

３－９　ボランティア活動

１）　日本ALS協会大分県支部総会

伊東 朋子
１年次生：中川 穂南
２年次生：佐藤 悠里

第20回日本ALS協会大分県支部総会、患者・家族のつどい(平成26年５月18日)に参加した。学生は会場設営に始まり、受付、患者移送や物品販売、司会補助などを支部運営委員のメンバーとともに協同して行い、患者とも交流しながら、総会運営に貢献した。今年度は大学院生、４年次学生など、ALSに興味と関心のある学生も参加し、会の運営に寄与した。

２）　コロニー久住「第38回収穫祭」

伊東 朋子
１年次生：朝来野 瞳、天野 佑香、荒牧 未歩、大畑 杏奈、長船 百恵、甲斐 瑞希、川野 奈津貴、
木村 朱里、栗山 亜梨紗、仲道 智子、成安 莉歩、野田 優奈、森 さくら、
吉田 あかね、米原 聖佳

11月１日　福祉農場コロニー久住にて、第38回収穫祭が行われ、ボランティア活動の要請があり15名の学生が参加した。障がい者の付き添い、模擬店販売補助などを行い、障がい者、保護者の方とも交流した。

３）　第29回Young Wing Summer Camp

高野 政子、足立 綾
４年次生：秋田 沙也加
３年次生：中尾 祥吾、中村 実咲、深水 志帆

サマーキャンプは糖尿病をもつ子どもとその保護者を対象とするキャンプで、学生は他の大分大学教育学部、医学部、別府女子短期大学等の学生や医師、看護師等と協動して運営に参加した。
キャンプの活動は、同じ病気をもつ子どもの仲間つくりや、病気の正しい理解や自信を持たせるという目的がある。この目的を達成するために、学生は５月から、８回の事前ミーティングをもち企画や役割を担い、８月７日～12日まで活動を支援した。教員は全体会議に参加し、キャンプにも1日参加して学生を支援した。

４）　大分県立新生支援学校「運動会」

平野 亙
１年次生：10名

大分県立新生支援学校の「運動会」（5/24）で進行補助を担当した。

５）　寿志の里「七夕祭り」

河野 梢子
３年次生：７名

寿志の里の「七夕祭り」（7/17）で、入所者の移送、屋台、TAKIOソーラン踊り等を行った。

６）　九重町「くじゅう山開き」

稲垣 敦、桜井 礼子
１年次生：６名、大学院生：１名

九重町主催の「くじゅう山開き」（6/1）において、牧ノ戸登山口で健康チェックを行なった。

７）　富士見が丘団地「夏祭り」

宮内 信治
１年次生：17名

トキハインダストリー富士見が丘店周辺で開催された富士見が丘団地「夏祭り」（８/23-24）で、会場設営、盆踊り、屋台、各種イベント参加を行った。

８）　大分県こころとからだの相談支援センター「大分アディクションフォーラム」

影山 隆之
１年次生：4名

別府中央公民館で開催された大分県こころとからだの相談支援センター主催の「大分アディクションフォーラム」で、各種依存症の自助グループ紹介の企画あるいは当日運営を担当した。

９）　大分県チャレンジ検定

４年次生：大石 梨紗、地本 里美、下迫 絵里、森原 慎大、加藤 亮介

大分県教育委員会特別支援課が本年度開始した、特別支援学校の生徒を対象にした生活面の能力をチャレンジ検定という試験を行うために学生がボランティア参加した。

受付や生徒の誘導、安全確認などをボランチィア活動した。大変貴重な経験をさせて頂き、特別支援課からは本学学生の支援や態度を高く評価された。

10）　大分県スポーツ学会「第6回学術大会」

稲垣 敦、桜井 礼子、小山 珠美、河野 梢子
１年次生：14名

ホルトホール大分で開催された大分県スポーツ学会「第6回学術大会」（12/23）で、参加者および施設利用者の健康・体力チェックを行った。

11）　大分県こころとからだの相談支援センター「こころとからだの健康フェスティバル」

平野 亙
１年次生：12名

大分県こころとからだの相談支援センター主催の「こころとからだの健康フェスティバル」（11/２）で、総合案内、放送、記録、イベントの司会・進行、着ぐるみ、駐車場、スポーツ体験の補助等を行った。

12）　野津原町商工会「ななせの里まつり」

広報委員会、河野 梢子
１年次生：16名

みどりマザーランドで開催された野津原町商工会主催「ななせの里まつり」（11/２）で、参加者の健康チェック、大学紹介展示、イベント参加を行った。

13）　富士見が丘団地連合自治会「体育祭」

稲垣 敦、桜井 礼子、小山 珠美
１年次生：22名

横瀬小学校で開催された富士見が丘団地連合自治会主催の体育祭（10/26）で、健康チェック、イベント補助、イベント参加を行なった。

14）　富士見が丘団地連合自治会「文化祭」

宮内 信治
１年次生：15名

富士見が丘団地連合自治会主催の「文化祭」（11/15-16）で、町中ギャラリーの手伝いを行った。

15)　大分市「森林セラピートレイルランニング大会」救護班

稲垣 敦、巻野 雄介、田中 佳子
１年次生：３名

大分県県民の森「平成森林公園」で開催された大分市主催「森林セラピートレイルランニング大会」（３/16）で救護班を務めた。

16)　大分トリニータホームゲーム「健康・体力チェック」

稲垣 敦、桜井 礼子
４年次生：11名

大銀ドームで開催された大分トリニータホームゲーム（９/20）で観客の健康・体力チェックを行った。

17)　あいネットワーク大分「音楽会」

伊東 朋子、
１年次生：田那部 楓、西野 あやめ、東 真由、大畠 夕奈、 高木 優衣

iichiko総合文化センターで開催されたあいネットワーク大分の「音楽会」（２/22)で、知的障害者の付き添いや介助等を行った。

18)　富士見が丘連合自治会「森林探検ウォーキング」

稲垣 敦
１年次生：27名

富士見が丘団地周辺で開催された富士見が丘連合自治会主催の「森林探検ウォーキング」（３/28）で、参加者の血圧測定を行い、ウォーキングに参加した。

19)　セントポルタ中央商店街「まちなか健康おせったい」

稲垣 敦、巻野 雄介、田中 佳子
４年次生：２名、２年次生：３名

セントポルタ中央商店街振興組合主催の敬老の日イベント「まちなか健康おせったい」（９/15）で、トキハインダストリー若草公園店前において、65歳以上の高齢者に健康チェックを行なった。

20)　大分空港「健康・体力チェック」

稲垣 敦、小山 珠美
４年生：23名

大分空港で空港利用者および空港スタッフを対象に健康・体力チェックを行った（10/11）。

21)　大分空港「健康・体力チェック」

稲垣 敦、赤星 琴美
４年生：23名

大分空港で空港利用者および空港スタッフを対象に健康・体力チェックを行った（11/15）。

22）　大分市「森林セラピートレイルランニング大会」健康チェック

稲垣 敦、田中 佳子、巻野 雄介
１年次生：３名

大分県県民の森「平成森林公園」特設クローバーコースで開催された大分市主催「森林セラピートレイルランニング大会」（３/16）で健康チェックを実施した。

23）　福祉農場コロニー久住「盆踊り大会」

伊東 朋子
１年次生：足立 梨紗、荒牧 未歩、木本 真子、東 真由、宮子 朱音、副田　拓希

８月23日（土）大分市野田にある第一博愛寮で福祉農場コロニー久住主催の「盆踊り大会」が開催され、障害者の補助、模擬店での物品販売などのボランティア活動を行った。

24）　福祉農場コロニー久住「運動会」

伊東 朋子
１年次生：生田 有紗、石原 百恵、大畑 杏奈、岡田 愛美、吉田 あかね

10月４日（土）に大分市野田の第一博愛寮において福祉農場コロニー久住主催の「運動会」が行われ、障がい者の誘導や運動会の運営補助等を行った。

４　学内セミナー

４－１　CALL英語学習システム講座

CALLシステムについて、授業での取り組みを将来看護の道を目指す多くの学生に知ってもらうため、７月22日（日）のオープンキャンパスにて、午前・午後１セッションずつ合計２回の模擬授業を実施した。参加した学生や保護者の方々に、実際にCALLシステムを体験してもらい、授業への理解を深めてもらった。

５　学内プロジェクト研究

５－１　プライマリケア領域の特定看護師のアウトカム指標開発のための基礎的研究

研究者　藤内 美保、石田 佳代子、江月 優子、小野 美喜、甲斐 倫明、草野 淳子、
佐伯 圭一郎、桜井 礼子、高野 政子、福田 広美、松本 初美、宮内 信治、
村嶋 幸代

「特定行為にかかる看護師の研修制度」が創設されたが、本制度が米国のNPのように大学院教育へと進化していくためには、大学院NP教育修了者（以下、特定看護師）の活動の効果を客観的かつ多角的視点から示していくことが重要である。本学が養成するプライマリケア領域の特定看護師は、在宅や病院、老人保健施設、診療所、重症心身障がい児施設などで活動し、効果が現れはじめている。

日本独自の制度の中で、特定看護師がどのような役割をもち、どのようなアウトカムを導いているのか、また、特定看護師の活動の場による役割やアウトカムを導き、共通性や特徴を明らかにし、プライマリケア領域の特定看護師のアウトカム指標開発のための基礎的指標を示すことが必要である。

在宅の特定看護師に関連した公表論文４件、研究者が入手できた論文３件の計７件の研究結果から、特定看護師の活動の特徴やアウトカムを抽出しコード化した。

その結果、114のコードが抽出され、このうち、特定看護師の活動や役割の特徴を示したコードは99件（86.8%）、患者、家族のアウトカムを示すコードは15件（13.2%）であった。在宅看護に従事する特定看護師の活動や役割を示したコードは約９割と多く、アウトカムを示したものは13%と少なく、患者と家族に限られている。今後は、患者・家族・施設・地域の視点からのアウトカムを見出す研究が求められる。

５－２　健康増進プロジェクト

研究者　稲垣 敦、桜井 礼子、小山 珠美、赤星 琴美、佐藤 愛、河野 梢子、田中 佳子、
秦 さと子、巻野 雄介、河野 優子、植田 みゆき、安部 真紀

1. 大分県姫島村住民の健康寿命と運動機能

対象者は、姫島村在住の65歳以上の男性90名（71.1±5.2歳）、女性102名（70.8±4.6歳）であった。対象者には運動機能測定時に生活習慣に関する質問紙調査を実施し、また、このうち41名はライフコーダ（スズケン）を4週間装着し、歩数、身体活動量、運動強度を計測した。65～74歳では、1日の歩数は、男性8058歩（全国6703歩）、女性8516歩（同5705歩）と全国値（平成22年国民健康・栄養調査）よりも高く、女性では有意差が認められた。身体活動時間は、男性83.9分/日、女性91.3分/日であり、健康づくりのための身体活動基準2013（厚生労働省）の目標値40分/日を大きく上回っていた。また、身体活動量は、男性11.2EX/週、女性10.0EX/週であり、同目標値10EX前後であった。運動習慣を有する者の割合は、男性52.5％（全国52.3％）、女性39.2％（同43.6％）であった。自転車を毎日利用する者の割合は、男性32.8％、女性63.9％であり、全国値（10～35％）と比べると特に女性で高かった。姫島村の高齢者は、一日の歩数が多く、自転車利用頻度が高く、身体活動時間も長いことが示唆され、これらが歩行能力を高く維持し、活動範囲を広め、様々な家事や仕事に取り組んだり、地域活動への参加を増やし、コミュニケーションも促進されること等が健康寿命の延伸に寄与していると推測される。また、これらには、温暖で、狭く、平地が多いことや自動車の少ないこと等、姫島村の自然環境が関与していると考えられる。

2. エネルギー消費量のわかる街づくり

被験者である女性１名が呼気ガス代謝測定システムK4b2を装着して、大分市街地を歩行し、歩行中の心拍数、酸素摂取量、二酸化炭素排出量を測定した。このデータからMets、エネルギー消費量を算出した。これらの結果は、大分市街地の歩道18箇所の路面に表示した。

3. 通学手段が大学生の心身に及ぼす影響

本研究では、通学手段が大学生の心身および生活に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。大学看護学部の4年生男子8名、女子74名の合計82名に、通学によると考えられる身体的影響、心理的影響および生活への影響を問う自由記述式の質問紙調査を実施し、回収後項目化し、各項目に当てはまる程度を6段階で問う質問紙調査を同じ被験者に実施した。一次調査の回収率は63.4％(52件)で78項目が得られ、二次調査の回収率は71.1％(59件)であった。各項目にあてはまる程度を従属変数、各通学手段の時間を独立変数とした重回帰分析の標準偏回帰係数より、徒歩や自転車による通学で「気分転換になる」、「脚の筋力が強くなった」、「緊張する」(-)、「持久力がついた」等身体的および心理的健康効果が認められ、反対に自動車・運転では、「腰痛になった」、「肩がこる」、「目が悪くなった」、「運動不足になった」、「脚の筋力が強くなった」(-)、「持久力がついた」（-）のように健康には望ましくない影響が認められた。したがって、徒歩や自転車通学には身体的および心理的健康に良い影響があり、自動車通学には悪い影響のある可能性が示唆された。また、徒歩では「朝食は毎日欠かさず食べるようになった」（-）、自動車・運転では「外食の頻度が増えた」、「時間を有効に使えるようになった」、「ものごとを考える時間が増えた」、バスでは「起床時間が早くなった」、「生活が規則的になった」、「ファッションを気にするようになった」、「スマホの利用が増えた」等、生活にも交通手段が影響していた。

4. 森林浴の視力回復効果

本研究は、森林浴のリラックス効果と遠くを見つめる行為の相乗効果による視力回復効果を検討することを目的とした。被験者は裸眼視力0.5以下の19～24歳の男子大学生4名で、大分県竹田市久住町のくじゅう法華院キャンプ場で６日間幕営し、日中は遠くにある森林を眺めることを意識した。実験開始前後に裸眼静止視力及び動体視力をAS-4F（Kowa）を用いて測定した結果、静止視力は登山前0.43±0.19、下山直後0.45±0.17、下山1日後から3日後は0.50±0.17であり、登山前と比較して有意差は認められなかったが、被験者4名中3名が0.1改善した。動体視力は登山前0.18±0.083、下山直後0.33±0.18、下山1日後か3日後は0.33±0.18で有意差は認められなかったが、被験者4名中3名が改善した。静止視力および動体視力の有意な改善は認められなかったが、4名中3名は改善し、3日間持続した。有意差は認められなかったが、遠方視および遠景視と近景視の反復により毛様体筋が弛緩して眼精疲労が回復した可能性がある。また、森林浴により自律神経活動のバランスが改善されて調節機能が高まり、視力が改善した可能性も否定できない。一方で、被験者4名中3名で視力値の向上が3日間継続したことから、単なる眼精疲労の回復ではなく、視力の改善である可能性もあり、今後、被験者を増やした長期的な研究が必要である。

６　先端研究

６－１　医療的ケアを必要とする在宅障害児の母親の看護力形成を図るプロセス

研究者　草野 淳子、高野 政子、足立 綾

平成25年「小児等在宅医療連携拠点事業」により、小児の在宅医療に取り組む医療機関、訪問看護事業所等の拡充が図られている。訪問看護を受ける在宅療養児は増加しているが、訪問看護は十分に普及しているとは言い難い。本研究の目的は、全国の在宅療養児への訪問看護師の介入に対する母親の認識を明らかにすることである。調査は平成26年9月～12月に無記名の自記式質問紙法で実施した。対象者は全国の訪問看護を利用する在宅療養児の母親とした。質問紙は1740部配布し、207部の回答が得られ、205部を分析した（有効回答率11.8%）。訪問看護を利用している在宅療養児は5歳以下の乳幼児が多く、医療依存度が高かった。先行研究では呼吸器系疾患はわずか1割弱であったが、本研究では呼吸器系疾患の在宅療養児は3割強に増加していた。在宅療養児に頻回な訪問看護を行い、医療的ケアや清潔、排泄援助などの日常的な生活援助を行うことで母親のケア負担を軽減できていた。

６－２　母親の年齢がこどもの食物アレルギー発症に及ぼす影響について

研究者　安部 眞佐子

大分市で1歳6ヶ月健診の健康診査票と共にアンケート用紙を郵送し、2014年と2015年1～8月に健診会場で回収した。母親が妊娠中に葉酸を摂取した場合を葉酸摂取ありとした。児の食物アレルギーは、医師に食物アレルギーを受けた場合をありとした。男女児共に30歳以下よりも30歳以上の母親から産まれた場合、食物アレルギーの発症率は少し低下する。出生順位別の葉酸摂取効果に有意差はなかった。女児では母親31歳以上では葉酸摂取ありで有意に食物アレルギー発症率が高く（p＝0.01）、男児では30歳以下が葉酸摂取ありの発症率が高かったが、p＝0.051と有意にはならなかった。

６－３　慢性腎臓病骨ミネラル代謝（CKD-MBD)における骨細胞機能の役割

研究者　岩崎 香子、友 あすか、利光 咲樹、丸山 徹、高垣 裕子

新たな国民病である慢性腎臓病（CKD)の主な合併症である骨ミネラル代謝異常（CKD-MBD)において骨細胞がどのように関与するかを初代培養骨細胞を用いて検討した。骨細胞はこれまで培養することが困難であるという理由から初代培養法が汎用されていなかったため、初代培養骨細胞を採取・培養するプロトコルを既報を改変することで確立した。その手法を用いてCKD環境の特徴である高リン環境について骨細胞変化を検討した。高リン環境では骨細胞の細胞機能が変化し、骨芽細胞機能を調節するホルモン産生が亢進していた。合わせてアポトーシス亢進による細胞死が誘導されることが確認された。

７　奨励研究

７－１　マルチレベル構造方程式モデルとその応用

研究者　野津 昭文、石川 勝彦

構造方程式モデル（SEM）は構成概念と測定値を同時に考慮できる解析方法として，心理学研究に用いられている．また，マルチレベル分析はいくつかのグループが存在する場合にそれらを同時に解析する方法である．これらの二つの方法を組み合わせたのがマルチレベル構造方程式モデルである．この方法を使うことで，個人の属性を説明変数とし，それらの個人からなる複数の集団の属性を目的変数としてデータを解析することが可能となる．本研究ではマルチレベル構造方程式モデルを拡張して，例えば目的変数が複数ある場合などにも適用可能な方法を提案する．

７－２　放射線照射マウスの骨髄細胞における酸化ストレスの長期的フォローアップによる急性骨髄性白血病との関連分析

研究者　石川 純也、小嶋 光明、甲斐 倫明

放射線によりヒトに引き起こされる代表的ながんとして、急性骨髄性白血病（AML）が挙げられる。これまでにヒトのAMLのモデルマウスであるC3H/HeNJclマウスを用いた研究で、AMLの発症には、放射線照射後に約1-2年の潜伏期間と、2番染色体の欠失およびその対立する2番染色体上のSfpi1遺伝子の点突然変異が必須であることが分かってきている。しかし、これらの異常が生じる詳細なメカニズムは未だ明らかになっていない。そこで本研究では、放射線誘発急性骨髄性白血病の発症メカニズムを明らかにするための一環として、その発症に必須であるSfpi1遺伝子の点突然変異が、いつどのようにして生じるのか調べることを目的とした。

8週齢のオスのC3H/HeN Jclマウスを5匹ずつ、0 Gy、1 Gy、3 Gyの3群に分けてγ線を全身照射した。照射1、7、30、90、180、270、365日後に各群のマウスを屠殺し、個体ごとに大腿骨骨髄細胞を回収、さらに磁気ビーズ法を用いて造血幹/前駆細胞を単離し、生存率、活性酸素量、点突然変異発生頻度（8-OHdGを指標）の変化について解析する。現在、照射後30日目までのデータが解析されている。

生存率は0 Gy群の細胞数を1としたときに、3 Gy群では照射後1日目に0.27±0.05まで減少した。その後は増加傾向を示し、照射後30日目には0.87±0.12まで回復した。1 Gy群では照射後7日目に0.73±0.35まで減少し、30日目には0.77±0.32まで増加した。照射後30日目までは、いずれの群も0 Gy群にまで回復はしなかった。

活性酸素種量は3 Gy群では照射後1日目および7日目において0 Gy群より高い値を示し、30日目には0 Gy群と同等レベルとなった。照射後1日目は生存率が劇的に減少し、7日目は生存率の増加傾向を示した時期である。活性酸素種は細胞分裂に伴って精製される。よって3 Gy群に見られた活性酸素種量の経時的変化は、減少した細胞数を補うための細胞分裂を反映しているのではないかと考えられた。1 Gy群でも似たような傾向が見られている。

点突然変異発生頻度は1 Gy群および3 Gy群ともに照射後1、7日目では変化が見られなかったが、30日目にかけて増加傾向を示した。8-OHdGは活性酸素種によって生成される。よって、放射線照射後の造血幹/前駆細胞の細胞動態変化が活性酸素種を発生し、点突突然変異を引き起こす可能性が考えられた。

７－３　ワクチン同時接種に対する乳幼児の保護者の意識調査

研究者　足立 綾、高野 政子、草野 淳子

ワクチン同時接種に対する乳幼児の予防接種の実態と、同時接種に対する保護者の意識を明らかにすることを目的として、Ａ市の認可保育所に在籍する乳幼児の保護者1027名を対象に自記式質問紙調査を実施した。回収数610部のうち583部（有効回答率56.8%）を分析した。平均年齢は35.6±4.75歳で、母親565名（96.9%）であった。定期接種の実施ありは567名（97.3%）で、任意接種の実施ありは492名（84.4%）であった。同時接種を知っているは485名（83.2%）であり、実施/予定ありは354名（73.0%）であった。40歳以上が30歳代と比較して同時接種を知っている割合が低く（$p<0.05$）、子どもの疾患有りが疾患無しよりも同時接種を知っている割合が高かった（$p<0.05$）。同時接種を行う理由は、かかりつけ医に勧められた155名（35.0%）が最も多く、行わない理由は、不安がある50名（23.8%）、安全性が確立されていない49名（23.3%）などであった。今回の調査では、同時接種を知っている保護者は全体の8割以上であったが、40歳以上の保護者は、同時接種を知らない割合が高く、同時接種に関する情報を得ていないと考える。同時接種の実施は医師の説明の有無が影響していることが確認された。医師や看護師は、同時接種のメリットやデメリットについて、保護者に十分な説明を行い、保護者の意思で同時接種を選択できるように支援することが重要であると考える。

７－４　胎脂過酸化脂質がヒト新生児表皮角化細胞に与える影響に関する評価法の確立

研究者　樋口 幸

近年、胎脂に含まれる有効成分を活かすため、早期新生児期に胎脂を温存するドライテクニックが導入されている。しかし実際に、胎脂を温存することが新生児の皮膚にどのような効果があるのか、詳細に検討したものはない。本研究では、過酸化水素を用いてヒト新生児皮膚角化細胞に与える酸化ストレス影響についての評価法を確立することを目的とした。

新生児由来ヒト新生児表皮角化細胞NHEK（NB）を用いて、過酸化水素を所定時間添加した後、細胞生存率と培養液中の炎症性サイトカイン（IL-1a、IL-８）の発現を解析し、試薬濃度と処理時間の検討を行った。

その結果、過酸化水素の処理時間は60分、サイトカインの発現については４時間後に評価を行うことが適切と判断した。今回、NHEK(NB)に過酸化水素を添加すると、濃度依存的に生細胞数が低下した。炎症性サイトカインについては、生細胞数の低下のない濃度（0.0001%）でIL-1aの増加がみられたものの、早期の酸化ストレスを評価することは難しく、標的炎症性サイトカインの検討を行っていく必要がある。

８　インターネットジャーナル「看護科学研究」

平成11年12月に「大分看護科学研究」として創刊し、平成17年に名称変更したインターネットジャーナル「看護科学研究」は、第12巻第２号が平成26年10月、第13巻第１号が平成27年１月に刊行された。刊行された論文と執筆要綱等は、本学ホームページ（http://www.oita-nhs.ac.jp/journal/index.html）に公開されており、誰でも無料で投稿、購読することができる。

第12巻第２号　目次

資料

「地域医療を担う病院に勤務する特定看護師の新たな実践に関する質的研究」

新川 結子、甲斐 かつ子、河野 優子、福田 広美、江月 優子、宮内 信治、小野 美喜、藤内 美保、村嶋 幸代

「保育所で発熱した乳幼児の保護者との対応の際の保育士の困難」

小代 仁美、高野 政子、山内 美奈子

＜企画＞

'Overview of nursing theory'

So Woo Lee

「看護理論の概要」

桑野 紀子

第13巻第１号　目次

研究報告

「大分県内における在宅療養児の訪問看護の実態と課題」

草野 淳子、高野 政子、下迫 絵梨、足立 綾

＜企画＞「大分県立看護科学大学 第15回看護国際フォーラム」

'Working with communities to promote health and wellbeing'

Karen Francis

「療養場所の円滑な移行に向けた退院支援方策の開発とその評価」

永田 智子

９　業績

著書

岩崎 香子、菅野 三喜男

新しい骨形態計測,ウィネット出版,新潟県,2014

岩崎 香子、大和 英之

Clinical Calcium,医薬ジャーナル,大阪府,2014

甲斐 倫明

ナースとコメディカルのための小児科学,日本小児医事出版社,東京,2014

甲斐 倫明

語りあうためのICRP 111 -ふるさとの暮らしと放射線防護,ICRP 111解説書編集委員会（編集),日本アイソトープ協会,東京,2015

影山 隆之

「看護師の交替勤務と健康リスク・医療安全」,睡眠マネジメント 産業衛生・疾病との関わりから最新改善対策まで,エヌ・ティー・エス,東京,2014

影山 隆之

中小企業のためのメンタルヘルス対策に関するガイドブック,大分県経営者協会,大分市,2014

影山 隆之

「コーピングの理論と応用」,ストレス学ハンドブック,丸山 総一郎(編),創元社,大阪,2015

影山 隆之

自殺　吉松 和哉、小泉 典章、川野 雅資 編 精神看護学Ⅰ 精神保健学 第6版 272-279, ヌーヴェルヒロカワ, 東京, 2015

平野 亙

看護倫理　よい看護・よい看護師への道しるべ　　改訂第２版,（編集 小西 恵美子）南江堂, 東京都, 2014

村嶋 幸代

標準理学療法学・作業療法学　老年学第４版（編集　大内尉義）, 医学書院, 東京都, 2014

赤星 琴美：地域住民の服薬状況に関する現状分析,保健の科学,56(4),281-286,2014

赤星 琴美：特定健診受診者の中の服薬中の対象者の病態および生活習慣,保健の科学,56(6),417-422,2014

石川 純也、小嶋 光明、甲斐 倫明：放射線による造血幹／前駆細胞の動態変化,放射線生物研究,49,127-140,2014

Fukushi Y, Yoshino H, Ishikawa J, Sagisaka M, Kashiwakura I, and Yoshizawa A. : (5) Effects of liquid crystallinity on anticancer activity of benzoate derivatives possessing a terminal hydroxyl group.,Liquid Crystals,41: 1873-1878,2014

Ren Y, Ichinose T, He M, Song Y, Yoshida Y, Yoshida S, Nishikawa M, Takano H, Sun G, Shibamoto T. ：Enhancement of OVA-induced murine lung eosinophilia by co-exposure to contamination levels of LPS in Asian sand dust and heated dust,Allergy Asthma Clin Immunol,10(1):30,2014

He M, Ichinose T, Liu B, Song Y, Yoshida Y, Kobayashi F, Maki T, Yoshida S, Nishikawa M, Takano H, Sun G. ：Silica-carrying particulate matter enhances Bjerkandera adusta-induced murine lung eosinophilia,Environ Toxicol,in press

Ren Y, Ichinose T, He M, Arashidani K, Yoshida Y, Yoshida S, Nishikawa M, Takano H, Sun G, Shibamoto T：Aggravation of ovalbumin-induced murine asthma by co-exposure to desert-dust and organic chemicals: an animal model study,Environ Health,13:83,2014

市瀬 孝道：3.大気汚染（PM2.5, 黄砂等）とアレルギーに関する研究の進展,アレルギー学会誌,63,8,1085-1094,2014

Mimura T, Ichinose T, Yamagami S, Fujishima H, Kamei Y, Goto M, Takada S, Matsubara M：Airborne particulate matter (PM2.5) and the prevalence of allergic conjunctivitis in Japan,Sci Total Environ,487:493-499,2014

石川 雄一、矢野 亮太、宮島 詩織、北岡 賢、信岡 かおる、市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里、長谷部 建美：ゆず果皮親油性成分の抗アレルギー能とゆず果皮を活用した健康食品の商品化ーその２,アレルギーの臨床,34(5), 69-75.,2014

土橋 仁美、松成 裕子、伊東 朋子：看護師の放射線に関する看護基礎教育が看護業務に及ぼす影響,鹿児島大学医学部保健学科紀要,25(1):31-38,2015

Kamei O, Ojima M, Yoshitake T, Ono K, Nishijima N, Kai M：Calculating Patient-specific Organ Doses from Adult Body CT Scans by Monte Carlo Analysis Using Male-Individual Voxel Phantoms,Health Physics,108(1),44-52,2015

Ojima M, Ito M, Suzuki K, Kai M.：Unstable chromosome aberrations do not accumulate in normal human fibroblast after fractionated x-irradiation.,PloS One,10, e0116645,2015

森 幹雄　小野 美喜：特別養護老人ホームで働く看護職の専門職的自律性に寄与する要因,日本看護倫理学会誌,6(1),46-52,2014

Ono M, Miyauchi S, Edzuki Y, Saiki K, Fukuda H, Tonai M, Magilvy JK, Murashima S. : Japanese nurse practitioner practice and outcomes in a nursing home,International Nursing Review,62(2),275-279,2014

Kuwano S, Yano T, Kageyama T, Sueoka S, Tachibana H：Social survey on wind turbine noise in Japan,Noise Control Engineering Journal,62(6),503-520,2014

草野 淳子、高野 政子：子育て中の看護師の復職プロセスと対策に関する文献的研究-ワークライフバランスに着目して-,第44回（平成25年度）日本看護学会論文集　総合看護,2014

草野 淳子、高野 政子、下迫 絵梨、足立 綾：大分県内における在宅療養児の訪問看護の実態と課題,看護科学研究,13(1),76-83,2015

草野 淳子：NICUに入院した子どもの母親の愛着形成のプロセスと看護介入に関する国内文献レビュー,母性衛生,55(2),502-509,2014

Kuwano N, Fukuda H, Murashima S：Factors affecting professional autonomy of Japanese nurses caring for culturally and linguistically diverse patients in a hospital setting in Japan,Journal of Transcultural Nursing,in press

新川 結子、甲斐 かつ子、河野 優子、福田 広美、江月 優子、宮内 信治、小野 美喜、藤内 美保、村嶋 幸代：地域医療を担う病院に勤務する特定看護師の新たな実践に関する質的研究,看護科学研究,12(2),44-52,2014

光永 悠彦、柳井 晴夫、西川 浩昭、佐伯 圭一郎、亀井 智子、松谷 美和子、奥 裕美、村井 英治：複数の分野から構成されるテストにおけるIRTを用いた項目評価法 ： 臨地実習適正化のための看護系大学共用試験の項目バンク構築,行動計量学,41(1),17-34,2014

Sadakane K, Ichinose T：Effect of the hand antiseptic agents benzalkonium chloride, povidone-iodine, ethanol, and chlorhexidine gluconate on atopic dermatitis in NC/Nga mice.,Int J Med Sci,12(2),116-125,2015

定金 香里、市瀬 孝道、高野 裕久、柳澤 利枝、小池 英子：アトピー性皮膚炎モデルマウスに対するビスフェノールA経口曝露の影響,日本職業・環境アレルギー学会雑誌,21(2),73-81,2014

品川 佳満、橋本 勇人：医療機関における患者の個人情報に関する事故の現状― 電子媒体が関係したケースの分析 ―,医療情報学,24(1),103-109,2014

品川 佳満、橋本 勇人：医療機関における患者情報の取り扱い事故に関する経年変化― 個人情報保護法制定後10年間の分析 ―,川崎医療福祉学会誌,24(1),103-109,2014

秦 さと子、藤田 英恵、伊東 朋子：高齢者と若年者との夜間睡眠中の嚥下頻度、覚醒時の唾液分泌量および嚥下反射との関係,日本摂食・嚥下リハビリテーション学会雑誌,19(1),2015

杉本 圭以子：自殺未遂者へ救急看護師が行う心理社会的ケアおよびその実施に影響を与える要因についての文献検討,こころの健康,29(2),49-58,2014

乾 つぶら、林 猪都子、猪俣 理恵：妊婦健康診査・分娩施設までの所要時間と施設の選択・転院理由,日本母子看護学会誌,8(2),53-58,2015.02

乾 つぶら、島田 三恵子、林 猪都子、猪俣 理恵、坂口 隆之：分娩施設の選択理由と転院理由に関する調査研究,周産期医学,45(3),237-241,2015

Choe MA, Kim NC, Kim KM, Kim SJ, Park KS, Byeon YS, Shin SR, Yang S, Lee KS, Lee EH, Lee IS, Lee TW, Cho MO, Kim JH：Trends in nursing research in Korea: Research trends for studies published from the inaugural issues to 2010 in the Journal of Korean Academy of Nursing and the Journals published by member societies under Korean Academy of Nursing Science,Journal of Korean Academy of Nursing,44(5),484-494

Kim Ji, Choe MA. : Effects of antioxidant on reduction of hindlimb muscle atrophy induced by cisplatin in rats, Journal of Korean Academy of Nursing, 44 (4), 2014

Fukuda H, Miyauchi S, Tonai M, Ono M, Magilvy JK, Murashima S : The first nurse practitioner graduate programme in Japan, International Nursing Review, 61(4), 487-490, 2014

宮内 信治 : Pitch movements influential to listeners in the discourse of Sense and Sensibility, 日本英語音声学会　学術論文集　「英語音声学」, 19, 161-170, 2014

宮内 信治 : 地域医療を担う病院に勤務する特定看護師の新たな実践に関する質的研究, 看護科学研究, 12, 44-52, 2014

A. Taguchi, T. Naruse, Y. Kuwahara, A. Matsunaga, S. Nagata, S. Murashima. : Characteristics of Clients Using Home Visiting Nursing Services at Nighttime and Early Morning in Japan: Focusing on Clients' Cancellation of Services of Visiting Nurses at Nighttime and Early Morning., Home Health Care Management & Practice, 26(4), 250-256, 2014

MJ. Kim, CG. Park, H. McKenna, S. Ketefian, SH. Park, H. Klopper, H. Lee, W. Kunaviktikul, MF. Gregg, J. Daly, S. Coetzee, P. Juntasopeepun, S. Murashima : Quality of nursing doctoral education in seven countries: survey of faculty and students/graduates, Journal of Advanced Nursing, 71(5), 1098-1109, 2015

山居 優子、永田 智子、小倉 朗子、中山 優季、村嶋 幸代 : 筋萎縮性側索硬化症患者の胃瘻造設術実施時期に影響する要因－情報提供のされ方と患者・家族の受け止めに焦点を当てて－, 日本難病看護学会誌, 19(2)、163-173, 2014

有本 梓、岩﨑 りほ、村嶋 幸代、田高 悦子 : １歳６か月児の母親における保健センターへの相談の希望と経験に関連する要因の検討, 横浜看護学雑誌, 8(1), 2015

M. Matsuzaki, M. Haruna, E. Ota, R. Murayama, T. Yamaguchi, I. Shioji, S.Sasaki, T. Yamaguchi, S. Murashima : Effects of lifestyle factors on urinary oxidative stress and serum antioxidant markers in pregnant Japanese women: A cohort study., BioScience Trends, 8 (3), 176-184, 2014

K. Naito, A. Notsu, J. Udagawa and H. Otani : Statistical analysis with dilatation for development process of human fetuses, Statistical Methods in Medical Research, July, 22, 2014

その他の論文

岩崎 香子、風間 順一郎、松垣 あいら、中野 貴由、深川 雅史：慢性腎臓病における骨脆弱性には骨密度変化よりもむしろ材質特性が関与する,Osteoprosis Japan ,22(2),2014

小野 美喜：プライマリケア領域における大学院修士課程での特定看護師の養成教育,保健の科学,56(4),261-265,2014

影山 隆之：教育には何ができるのか？子どもの自殺を考える,保健,43(9),34-37,2014

影山 隆之：自殺予防とメンタルヘルスリテラシーのための教育プログラム,東書Eネット,,2014

藤内 美保：フィジカルアセスメントの教え方　正常・異常、重症・緊急性の判断を行うためのアセスメント力の育て方,看護人材育成,11(1),56-63,2014

藤内 美保、前原 彩乃：業務試行事業におけるプライマリケア領域の事業対象看護師の役割と効果,看護,66(6),100-105,2014

藤内 美保、戸高 愛、山田功：看護師の高度な臨床実践能力の評価および向上に関する研究　-看護師の高度な臨床実践能力修得・維持・向上のための研修プログラムを目指して-,平成25年度　総括分担研究報告書　厚生労働科学研究費補助金　地域医療基盤開発推進研究事業報告書,2014

平野 亙：患者安全、そして失敗から学ぶ医療,記念樹,108,3,2014

宮内 信治：変化する看護教育の趨勢と英語教育,英研大分,50,2014

村嶋幸代、藤内修二：分担研究報告　住民組織育成・支援・協働にかかる人材育成について,厚生労働科学研究費補助金 健康安全・危機管理対策総合研究事業「地域保健対策におけるソーシャルキャピタルの活用のあり方に関する研究」平成25年度総括・分担研究報告書,62-68,2014

村嶋 幸代：音楽療法を知るーその理論と技法ー（宮本啓子, 二俣泉　編著　杏林書院）に対する書評,保健の科学,56(7),481,2014

村嶋 幸代：患者の目線　医療関係者が患者・家族になってわかったこと（村上紀美子 編）に対する書評,保健師ジャーナル,70(12),1109,2014

村嶋 幸代、尾崎 章子、岸 恵美子、祖父江 育子、宮本 千津子、吉田 澄恵、和住 淑子、赤星 琴美：看護基礎教育課程における地域志向のケア教育強化に向けた取り組みに関する研究ー現状と課題ー,日本看護系大学協議会 平成26年度活動報告書,33-46,2015

学術講演等

市瀬 孝道：煙霧（黄砂を含む）などの越境粒子状物質PM2.5が健康に与える影響,第45回日本職業・環境アレルギー学会、基調講演,福岡県,2014.6

市瀬 孝道、He Mia、吉田 安広、嵐谷 奎一、吉田 成一、高野 裕久：黄砂のアレルギー性気道炎症増悪メカニズム,第55回大気環境学会、シンポジウム,愛媛県,2014.9

市瀬 孝道、He Miao、嵐谷 奎一：大気中の粒子状物質による肺の炎症と気管支喘息増悪作用 −微生物成分との関わり−,第9回バイオエアロゾル・シンポジウム,別府市,2015.1

吉田 安宏、宋 媛、何 翠頴、嵐谷 奎一、市瀬 孝道：黄砂とPM2.5免疫応答の差異と微生物成分の関与に関する研究,第９回大気バイオエアロゾル・シンポジウム,別府市,2015.1

稲垣 敦：本学会の求められる社会的使命とは：県民のスポーツ文化醸成に向けて,大分県スポーツ学会第４回フォーラム,大分市,2014.6

稲垣 敦：測定評価学および学会の展望,日本体育測定評価学会第14回大会シンポジウム,石川県,2015.2

稲垣 敦、桜井 礼子：体力を考える：スポーツ、教育、健康の視点から,大分県スポーツ学会第６回学術集会シンポジウム,大分市,2014.12

稲垣 敦：統計相談,日本体育学会第65大会,岩手県,2014.8

岩崎 香子、風間 順一郎、深川 雅史：CKD易骨折性には尿毒症による骨組成変化が関与する,第25回日本腎性骨症研究会,東京都,2014.2

岩崎 香子、風間 順一郎、松垣 あいら、中野 貴由、高垣 裕子、深川 雅史：材料科学的化石および組織学的解析による低回転骨CKDラットの骨特性,第5回腎不全研究会,東京都,2014.12

岩崎 香子：Renal osteodystrophyにおける骨材質特性,第34回日本骨形態計測が下記シンポジウムI腎疾患と糖尿病からみた骨代謝,北海道,2014.6

甲斐 倫明：CT診断に伴う医療被ばくのリスクとその防護,第16回癌治療増加研究シンポジウム,奈良県,2014.2

M Kai：From Fukushima to Risk Analysis Community,2014 Society for Risk Analysis - Asia Conference,Taiwan,2014.8

M Kai：Public health approach targeting at whole-health management, balanced with radiation protection,第3回福島国際専門家会議,福島県,2014.9

甲斐 倫明：これからの医療放射線防護に求められるもの,第30回診療放射線技師学術大会,別府市,2014.9

甲斐 倫明：最新の医療被ばくの疫学研究レビューから見える低線量リスク推定の課題,日本放射線影響学会第57回大会,鹿児島県,2014.10

M Kai：Update of ICRP Publication 109 and 111,51st Annual Meeting of National Council on Radiation Protection & Measurements,Washington DC, USA,2015.3

M Kai：What are new challenges for radiation protection system based on experience of Fukushima accident ?,7th Asian Regional Conference of OECD/NEA,Tokyo,2015.1

甲斐 倫明：放射線リスクコミュニケーションにいま何が求められているのか,第20回日本集団災害医学会総会・学術集会 パネルディスカッション,東京都,2015.2

佐伯 圭一郎：統計と研究デザイン（がん看護の発展に繋がる学術論文の輩出　－量的研究論文作成・査読能力を高める－）,第29回がん看護学会（編集委員会主催研修会）,神奈川県,2015.3

桜井 礼子：シンポジウム　体力を考える　地域在住高齢者の「健康関連体力」を考える,大分県スポーツ学会,大分県大分市,2014.12

佐藤玉枝：地域連携，九州地区重症心身障害看護師研究会，別府市，2014.10

関根 剛：地方自治体の役割,平成26年度犯罪被害者等施策研修会(内閣府・徳島県）,徳島県,2014.9

関根 剛：支援員のメンタルヘルス・ストレスマネジメント,全国被害者支援ネットワーク全国研修会,東京都,2014.10

関根 剛：パネルディスカッション「犯罪被害者支援における裁判付き添い等直接的支援の課題と今後の展望」コーディネーター,全国被害者支援フォーラム(全国被害者支援ネットワーク・警察庁）,東京都,2014.10

関根 剛：地方自治体の役割,平成26年度犯罪被害者等施策研修会(内閣府・秋田県）,秋田県,2014.10

関根 剛：支援センターにおけるコーディネーターの役割,全国被害者支援ネットワーク・認定コーディネーター研修会,東京都,2015.1

関根 剛：研修の企画,全国被害者支援ネットワーク・認定コーディネーター研修会,東京都,2015.1

平野 亙：訪問看護における意思決定の支援,大分県訪問看護認定看護師研究会　第3回訪問看護フォーラム九州ブロック学術集会,大分市,2014.12

村嶋 幸代：修士課程における保健師教育－過密カリキュラムの中で何を大事にし、研究者教育と両立させるか？－,東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻地域看護学分野 教室研究会,東京都,2014.4

村嶋 幸代：公衆衛生看護活動の専門性と展望,公益財団法人東京都医学総合研究所 夏のセミナー「難病の地域ケアコース」,東京都,2014.7

村嶋 幸代：日本の看護系大学大学院で、NP教育をどのように進めるか,第16回看護国際フォーラム,別府市,2014.10

学会発表

安部 眞佐子：親のアレルギー罹患別にみた妊娠期の葉酸摂取と乳幼児期の食物アレルギー発症について,第36回日本臨床栄養学会,東京都,2014.10

安部 眞佐子：アレルギーのある親を持つ児の食物アレルギー発症に対する葉酸サプリメントの影響,第9回大分県母性衛生学会,大分市,2014.10

安部 眞佐子：Folic acid supplementation during pregnancy affects food allergy risk in offspring depending on parental allergies,European academy of allergy and clinical immunology 2014,Copenhagen, Danmark,2014.5

Myoung Ae Choe：Difficulties of Indonesian nurses faced with while working at Japanese hospital,The 17th Conference, Japanese Society for International Nursing,Kyoto,2014.9

石川 純也、安藤 美佳、日名子 詩穂里、森 麻紀子、小嶋 光明、甲斐 倫明：ヒト正常線維芽細胞における放射線照射後の細胞動態の分析,日本保健物理学会　第47回研究発表会,岡山県,2014.06

Ishikawa J, Ando M, Hinago S, Mori M, Ojima M, Kai M.：Accumulation of senescence-associated beta-galactosidase positive cells in gamma-irradiated normal human fibroblast.,60th Annual International Meeting Radiation Research Society,Las Vegas, USA,2014.9

石川 純也、安藤 美佳、日名子 詩穂里、森 麻紀子、小嶋 光明、甲斐 倫明：ヒト正常線維芽細胞における放射線照射後の細胞老化とDNA損傷の解析,第57回 日本放射線影響学会,鹿児島県,2014.10

石田 佳代子：医療職者を対象とした災害訓練の効果の計測方法に関する文献調査,日本看護研究学会第40回学術集会,奈良県,2014.8

伊東 朋子：筋萎縮性側索硬化症患者における催眠レベル測定値(BIS)を用いた後頸部温罨法による睡眠支援の検討,第5回大分難病研究会,大分市,2014. 7

市瀬 孝道、吉田 成一、He Miao：PM2.5とPM10の気管支喘息モデルマウスへの影響,フォーラム1014・衛生薬学・環境トキシコロジー,茨城県,2014.9

市瀬孝道、He Niao、吉田成一、定金香里、高野裕久：中国瀋陽市におけるPM2.5とPM10のマウスのアレルギー性気道炎症への影響,第55回大気環境学会,愛媛県,2014.9

市瀬孝道、He Miao、戸次加奈江、吉田安広、吉田成一：中国瀋陽おいて収集したPM2.5によって誘導される肺の炎症とその誘因,第135回日本薬学会,兵庫県,2015.3

Yoshida Y, Song Y, Ichinose T：：Asian sand dust causes acute lung inflammation and subacute peripheral events,World asthma,NY, USA,2014.4

Song Y, Ichinose T, Morita K, Nakanishi T, He M,Kanazawa T, Yoshida Y：Particulate matter influenced immune responses through TLR4 in vivo,第43回日本免疫学会総会,京都府,2014.12

河津 直希、白石 彩華、秋山 幸雄、嵐谷 奎一、市瀬 孝道：最近の北九州地域の浮遊汚染物質濃度の特徴,第55回大気環境学会年会,愛媛県,2014.9

高田 幸子、三村 達哉、松原 正男、藤島 浩、市瀬 孝道：アレルギー性結膜炎患者数と大気中SPMの関係,第68回日本臨床眼科学会,兵庫県,2014.11

稲垣 敦：体育・スポーツ科学で生まれた数理モデルや解析法（２）質的データの時系列解析,日本体育学会第65回大会,岩手県,2014.8

稲垣 敦：対戦型スポーツのパフォーマンス構造分析,九州体育・スポーツ学会第63回大会,別府市,2014.9

稲垣 敦：対戦型スポーツのパフォーマンス構造分析,第6回大分県スポーツ学会,大分市,2014.12

Kato T, Kishimoto S, Inobe J, Inagaki A：Driving ability related neuropsychological tests for patients with brain disorders,16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists,Kanagawa,2014.6

稲垣 敦：対戦型スポーツのパフォーマンス構造分析,本体育測定評価学会第14回大会,石川県,2015.2

衛藤 真弓、岩尾 優芽、山田 紘実、吉弘 亜由美、岩崎 香子：透析患者における動物性蛋白質の摂取割合変化とQOLの関連,第59回日本透析医学会学術集会,兵庫県,2014.5

岩崎 香子、菅野 三喜男、風間 順一郎：糖尿病性腎症における力学特性低下には骨基質変化だけでなくミネラル組成変化が関与する,第57回日本腎臓学会学術集会,神奈川県,2014.7

岩崎 香子、風間 順一郎、深川 雅史：副甲状腺ホルモン化分泌を伴った慢性腎臓病骨病変の力学特性に対する尿毒症状態の影響,第32回日本骨代謝学会学術集会,大阪府,2014.7

岩崎 香子、風間 順一郎、深川 雅史：尿毒症環境は腎性骨症の易骨折性を惹起・進展させる,第16回日本骨粗鬆症学会学術集会,東京都,2014.10

Y. Iwasaki, J.J. Kazama, M.Fukagawa：Uremia exacerbates bone mechanical property in chronic kidney disease model rats with secondary hyperparathyroidism.,American Society of Bone and Mineral Research Annual Meeting,Huston, USA,2014.9

Y. Iwasaki, M. Fukagawa, H. Tanaka, A. Yasuda, T. Seki, J.J. Kazama：p-Cresyl sulfate aggravates bone mechanical properties through osteoblastic and osteoclastic dysfunction in early stage of chronic kidney disease.,16th Internatinal Congress of Endocrinology, Chicago, USA,2014.6

安武 陽子、梅野 貴恵、樋口 幸：産後3か月の母親の児への愛着と授乳方法との関連～出産前からの希望授乳方法と実際の授乳方法からみた比較～,第28回日本助産学会学術集会,長崎県,2014.3

東原 美和、梅野 貴恵：高校生の不妊に関する知識の実態とピアエデュケーション実施前後の意識の変化,第55回日本母性衛生学会総会・学術集会,千葉県,2014.9

江月 優子、小野 美喜、河野 優子、福田 広美、松本 初美：介護老人保健施設で働くスタッフの役割拡大に関する認識と特定看護師への期待,第34回日本看護科学学会,愛知県,2014.12

小嶋 光明：二動原体染色体を指標とした線量率効果の定量的解析とメカニズムの実験的探索,第47回日本保健物理学会,岡山県,2014.5

小嶋 光明：放射線照射したマウスの末梢血リンパ球におけるバイスタンダー効果の誘導,第57回に本放射線影響学会,鹿児島県,2014.9

小野 美喜：特別養護老人施設の看護師の自律的な活動に対する認識―医療的な判断と行為を行うことに着目して―,日本看護倫理学会第7回年次大会,愛知県,2014.5

麻原 きよみ、小西 恵美子、安藤 広子、百瀬 由美子、八尋 道子、小野 美喜、三森 寧子：看護倫理検討委員会企画　若手研究者が直面する研究遂行上の悩みーアン・デービスと語ろうー,第34回日本看護科学学会,愛知県,2014.12

甲斐 倫明、川野 有梨沙、石川 純也、小嶋 光明：造血幹細胞および前駆細胞の負フィードバック数理モデルによる造血細胞動態の分析,日本保健物理学会第47回研究発表会,岡山県,2014.6

甲斐 倫明：我が国における医療被ばくの実態を把握するシステムの構築に向けて,日本放射線影響学会第57回大会,鹿児島県,2014.10

影山 隆之：男性交替勤務者の夜勤連続時の生活習慣と不眠・眠気との関連－分割睡眠・飲酒・食事を中心に,第87回日本産業衛生学会,岡山県,2014.5

T. Kageyama, T. Yano, S. Kuwano, S. Sueoka, H. Tachibana：Exposure-response relationship of wind turbine noise with subjective symptoms on sleep and health,11th International Congress on Noise as a Public Health Problem 2014,Nara,2014.6

影山 隆之、矢野 隆、桑野 園子、橘 秀樹：風車騒音は住民の睡眠や健康と関連しているか？－全国調査の結果からー,日本音響学会2014年秋季研究発表会,北海道,2014.9

影山 隆之、後藤 成人：精神的不調者がみな□自殺念慮を抱くわけではない：□自殺念慮を抱く中高年住民の特徴,第73回日本公衆衛生学会総会,栃木県,2014.11

影山 隆之、後藤 成人：地域における自殺対策啓発活動の効果の検討－二度の住民調査における自殺についての意識の変化,日本精神衛生学会第30回大会,北海道,2014.11

平井 和明、影山 隆之：犯罪被害者が医療機関受診を躊躇する要因に関する調査,日本精神衛生学会第30回大会,北海道,2014.11

影山 隆之、竹内 一夫：コーピング特性簡易評価尺度ジュニア版(BSCP-J)の信頼性・妥当性：中学高校生におけるうつ状態との関連,日本学校メンタルヘルス学会第18回大会,兵庫県,2015.1

廣島 枝里奈、影山 隆之：高校生の部活動・生活時間と日中の眠気・精神的健康度の関連,日本学校メンタルヘルス学会第18回大会,兵庫県,2015.1

河野 梢子、中村 充浩、鈴木 真理子、八尋 道子、山下 早苗、前田 樹海、小西 恵美子：臨床実習は辛い？楽しい？－みんながhappyになる実習は存在するのかー,日本看護倫理学会第7回年次大会交流集会,愛知県,2014.5

草野 淳子、高野 政子：小児救急外来を受診した保護者のインターネット利用実態と受診判断,日本看護研究学会,奈良県,2014.8

草野 淳子、高野 政子、足立 綾：大分県内における在宅療養児の訪問看護の実態と課題,大分県小児保健学会,大分市,2014.8

S. Kawano, M. Kakehashi：The Effect of School Closure for Students in pandemic H1N1 2009 in Oita, Japan by Simulation using Mathematical Model,JSMB/SMB 2014,Osaka,2014.7

桑野 紀子：在日インドネシア人看護師が臨床で直面する困難 (Difficulties of Indonesian nurses faced with while working at Japanese hospital),第17回国際看護研究会,京都府,2014.9

河野 優子、小野 美喜、江月 優子、福田 広美、松本 初美：プライマリケア領域における特定看護師の介入前後の変化―糖尿病・褥創に焦点をあててー,第34回日本看護科学学会,愛知県,2014.12

佐伯 圭一郎：看護研究の現状と支援ニーズ ー様々な現場で働く看護職を対象とした郵送調査からー,第34回日本看護科学学会学術集会,愛知県,2014.11

定金 香里、市瀬 孝道：手指消毒薬有効成分がアトピー性皮膚炎に及ぼす影響とその作用機序,第84回日本衛生学会学術総会,岡山県,2014.5

定金 香里、市瀬 孝道、高野 裕久、柳澤 利枝、小池 英子：アトピー性皮膚炎モデルマウスに対するフタル酸ジイソノニル経母乳曝露の影響,第45回日本職業・環境アレルギー学会総会・学術大会,福岡県,2014.6

定金 香里、市瀬 孝道、吉田 安弘：菌体成分と黄砂によるアレルギー性気道炎症増悪作用,第９回バイオエアロゾルシンポジウム,別府市,2015.1

定金 香里、市瀬 孝道、吉田安弘：真菌由来成分β-グルカンと黄砂によるアレルギー性気道炎症増悪作用,第85回日本衛生学会学術総会,和歌山県,2015.3

佐藤 弥生：Creation of pilot protocol for sudden changes in home care patient conditions Judgment and Support by Visiting Nurses - In association with the symptoms of Dyspnea and cooperation between visiting nurses and physicians-,IARMM3rd World Congress of Clinical Safety “Clinical Risk Management”,スペイン（マドリード）,2014.9

高野 政子：特別支援学校における医療的ケアについて看護師導入後の教諭の評価,日本小児看護学会第24回学術集会,東京都,2014.7

高野 政子、足立 綾、草野 淳子、飯田 好、地本 里美：特別支援学校における医療的ケアに関わる関係者の連携に関する評価,日本家族看護学会第21回学術集会,岡山県,2014.8

地本 里美、高野 政子、草野 淳子、足立 綾：特別支援学校に看護師導入後の医療的ケアの質に関する保護者の評価,日本家族看護学会第21回学術集会,岡山県,2014.8

飯田 好、高野 政子、草野 淳子：特別支援学校で医療的ケアに従事する看護師と保護者の連携と課題,日本家族看護学会第21回学術集会,岡山県,2014.8

田中 佳子：在宅高齢者の傷病経験が□延命治療の考え方に与える影響□ー本人とその子の語りからー,日本看護倫理学会,愛知県,2014.5

野津 昭文、江口 真透：散逸したデータが混在するときのロバストなクラスター分析,統計関連学会連合大会,東京都,2014.9

庄山 由美、林 猪都子、吉田 成一、松本 初美：災害慢性期における特定看護師の期待される医療ニーズについて 東日本大震災災害医療派遣活動調査より,日本集団災害医学会,東京都,2014.2

今井 晴菜、林 猪都子、猪俣 理恵、植田 みゆき、吉留厚子：女子看護大学生における子宮がん検診行動に関する要因の検討,母性衛生,千葉県,2014.9

樋口 幸：日本における早期新生児期の保清・スキンケアの実態とその決定要因,第29回日本助産学会,東京都,2015.3

濱田 若菜、樋口 幸：九州地方の早期新生児期における保清方法とスキンケアの実態,第55回日本母性衛生学会,千葉県,2014.9

福田 広美、小野 美喜、藤内 美保、村嶋 幸代：大学院における特定看護師養成の標準的なカリキュラムの構築を目指して 大分県立看護科学大学大学院老年NPコースのカリキュラム確立に向けて,第34回日本看護科学学会学術集会交流集会,愛知県,2014.12

山田 巧、岩本 郁子、福田 広美、小野 美喜、福本 由美子：大学院における「特定看護師」養成の標準的なカリキュラム構築を目指して,第34回日本看護科学学会,愛知県,2014.12

宮内 信治：物語朗読における独白の談話音調とその解釈,日本英語音声学会第19回全国大会大分市,大分市,2014.6

吉田 成一、嵐谷 奎一、市瀬 孝道：越境PM2.5によるマウス雄性生殖機能の悪化,第55回大気環境学会,愛媛県,2014.9

吉田 成一、市瀬 孝道：黄砂付着微生物由来成分のLPSによる雄性生殖機能への影響,フォーラム2014：衛生薬学・環境トキシコロジー,茨城県,2014.9

吉田 成一、三浦 早織、市瀬 孝道：浮遊粒子状物質による免疫修飾作用のスクリーニング系の確立と適用,第9回大気バイオエアロゾルシンポジウム,別府市,2015.1

吉田 成一、賀 淼、三浦 早織、市瀬 孝道：微小粒子状物質PM2.5によるマウス□マクロファージ細胞の遺伝子発現に対する影響,日本薬学会第135年会,兵庫県,2015.3

吉村 匠平：看護学生の学習観と学習行動の関連,第75回九州心理学会,宮崎県,2014.11

吉村 匠平：ペア学習における学生間の温度差について（2）,第21回大学教育研究フォーラム,京都府,2014.3

10　地域貢献

講演等

石川 純也

研究発表で活かすプレゼンテーション, 公益社団法人 大分県看護協会 平成26年度教育研修, 大分市, 2014. 6
研究発表で活かすプレゼンテーション, 公益社団法人 大分県看護協会 平成26年度教育研修, 大分市, 2014. 9

石田 佳代子

フィジカルアセスメント（心音・呼吸音・全身皮膚）, 平成26年度ブランクのある方の技術研修, 大分市, 2014. 5
系統別フィジカルアセスメント, 平成26年度専任教員継続研修会, 大分市, 2014. 7
看護過程の展開, 平成26年度大分県看護協会研修会, 大分市, 2014. 8
臨床に役立つフィジカルアセスメント実践編, 平成26年度大分県看護協会研修会, 大分市, 2014. 8
看護過程, 平成26年度保健師・助産師・看護師実習指導者講習会, 大分市, 2014. 8
災害時に期待される看護職の役割 −災害に備える看護職の役割−, 平成26年度大分県立看護科学大学公開講座, 大分市, 2014. 9
フィジカルアセスメント（心音・呼吸音・全身皮膚）, 平成26年度ブランクのある方の技術研修, 大分市, 2014. 10
看護過程の展開, 平成26年度大分県看護協会研修会, 大分市, 2015. 2
観察〔各種資器材による観察〕, 消防職員専科教育救急科（第17期）講義・演習, 大分市, 2015. 3
フィジカルアセスメント　循環器系, 平成26年度大分中村病院看護師研修会, 大分市, 2014. 7

稲垣 敦

体力測定概論・各論, 第１回体力チェックサポーター養成研修会, 別府市, 2014. 7
介護予防：自分らしく生きるために, 豊後大野市自治委員・市議会議員・市農業委員会委員・市教育委員合同研修会, 豊後大野市, 2014. 9
めじろん元気アップ体操, 佐賀関・神崎地域包括支援センター主催介護予防教室, 大分市, 2014. 9
100歳まで元気な人々のライフスタイル, 姫島村健康づくり事業, 姫島村離島センター, 2015. 1
100歳まで元気な人々のライフスタイル, 長寿の秘訣, 竹田市食生活改善推進協議会研修会, 竹田市, 2014. 3
呼気ガス代謝測定, 大分市消費カロリーのわかるかちづくり事業（１）, 大分市, 2014. 9
呼気ガス代謝測定, 大分市消費カロリーのわかるかちづくり事業（２）, 大分市, 2014. 9
健康チェック, 第38回富士見が丘団地体育祭, 大分市, 2014. 10
健康チェック, 第３回大分市森林セラピートレイルランニング大会, 大分市, 2015. 3
健康チェック, 第３回森林探検ウォーキング, 大分市, 2014. 3
健康チェック, 第38回富士見が丘団地体育祭, 大分市, 2014. 10

稲垣 敦、赤星 琴美

健康・体力チェック, 文部科学省スポーツを通じた地域コミュニティ活性化促進事業, 国東市, 2014. 11

稲垣 敦、桜井 礼子

健康チェック, くじゅう山開き, 九重町, 2014. 6
健康・体力チェック, 文部科学省スポーツを通じた地域コミュニティ活性化促進事業, 大分市, 2014. 9

稲垣 敦、桜井 礼子、小山 珠美	健康チェック,第38回富士見が丘団地体育祭,大分市,2014.10
稲垣 敦、桜井 礼子、小山 珠美、河野 梢子	健康・体力チェック,大分県スポーツ学会第６回学術大会,大分市,2014.12
稲垣 敦、小山 珠美	健康・体力チェック,文部科学省スポーツを通じた地域コミュニティ活性化促進事業,国東市,2014.10
稲垣 敦、巻野 雄介、田中 佳子	健康チェック,まちなか健康おせったい,大分市,2014.9 救護班,第３回大分市森林セラピートレイルランニング大会,大分市,2015.3
梅野 貴恵	「助産師教育課程」,平成26年度保健師・助産師・看護師実習指導者講習会,大分市,2014.6 一般口演助産・母性看護教育Ⅰ座長,第28回日本助産学会学術集会,長崎市,2014.3
荻野 桃子、畑野 麻紀、松尾 妃奈、矢野 杏子、梅野 貴恵、樋口 幸、安部 真紀	4年生「第二次性徴と妊娠」,平成26年度大分市立三佐小学校「いのちの教育」,大分市,2014.10
小野 美喜	特定行為に係る看護師の研修制度の法制度までの歩み,平成26年度鹿児島の医療を支える看護を考える,鹿児島,2014.8 修士課程におけるNP教育修了生の活躍と成果 －実践で見いだされた成果－,第16回看護国際フォーラム,別府市,2014.10 実習指導計画,平成26年度実習指導者講習会,大分県,2014.8 看護研究の基礎,大分県看護協会研修,大分県,2014.6 離島看護におけるNPの役割,鹿児島大学医学部保健学科講義,鹿児島,2014.6
影山 隆之	職場のメンタルヘルス,大分県自治人材育成センター平成26年度マネジメント研修,大分市,2014.4 メンタルヘルス：管理監督者の役割,大分県自治人材育成センター平成26年度市町村新任課長級研修,大分市,2014.5 メンタルヘルス,大分大学経済学部基盤演習,大分市,2014.5 自殺対策の基礎,平成26年度豊後大野市自殺対策事業（ゲートキーパー養成研修）,豊後大野市,2014.9 ストレスマネジメントー消防職員が知っておきたいこと,大分県消防学校平成26年度幹部研修,由布市,2014.9 メンタルタフネスのためのストレスコーピングと首尾一貫感覚（SOC),大分県健保連研修会,大分市,2014.11 睡眠と健康管理,大分産業保健総合支援センター平成26年度第27回衛生管理者等研修,大分市,2015.1 惨事ストレス：消防団員が知っておきたいこと,宮崎市消防団ストレス研修会,宮崎市,2015.2
河野 梢子	喀痰吸引等を必要とする重度障害児・者等の障害及び支援に関する講義/緊急時の対応及び危険防止に関する講義,介護職員等による喀痰吸引等（第三号研修）研修会,大分,2014.6 臨床に役立つフィジカルアセスメント,大分県看護協会教育研修,大分,2014.5 臨床に役立つフィジカルアセスメント,大分県看護協会教育研修,大分,2014.8 フィジカルアセスメント（脳神経）,フィジカルアセスメント研修,大分,2014.8

草野 淳子	平成26年度第２、３回医療的ケア研修（教員対象）, 大分県教育委員会, 大分県, 2014. 8 平成26年度第２回医療的ケア研修会（看護師対象）, 大分県教育委員会, 大分県, 2014. 8 出前授業, 大分県立杵築高等学校, 大分県, 2014. 6
定金 香里	色が変わる不思議な花, 大分県理科・化学懇談会主催　「夏休み子供サイエンス2014」, 大分市, 2014. 8
佐藤 弥生	教育体制の構築（訪問看護ステーション所内教育）, 大分県看護協会　訪問看護専門分野講習会, 大分市, 2014. 4 介護領域における看護・介護領域の関係法規、看護記録の実際, 大分県看護協会　訪問看護専門分野講習会, 大分市, 2014. 4 訪問看護概論, 在宅医療推進のための「佐伯地域訪問看護基礎研修」, 佐伯市, 2014. 11 家族看護, 大分県看護協会　訪問看護専門分野講習会, 大分市, 2014. 12 第7回事例発表会　総評, 大分県訪問看護ステーション連絡協議会, 大分市, 2015. 1 介護領域における看護・介護領域の関係法規、看護記録の実際, 大分県看護協会　訪問看護専門分野講習会, 大分市, 2015.
佐藤 玉枝	保健師教育課程，平成26年度大分県保健師助産師看護師実習指導者講習会，大分市，2014, 6 看護師教育課程における「地域看護学」教育，日本地域看護学会理事会セミナー，岡山県，2014. 8 健康と仕事，大分県市町村新採用職員研修会，大分市，2014. 10 健康施策実現のための保健師のリーダーシップ，宮崎県リーダー保健師研修会，宮崎県，2014, 11 保健師管理者として必要な役割・能力～提言・改革・推進能力～市町村保健師管理者能力育成研修会，福岡県，2014. 11 これからの市町村保健師に期待するもの，市町村統括保健師会議，大分市，2015. 2
品川 佳満	看護研究の実際I, 大分県看護協会　教育研修, 大分市, 2014. 6 看護研究の基礎及びデータ解析入門, 鹿児島大学　医学部保健学科　公開講座, 鹿児島市, 2014. 7 看護研究の実際II, 大分県看護協会　教育研修, 大分市, 2014. 8 量的研究のデータ解析入門, 鹿児島市立病院　看護科教育研修, 鹿児島市, 2014. 8 ヘルスケアサービス管理論, 看護協会　認定看護管理者（セカンドレベル）教育課程, 大分市, 2014. 12

関根 剛

メンタルヘルス, 大分県自治人材育成センター新任班総括研修, 大分市, 2014. 4
相談対応の基本, 大分県警察学校専科教育, 大分市, 2014. 5
カウンセリングの理論と実際（１）, 大分いのちの電話協会相談員養成研修, 大分市, 2014. 5
犯罪被害者に対するカウンセリングスキルの基礎, 山口県警察学校, 山口県, 2014. 5
関係機関との連携の促進のために, 紀の国被害者支援センター被害者研修会, 和歌山市, 2014. 6
被害者支援の歴史・意義・必要性・人を援助すると言う事・エクササイズ, 紀の国被害者支援センター被害者支援養成講座, 和歌山県, 2014. 6
カウンセリングの基礎・被害者支援のあり方, 山口被害者支援センター相談員養成研修会, 山口県, 2014. 6
面接技術（演習）, 大分県看護協会, 大分市, 2014. 6
カウンセリングの原理と実際（全２日間, 大分県看護協会, 大分市, 2014. 7
ロールプレイ・聴くということ, 大分チャイルドライン受け手養成講座, 大分市, 2014. 7
人材育成, 全国被害者支援ネットワーク新任事務局長研修, 東京都, 2014. 7
被害者の心情に関する講話（全８回）, 大分刑務所ゲストスピーカー, 大分市, 2014. 8
危機時のこころのケア総論, 大分県心の緊急支援チーム研修会, 大分市, 2014. 9
性犯罪被害者の心理, 大分県警察学校被害者支援専科, 大分市, 2014. 10
コミュニケーション能力の高め方, 東国東管内介護施設等看護職員サポート交流会, 国東市, 2014. 10
コミュニケーションから自分を発見してみる, 民医連九州沖縄地協ジャンボリーin大分, 別府市, 2014. 10
なぜこころの健康が大切なのでしょう, 臼杵市ゲートキーパー養成研修会, 臼杵市, 2014. 10
こころの健康と ゲートキーパーの役割, 豊後高田市ゲートキーパー養成研修会, 豊後高田市, 2015. 2
ストレスの解消法について, 東国東管内介護施設等看護職員サポート交流会, 国東市, 2015. 3
同行支援と支援プラン作成, 香川被害者支援センター研修会, 香川県, 2015. 3

高野 政子	「保育所における看護と健康管理」, 平成26年度大分県認可私立保育園協議会健康研修会, 別府市, 2014. 6 医療的ケア児童・生徒の健康管理について, 平成26年度大分県立別府支援学校医療的ケア研修会, 別府市, 2014. 7 がんの子どもの就学や治療後の復学について, がんの子どものを守る会九州北支部第41回講演・交流会, 大分県由布市, 2014. 7 呼吸、たんの吸引の基礎と指導のポイント, 平成26年度第2回医療的ケア研修, 大分市, 2014. 8 健康状態の把握と経管栄養の基礎, 平成26年度第3回医療的ケア研修, 大分市, 2014. 8 たんの吸引の基礎と指導のポイント, 平成26年度第2回医療的ケア看護師研修, 大分市, 2014. 8 実習指導の実際, 平成6年度保健師助産師看護師実習指導者講習会, 大分市, 2014. 9 事例から学ぶ小児訪問看護実践, 平成26年度重症小児在宅療養促進事業研修会, 佐伯市, 2014. 9 家族看護, 平成26年度大分県看護協会教育研修, 大分市, 2014. 9 事例で学ぶ小児訪問看護実践, 平成26年度重症小児在宅療養促進事業研修会, 日田市, 2014. 10 事例で学ぶ小児訪問看護実践, 平成26年度重症小児在宅療養促進事業研修会, 豊後大野市, 2014. 11
田中 佳子	臨床で役立つフィジカルアセスメント, 平成26年度大分県看護協会研修会, 大分市, 2014. 5 臨床に役立つフィジカルアセスメント, 平成26年度大分県看護協会研修会, 大分市, 2014. 8 フィジカルアセスメント(運動器系), 大分中村病院フィジカルアセスメント研修, 大分市, 2014. 8 各種器材による観察, 消防職員専科教育救急科(第17期), 大分市, 2015. 3
平野 亙	福祉における権利擁護　ー権利としての自立とその支援, 大分県・市町村福祉担当新任職員研修会, 大分市, 2014. 5 特別支援教育に望むこと　ー障がい児の生きる力を育てるためにー, 平成26年度特別支援学校新任教員研修, 大分市, 2014. 6 患者安全、そして失敗から学ぶ医療, 大分記念病院職員研修会, 大分市, 2014. 6 発達障がいのある子どもの理解と支援　～保護者の願いから～, 豊後高田市教育委員会「身近なじんけん講座」, 豊後高田市, 2014. 6 医療事故発生のメカニズムと安全管理のポイント, 大分県看護協会訪問看護専門分野研修会, 大分市, 2014. 8 訪問看護における患者の権利と意思決定の支援, 大分県看護協会平成25年度訪問看護基礎研修, 大分市, 2014. 9 ＡＳＤ児の未来のために　～専門職に寄せる親の願い～, 平成26年度発達障がい者支援専門員養成研修（初級）, 大分市, 2014. 11 発達障がいがある方の理解と支援, 平成26年度人権サポーター講座特別講座, 杵築市, 2014. 11 学校と保護者の連携　～発達障がいのある子どもの支援, 平成26年度公立小・中学校特別支援教育コーディネーター専門研修, 大分市, 2015. 1 権利擁護　～自立と尊厳を保障するために～, 大分県こども・女性相談支援センター職員研修, 大分市, 2015. 1

村嶋 幸代

保健師教育における最近の状況, 全国保健師教育機関協議会九州ブロック研修会, 熊本県熊本市, 2014. 8
保健師の人材育成についてー先駆的に保健師教育を大学院化した立場からー, 全国保健師教育機関協議会北海道・東北ブロック 研修会, 宮城県仙台市, 2014. 8
東日本大震災からの学び, 平成26年度大分県立看護科学大学公開講座, 大分県大分市, 2014. 9
退院支援の重要性と退院支援に関わる看護師の役割, 平成26年度宇佐地域看護連携強化フォーラム, 大分県宇佐市, 2014. 9
大学法人化のメリット・留意点、大分県立看護科学大学における大学活性化の取り組み, 宮崎県立看護大学 学内講演会, 宮崎県宮崎市, 2014. 10
保健師のキャリアラダーと教育ー保健所・市町村・大学・関係機関のより良い連携・協働による保健師のパワーアップー, 大分県看護協会 保健師のキャリアラダーと教育研修会, 大分県大分市, 2014. 12
大学院における保健師教育ー大分県立看護科学大学の例を含めてー, 全国保健師教育機関協議会東海・北陸・近畿ブロック 定例会議, 愛知県名古屋市, 2014. 12
保健師活動に役立つ地域診断ー地域の課題を共有し、協働するためにー, 北九州市平成26年度企画力向上研修, 福岡県北九州市, 2015. 2

吉村 匠平

コミュニケーション論　１　, 大分医師会立アルメイダ病院初任者研修, 大分市, 2014. 6
モチベーションマネジメント　自己決定理論から, 大分医師会立アルメイダ病院　プリセプター研修, 大分市, 2014. 7
リーダーシップ研修, 国立病院機構別府医療センター, 別府市, 2014. 7
コミュニケーション論　２, 大分医師会立アルメイダ病院初任者研修, 大分市, 2014. 10
対人関係アップのためのコミュニケーションスキル講座, 福岡県栄養士会研修会, 福岡県, 2014. 12

研究指導

大分赤十字病院	桑野 紀子、定金 香里
国立病院機構大分医療センター	佐藤 弥生、岩崎 香子
国立病院機構西別府病院	高野 政子、吉田 成一
大分県立病院	石田 佳代子、森田 慶子
大分市医師会アルメイダ病院	河野 梢子、吉村 匠平
中津市民病院	桜井 礼子、安部 眞佐子
大分中村病院	平野 亙、石岡 洋子
国立長寿医療センター	福田 広美
衛藤病院	後藤 成人、小嶋 光明

学会その他の役員等

赤星 琴美

大分市建築審査会委員
大分市風俗関連営業建築物審議会委員
大分県国民健康保険団体連合会情報公開および個人情報保護審査会委員
介護サービス苦情処理委員会委員
日本看護系大学協議会　看護教育質向上委員会　委員
大分県看護研究学会審査委員
佐賀大学大学院非常勤講師

安部 真紀

一般社団法人大分県助産師会　教育委員

石田 佳代子

中津ファビオラ看護学校　非常勤講師
大分県看護協会教育委員会　委員

市瀬 孝道	環境省黄砂問題検討会委員 大気環境学会九州支部会役員 福岡市PM2.5・黄砂影響検討会委員
伊東 朋子	日本ALS協会大分県支部運営委員
稲垣 敦	日本体育学会 学会賞選考委員 Editor, International Journal of Sport and Health Science 日本体育測定評価学会 学会賞選考委員長 日本体育測定評価学会 将来検討委員長 日本体育測定評価学会 副理事長 Nスポーツ 顧問 大分県介護予防運動機能向上専門部会 委員 大分市森林セラピートレイルランニング実行委員会 委員 大分県健康・体力・人づくり推進事業有識者会議 委員 大分県スポーツ学会 理事 大分県スポーツ学会 学術委員 熊本大学教育学部 非常勤講師 大分大学医学部 非常勤講師 大分医療技術専門学校 非常勤講師
岩崎 香子	日本骨粗鬆症学会評議員 ROD21研究会幹事
梅野 貴恵	大分県母性衛生学会理事 第29回日本助産学会学術集会査読委員 平成26年度公益社団法人日本助産師会九州・沖縄地区研修会講演「助産業務ガイドラインのお話し」座長
小嶋 光明	日本保健物理学会企画委員 日本放射線影響学会評議委員 大分大学医学部臨床研究審査委員 日本放射線影響学会放射線災害対応委員
小野 美喜	日本看護科学学会　看護倫理検討委員会 日本看護倫理学会　評議員 中津ファビオラ看護学校非常勤講師 日本看護倫理学会学会誌査読
甲斐 倫明	国際放射線防護委員会(ICRP) 第4専門委員会委員 人事院安全専門委員会委員 日本放射線影響学会評議員 公益財団法人放射線影響研究所科学諮問委員 大分県防災会議委員 公益社団法人日本アイソトープ協会ICRP111解説編集委員会副委員長 鹿児島県地域防災計画検討有識者会議委員 弘前大学大学院保健学研究科高度実践被ばく医療専門家委員会委員 鳥取県原子力防災専門家会議委員 久留米大学認定看護師教育センター非常勤講師 国際放射線防護委員会(ICRP) Task Group 93, chair 国連科学委員会国内対応委員会委員

影山 隆之	大分県地域福祉権利擁護事業契約締結審査会委員 大分県自殺対策連絡協議会副会長 豊後大野市自殺対策連絡協議会助言者 日本精神衛生学会常任理事・編集委員長 日本自殺予防学会常務理事・編集委員長 日本学校メンタルヘルス学会理事・編集委員 日本産業ストレス学会評議員 日本社会精神医学会評議員 日本産業衛生学会編集委員 大分県環境影響評価技術審査会委員 別府大学非常勤講師 広島大学非常勤講師
草野 淳子	一般社団法人日本小児看護学会第25回学術集会企画委員
佐伯 圭一郎	日本民族衛生学会評議員 大分県情報公開・個人情報保護審査会委員 日本看護科学学会和文誌編集委員
定金 香里	日本生理学会評議員 平松学園大分リハビリテーション専門学校非常勤講師 大分県理科・化学懇談会幹事 大分県環境影響評価技術審査会委員 大気環境学会健康影響分科会幹事
佐藤 弥生	一般社団法人　日本訪問看護認定看護師協議会理事 平成26年度訪問看護ステーション等看護職員定着促進事業推進部会委員 平成26年度訪問看護・介護連携推進事業における「訪問看護・介護連携による支援の実践・評価委員会」委員 大分県看護協会看護師職能Ⅱ委員 大分県看護協会訪問看護推進協議会委員
佐藤 玉枝	大分県医療費適正化推進協議会　委員 大分県介護保険審査会　委員 大分県リハビリテーション協議会　委員 大分市社会福祉審議会　委員 大分市高齢者福祉計画・介護保険事業計画策定委員会　委員 大分県国民県保健団体連合会　保健事業支援・評価委員会　委員 大分県国民県保健団体連合会　介護給付費審査委員会　委員 日田市外部評価委員会　委員
品川 佳満	別府医療センター附属大分中央看護学校　非常勤講師 日本放射線看護学会 評議員
秦 さと子	大分県脳卒中懇話会　世話人
関根 剛	大分市男女共同参画審議会会長 公益社団法人　大分被害者支援センター　理事 全国被害者支援ネットワーク　理事・支援活動検討委員会委員長代行 消防庁緊急時メンタルサポートチーム　メンバー 大分県こころの緊急支援チーム　委員・メンバー

高野 政子	日本小児がん看護学会査読委員 大分県小児保健協会　理事 九州・沖縄小児看護教育研究会　幹事 日本看護研究学会九州・沖縄地方会　幹事 日本小児看護学会評議員 大分県特別支援学校第三者評価委員会委員 大分県医療的ケア連絡協議会委員 大分県看護協会学会委員会　副委員長
林 猪都子	大分県母性衛生学会　副会長（事務局長） 大分県母性衛生学会　学術集会運営委員 日本放射線看護学会　評議委員 大分県看護協会　ナースセンター事業運営委員
樋口 幸	大分県看護協会実習指導者講習会運営委員　副委員長 大分市産学交流サロン事業検討委員 大分県看護協会実習指導者講習会運営委員　副委員長 大分市産学交流サロン事業検討委員
平野 亙	福岡大学法科大学院非常勤講師 九州大学大学院医学系学府非常勤講師 医療事故防止・患者安全推進学会　理事 大分県発達障がい研究会　理事 大分県医療コンフリクトマネジメント研究会　世話人 大分県人権尊重社会づくり推進審議会　副会長 大分県地域・職域連携推進部会　委員 大分県特別支援連携協議会　委員 大分県立特別支援学校第三者評価委員会　委員 大分県発達障がい者支援センター連絡協議会　委員 別府市親亡き後等の問題解決策検討委員会　委員 大学コンソーシアム佐賀　大学間連携共同教育事業外部評価委員
宮内 信治	大分県高等学校教育研究会英語部門　顧問 大分県立芸術文化短期大学　非常勤講師 日本英語音声学会常任理事

村嶋 幸代	厚生労働省 保健師に係る研修のあり方等に関する検討会 座長 日本学術会議　連携会員 一般社団法人 日本看護系大学協議会　理事 一般社団法人 日本看護系学会協議会　理事 一般社団法人 全国保健師教育機関協議会 会長 一般社団法人 日本NP教育大学院協議会 副会長 日本保健師連絡協議会 代表幹事 一般社団法人 日本地域看護学会 理事長 一般社団法人 日本地域看護学会 代議員 一般社団法人 日本地域看護学会 日本学術会議対策委員会 委員長 一般社団法人 日本地域看護学会 地域看護学学術委員会 副委員長 一般社団法人 日本地域看護学会 「看保連」対策委員会 副委員長 日本公衆衛生学会 理事 日本公衆衛生学会 評議員（職能別） 一般社団法人 日本看護研究学会 理事 日本在宅ケア学会 監事 日本老年看護学会 評議員 一般社団法人 日本公衆衛生看護学会 代議員 一般社団法人 日本看護管理学会 評議員 公益社団法人 日本看護科学学会 代議員 国立保健医療科学院 評価委員 東京都地方独立行政法人評価委員会　委員 宮崎県立看護大学あり方検討会 委員 学校法人産業医科大学 評議員 一般財団法人日本公衆衛生協会 理事 公益財団法人医療科学研究所　評議員 社会福祉法人三井記念病院　評議員 大分県訪問看護・介護連携検討会 会長 大分県医療審議 委員 生涯健康県おおいた21推進協議会 委員 大分県公私立学校教育協議会 委員 大分県国民保護協議会 委員 大分市教育委員会「教育に関する事務の管理および執行の状況についての点検および評価」　学識経験者 大分市子ども・子育て会議 会長
吉田 成一	日本薬学会 代議員 日本アンドロロジー学会 評議員 第33回アンドロロジー学会学術大会 プログラム編集委員 精子形成・精巣毒性研究会 評議員
吉村 匠平	平成26年度小・中学校等特別支援教育充実事業に係わる専門家チーム委員

11　助成研究

安部 真紀

育児期男女のパーソナルネットワークと育児サポート体制の課題

日本学術振興会科学研究費　若手研究(B)

石田 佳代子

災害時における黒タグ者に対する活動モデルの開発

日本学術振興会　科学研究費助成事業　基盤研究（C）

市瀬 孝道

砂漠地帯から越境輸送される黄砂バイオエアロゾルを標的とした高高度大気調査

日本科学振興会科学研究費補助金　基盤研究（B）海外学術調査（分担）

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

大陸に由来するアジアンスモッグ（煙霧）の疫学調査と実験研究による生体影響解明

日本科学振興会科学研究費補助金　基盤研究（A）

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

黄砂とPM2.5による複合大気汚染の肺炎、アレルギー疾患増悪作用とメカニズム解明

環境省環境研究総合推進費

伊東 朋子

筋萎縮性側索硬化症患者における催眠レベル測定値を用いた睡眠評価法の開発

平成25年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)（基盤研究(C)）

岩崎 香子

CKDの骨脆弱性に対する副甲状腺ホルモン製剤の効果－骨組成変化を指標とした検討－

日本腎臓財団公募助成腎不全病態研究

小野 美喜

老人保健施設における看護師の主体的介入による健康管理モデル構築のための基礎的研究

科学研究費助成事業　学術研究助成基金助成金　基盤研究（C）

甲斐 倫明、小嶋 光明、石川 純也

細胞動態のシステマティックレビューと実験データ解析による低線量・低線量率における放射線がんリスクの描写

環境省 原子力災害影響調査等事業(放射線の健康影響に係わる研究調査事業)

影山 隆之

学校現場の日常的活動の場で実施できる児童生徒の自殺予防プログラムの開発と応用

日本学術振興会科学研究費　基盤研究(C)

影山 隆之

男性労働者のソーシャルキャピタルに注目した職域から地域に繋がる健康支援の研究

日本学術振興会科学研究費　基盤研究(C)

桑野 紀子

外国人患者に対する態度形成要因の日韓比較を基にした多文化看護研修プログラムの開発

日本学術振興会科学研究費　挑戦的萌芽

佐伯 圭一郎

臨床看護職者を対象とした統計リテラシー教育のためのポータルサイト構築

日本学術振興会科学研究費　基盤研究（C）

定金 香里

手指消毒薬の成分がアトピー性皮膚炎に及ぼす影響とその作用機序に関する研究

日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究(C)

高野 政子

光ブロードバンド回線を利用して病院内学級と原籍校を結ぶ学童の復学支援

日本学術振興会科学研究費　挑戦的萌芽

高野 政子

タブレット端末使用によりICT環境を整備し院内学級と原籍校を結ぶ学童の復学支援

日本学術振興会科学研究費　挑戦的萌芽

藤内 美保、佐藤 弥生

藤内美保　佐藤弥生「フィジカルアセスメントに基づく日常生活行動・薬剤投与量の調節の判断のツール開発」

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤（C）　課題番号24593516　平成24年度～平成27年度

樋口 幸

早期新生児期における皮膚バリア機能に胎脂が与える影響

日本学術振興会科学研究費　若手研究(B)

村嶋 幸代

高齢者プライマリ・ケア領域の高度実践看護師（NP)の養成効果と教育モデルの開発

日本学術振興会　科学研究費助成事業　基盤研究（B）

村嶋 幸代

修士課程における保健師教育の開発と評価－日本からの発信

日本学術振興会　科学研究費助成事業　挑戦的萌芽研究

吉田 成一

胎仔期の越境微小粒子曝露と出生仔の雄性生殖機能低下と気管支喘息増悪への次世代影響

日本学術振興会科学研究費　基盤研究（B）

12　各種研究・研修派遣

安部 真紀

派遣先　公益社団法人全国助産師教育協議会,平成26年度「助産師教育ファーストステージ研修」

研修期間
平成26年８月４日（月）～８月９日（土）,10月10日（金）～10月12日（日）

今回、大学院助産教育における高度な助産実践能力を養うために「助産師教育方法論」「助産師教育方法演習」を科目履修し、講義や演習に活用できる助産師教育方法や、高度な実践能力を養える教育に活用することを目的として参加した。具体的にはカリキュラムと授業、授業技術の種類、授業設計、授業の展開、OSCEと臨床推論、授業評価の考え方、実習オリエンテーション、カンファレンスの運営である。特に学生の問題解決能力、統合する能力、臨床能力を育成するための教育評価として助産実践能力OSCEの実際を学ぶことが出来た。この研修を活用し平成27年度助産学コースカリキュラムより段階的OSCEを取り入れる予定である。
3月6日のアニュアルミーティングにて、研修報告を行った。

樋口 幸

派遣先　公益社団法人全国助産師教育協議会,平成26年度「助産師教育ファーストステージ研修」

研修期間
平成26年８月４日（月）～８月９日（土）,10月10日（金）～10月12日（日）

「助産師教育ファーストステージ研修」は、助産師教育の質の向上のために、助産師教育に携わる若手の教員や臨床指導者を対象に開講される教育研修である。今回、助産師教育を行う上で、臨床指導者と連携をとりながら、母児の安全と学生の学びを深め、自律性を最大限に引き出せるように助産師教育方法について学び、その経験を講義や演習に活用することを目的とし参加した。カリキュラムや授業設計、展開や評価の考え方、指導技術やカンファレンスの運営等、講義だけでなく演習や実習などのあらゆる場面で活用できる教育技術を学ぶことができた。特に、段階的OSCEは問題解決能力、統合する能力、臨床能力を育成するための教育方法として有効であることを学んだ。この段階的OSCEをH27年度より助産学コースのカリキュラムに導入予定であるため、今回学んだ具体的方法を活用していく。3月6日のアニュアルミーティングにて、研修報告を行った。

13　学外研究者の受入

本学教員　甲斐 倫明

受入者　 小野 孝二

　科学研究費補助金によるWAZA-ARI2に開発に関連した共同研究（CT診断に伴う小児の健康影響に関する研究）を行った。

14 役員及び審議会委員名簿

1 役員

理事長（学長）		村嶋 幸代
理事	学部長	市瀬 孝道
理事	研究科長	甲斐 倫明
理事	事務局長	堤　健一
理事（非常勤）	大分大学医学部附属病院長	野口 隆之
理事（非常勤）	佐伯中央病院長	小寺 隆
理事（非常勤）	元経済同友会代表幹事	高橋 靖周
監事（非常勤）	大分県看護協会専務理事	神品 實子
監事（非常勤）	公認会計士	岩尾 隆志

2 経営審議会

学内委員	理事長	村嶋 幸代
学内委員	理事	市瀬 孝道
学内委員	理事	甲斐 倫明
学内委員	理事	堤　健一
学内委員	理事（非常勤）	野口 隆之
学内委員	理事（非常勤）	小寺 隆
学内委員	理事（非常勤）	高橋 靖周
学外委員	弁護士	千野 博之
学外委員	立命館アジア太平洋大学副学長	上子 秋生
学外委員	大分合同新聞社編集局長	松尾 和行
学外委員	大分県看護協会長	松原 啓子

3 教育研究審議会

学内委員	学長	村嶋 幸代
学内委員	学部長	市瀬 孝道
学内委員	研究科長	甲斐 倫明
学内委員	事務局長	堤　健一
学内委員	生体科学教授	中林 博道
学内委員	健康運動学教授	稲垣 敦
学内委員	人間関係学准教授	吉村 匠平
学内委員	健康情報科学教授	佐伯 圭一郎
学内委員	言語学教授	G.T.Shirley
学内委員	基礎看護学准教授	伊東 朋子
学内委員	看護アセスメント学教授	藤内 美保
学内委員	成人・老年看護学教授	小野 美喜
学内委員	小児看護学教授	高野 政子
学内委員	母性看護学教授	林　猪都子
学内委員	助産学教授	梅野 貴恵
学内委員	精神看護学教授	影山 隆之
学内委員	保健管理学教授	桜井 礼子
学内委員	地域看護学特任教授	佐藤 玉枝
学内委員	国際看護学特任教授	崔　明愛
学外委員	大分大学名誉教授	葉玉 哲生

15　教職員名簿

1　専任教員

生体科学	教授	中林 博道	H26.12.31 退職
	准教授	安部 眞佐子	
	助教	岩﨑 香子	
生体反応学	教授	市瀬 孝道	
	准教授	吉田 成一	
	助教	定金 香里	
健康運動学	教授	稲垣 敦	
人間関係学	准教授	吉村 匠平	
	准教授	関根 剛	
	非常勤助手	森田 慶子	
環境保健学	教授	甲斐 倫明	
	講師	小嶋 光明	
	助手	石川 純也	
健康情報科学	教授	佐伯 圭一郎	
	准教授	品川 佳満	
	助教	野津 昭文	H26.4.1 採用
言語学	教授	G.T.Shirley	
	准教授	宮内 信治	
	非常勤助手	馬場 奈穂	H26.4.1 採用
基礎看護学	教授（兼担）	藤内 美保	
	准教授	伊東 朋子	
	講師	秦 さと子	
	助教	巻野 雄介	
	助手	水野 優子	H27.3.31 退職
	臨時助手	石丸 智子	H26.4.1 採用
看護アセスメント学	教授	藤内 美保	
	准教授	石田 佳代子	
	助教	河野 梢子	H27.3.31 退職
	助手	田中 佳子	
成人・老年看護学	教授	小野 美喜	
	講師	松本 初美	H27.3.31 退職
	助教	江月 優子	H27.3.31 退職
	助手	中釜 英里佳	
	助手	河野 優子	H26.4.1 採用
	助手	西部 由里奈	H26.4.1 採用
	臨時助手	川野 明子	H26.4.1 採用
小児看護学	教授	高野 政子	
	助教	草野 淳子	
	助手	足立 綾	
母性看護学	教授	林 猪都子	
	講師	猪俣 理恵	H27.3.31 退職
	助教	植田 みゆき	H27.3.31 退職
助産学	教授	梅野 貴恵	
	助教	樋口 幸	
	助教	石岡 洋子	
	助教	安部 真紀	
精神看護学	教授	影山 隆之	
	助教	杉本 圭以子	H26.4.1 採用
	助教	後藤 成人	
保健管理学	教授	桜井 礼子	H27.3.31 退職
	准教授	平野 亙	
	助教	佐藤 弥生	
	臨時助手	小山 珠美	H26.4.1 採用
地域看護学	講師	赤星 琴美	
	助手	キット 彩乃	H27.3.31 退職
	助手	岡元 愛	
	臨時助手	甲斐 博美	H26.10.1 採用
国際看護学	助教	桑野 紀子	

看護研究交流センター	准教授	福田 広美	
	臨時助手	今池 純子	H26.4.1 採用
	臨時助手	銅直 茜	H26.4.30 退職
	臨時助手	板井 里枝	H26.9.1 採用

２　特任教授	特任教授	佐藤 玉枝
	特任教授	崔 明愛

３　就職相談員	就職相談員	小川 三代子

４－１　非常勤講師（学部）	澤田 佳孝	美術とこころ
	西 英久	哲学入門
	西園 晃	微生物免疫論
	松田 美香	言語表現法
	大杉 至	社会学入門
	二宮 孝富	法学入門（日本国憲法）
	足立 恵理	文化人類学入門
	劉 美貞	韓国語
	宮本 修	音楽とこころ
	松本 佳那子	健康科学実験
	松本 昴	微生物免疫論
	松田 貴雄	看護と遺伝
	濱口 和之	看護と遺伝
	川野 由紀枝	看護と遺伝
	井伊 暢美	老年看護学概論 老年看護援助論

４－２　非常勤講師（大学院）	岩波 栄逸	老年診察・診断学特論
	山口 豊	老年診察・診断学特論
	大久保 浩一	老年診察・診断学特論
	永瀬 公明	老年診察・診断学特論 老年アセスメント学演習
	阿部 航	老年診察・診断学特論
	吉岩 あおい	老年診察・診断学特論
	工藤 欣邦	老年診察・診断学特論 老年疾病特論
	糸永 一朗	老年診察・診断学特論 老年疾病特論
	安東 優	老年診察・診断学特論 老年疾病特論
	古川 雅英	老年実践演習、小児実践演習
	佐藤 博	老年実践演習
	山本 真	老年実践演習
	財前 博文	老年疾病特論
	竹島 直純	老年疾病特論
	伊奈 啓輔	老年疾病特論
	小寺 隆元	老年疾病特論
	竹下 泰	老年疾病特論
	麻生 哲郎	老年疾病特論
	三浦 芳子	老年疾病特論
	増井 玲子	老年疾病特論、疾病予防学特論
	玉井 文洋	健康危機管理論
	三浦 源太	疾病予防学特論
	平川 英敏	薬剤マネジメント特論
	藤内 修二	広域看護学概論、健康危機管理論、疾病予防学特論
	池邉 淑子	疾病予防学特論
	足立 佐智子	健康危機管理論、健康リスクアセスメント演習
	本山 秀樹	健康危機管理論
	鈴木　正義	小児NP実習
	井上 敏郎	小児NP実習

大野 拓郎	小児アセスメント学演習 小児NP実習
岩松 浩子	小児アセスメント学演習 小児NP実習
金谷 能明	小児NP実習
糸長 伸能	小児NP実習
黒木 雪絵	小児アセスメント学演習 小児NP実習
江口 春彦	OSCE試験 小児NP探求セミナー
佐藤 圭右	小児アセスメント学演習 小児NP実習
後藤 愛	小児アセスメント学演習 小児NP実習
別府 幹庸	小児NP実習
松本 康弘	小児薬理学演習
福永 拙	小児NP実習
古賀 寛史	小児NP実習
宮﨑 文子	看護教育特論 助産マネジメント論
佐藤 昌司	周産期特論 周産期診断技術演習
飯田 浩一	周産期特論
豊福 一輝	周産期特論
軸丸 三枝子	周産期特論
後藤 清美	周産期特論
中村 聡	リプロダクティブ・ヘルス特論
嶺 真一郎	リプロダクティブ・ヘルス特論
菊池 聖子	助産マネジメント演習
戸高 佐枝子	助産マネジメント論
生野 末子	分娩期診断技術特論、助産マネジメント論、助産マネジメント演習
宇津宮 隆史	リプロダクティブ・ヘルス特論
上野 桂子	母子成育支援特論
堀永 孚郎	リプロダクティブ・ヘルス特論
井上 祥明	母子成育支援特論
谷口 一郎	リプロダクティブ・ヘルス特論
松田 貴雄	リプロダクティブ・ヘルス特論
井上 貴史	リプロダクティブ・ヘルス特論
疋田 利恵	地域母子保健学特論
吉冨 豊子	地域母子保健学特論
實崎 美奈	ウイメンズヘルス特論
立川 洋一	老年アセスメント学演習
久保 徳彦	老年アセスメント演習
原 正範	老年薬理学演習
塩月 成則	老年薬理学特論
大田 えりか	看護科学研究
塚本 容子	老年NP探究セミナー
小山 秀夫	看護政策論
前田 徹	老年実践演習
竹内 山水	老年実践演習
伊東 弘樹	老年臨床薬理学特論
佐藤 雄己	老年臨床薬理学特論
渡邊 めぐみ	分娩期診断技術特論
阿部 実	保健医療福祉政策論
大津 孝彦	地域保健特論
甲斐 香代子	地域保健特論

５　事務職員

	事務局長	堤 健一	H26.4.1 転入
・総務グループ	課長補佐	朝倉 泰三	
	主幹	岩﨑 瑞穂	
	副主幹	安森 竜次	H26.4.1 転入
	主査	渋谷 真由美	H26.4.1 転入
	主任	中野 麻梨子	
	主事	石川 華子	
	事務職員	池邉 尚美	H27.3.31 退職
	事務職員	黒木 亜紀	
	派遣職員	植松 尚子	H27.3.31 退職
・教務学生グループ	副主幹	工藤 哲生	
	副主幹	江田 真砂実	
	主査	染矢 哲朗	H26.4.1 転入
	主任	神﨑 正太	
	保健師	工藤 優	H26.4.1 採用
	事務職員	佐藤 めぐみ	H27.3.31 退職
	事務職員	神﨑 純子	H26.5.1 採用
・図書館管理グループ	非常勤職員	白川 裕子	
	非常勤職員	姫野 由美	
	非常勤職員	挾間 由布子	H26.4.1 採用